

山梨県東八代郡御坂町

上の原下割遺跡

—国道137号（上黒駒バイパス）建設に伴う発掘調査報告書—

2001.3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

山梨県東八代郡御坂町

上の原下割遺跡

—国道137号（上黒駒バイパス）建設に伴う発掘調査報告書—

2001. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序

本書は、国道137号線（上黒駒バイパス）建設工事に先立ち、1999年度に実施された、山梨県東八代郡御坂町上黒駒字上の原下割4489外に所在する上の原下割遺跡の発掘調査について、その成果をまとめたものであります。

上の原下割遺跡は、甲府盆地の東南部、御坂山地を開析して流れる金川に沿う小さな台地上に立地し、対岸には著名な「黒駒土偶」の出土地として知られる中丸遺跡も望まれるところであります。

発掘調査の成果につきましては、詳細は本文に報告するとおりでありますが、概観すると、縄文時代の遺構に、石囲い炉を持つ竪穴住居跡1、土坑4、陥し穴19などが確認され、遺物では縄文時代前期後半から後期前葉の土器や石器が出土しております。また中世の遺構では、竪穴遺構（竪穴状の建物跡）3、溝1、地下式坑10、土坑2などが確認され、遺物も土師質土器を始め、種々の資料が見られ、また土坑の一つからは古入骨の出土もありました。

縄文時代のものについては、本遺跡の西方にある桂野遺跡などの標点的な集落との関係において注目され、陥し穴などの存在から狩り場的な位置づけが想起されます。また中世においては、地元御坂町では初となる地下式坑の存在や竪穴遺構の有り様に注意が惹かれ、遺跡の北側を通過していた中世鎌倉街道などとの関連も視野に入ってくるわけですが、そうした複合的な遺跡の状況が、本書により具体的に記録できたものと考えます。

上の原下割遺跡における発掘調査からは、このような成果が得られたわけありますが、これをまとめた本報告書が本県における地域史の構築の一助となれば幸甚であります。

末筆になりますが、調査にあたり種々ご指導・ご協力いただきました関係各位、並びに調査に従事された皆様に厚くお礼申し上げます。

2001年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

例　　言

- 1 本書は、山梨県東八代郡御坂町上黒駒字上の原下割4489外に所在する上の原下割遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、国道137号線上黒駒バイパス建設工事に伴うものであり、県教育委員会が県土木部の委託を受け実施した。
- 3 発掘調査および整理調査は、つぎの日程で、県教育委員会の調査機関である山梨県埋蔵文化財センターが行った。

現地発掘調査（平成11年度）	1999年5月10日～同年8月9日
基礎整理調査（平成11年度）	1999年8月3日～2000年3月24日
本格整理調査（平成12年度）	2000年4月27日～2001年3月30日
- 4 本書の執筆・図版作成は、出月洋文・長田雅巳・望月郁也が分担し、編集は出月が行った。なお執筆の分担は、第2章を長田・望月、第1章、第3章第1節及び第4章第1～3節を長田が担当し、出月がそれに加筆するとともにその他を担当している。
- 5 遺構写真の撮影については出月・長田が担当し、遺物写真的撮影は出月が行った。
- 6 本調査に係る次の業務を外部委託して実施した。また、その成果は本書に反映されている。
 - ①空中写真撮影（パルーン使用）を、㈱一潮調査設計（甲府市）に委託した。
 - ②遺構全測図の編集浮書きを、㈱中日本航空静岡営業所（静岡市）に委託した。
 - ③出土古人骨の形質鑑定を、聖マリアンナ医科大学解剖学教室平田教授ほか（川崎市）に依頼した。
 - ④出土黒曜石の産地同定を、沼津工業高等専門学校物質工学科望月教授（沼津市）に依頼した。
 - ⑤出土銅製品の成分分析を、川鉄テクノリサーチ㈱（千葉市）に委託した。
- 7 本調査に係る資料（出土遺物、記録図面・写真等）は一括して、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 8 発掘・整理調査に際し、下記の方々・機関からご協力・ご教示を頂いた。記して感謝申し上げたい。

御坂町役場、御坂町教育委員会、御坂町坂野地区、御坂町坂野地区水道組合、帝京大学山梨文化財研究所、望月和幸（御坂町教育委員会）、瀬田正明（一宮町教育委員会）、室伏徹（勝沼町教育委員会）、荻原三雄・鈴木稔・畠大介・河西学・宮澤公雄・平野修・権原功一（帝京大学山梨文化財研究所）

（順不同、敬称略）

凡　　例

- 1 遺構番号は、それぞれ確認の順に付したものである。
- 2 掘載遺構図の縮尺は、とくに断りのない限り、住居跡・竪穴遺構が80分の1、住居跡の炉などの微細図が40分の1、土坑・陥落穴が40分の1、地下式坑が50分の1、溝跡が60分の1となっている。
- 3 掘載遺物図は、縄文時代土器実測図が6分の1、縄文時代土器拓影が4分の1、縄文時代の石器が3分の1もしくは3分の2、中世の土器が4分の1、錢貨が2分の1などとなっている。

本文目次

序 文 例言・凡例 目 次

序章 調査報告のあらまし

第1章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過ならびに概要	1
第3節 調査組織	2

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

第3章 調査の方法と順序

第1節 調査区の設定と遺構調査	5
第2節 基本順序	6

第4章 発見された遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物	7
第2節 中世の遺構と遺物	12
第3節 年代不明の遺構	17
第4節 遺構外の遺物	19
第5節 出土遺物の理化学的分析	54

第5章 調査のまとめ

第1節 縄文時代の遺構・遺物について	60
第2節 中世の遺構・遺物について	61
第3節 おわりに	64
(参考文献)	64

挿図目次

第1図 調査区の設定状況	1
第2図 上の原下削遺跡の位置とその周辺	4
第3図 調査区の設定およびグリッド配置	5
第4図 基本順序模式図	6
第5図 縄文時代の遺構の分布	8
第6図 中世の遺構の分布	13
第7図 1号住居跡と出土土器	20
第8図 1・11・21・22号土坑	21
第9図 1・2号陥し穴	22
第10図 3・4・5号陥し穴	23
第11図 6・7・8号陥し穴	24
第12図 9・10・11号陥し穴	25
第13図 12・13・14号陥し穴	26
第14図 15・16・17号陥し穴	27

第15図 18・19号陥し穴	28
第16図 1・3号竪穴遺構	29
第17図 2号竪穴遺構・1号屋外炉	30
第18図 9・27号土坑(墓坑)	31
第19図 1号溝	32
第20図 1号地下式坑・8号土坑	33
第21図 2・3号地下式坑	34
第22図 4号地下式坑	35
第23図 5・9・10号地下式坑	36
第24図 5・9・10および6号地下式坑	37
第25図 7・8号地下式坑	38
第26図 2～5・7号土坑	39
第27図 10・12・13号土坑	40
第28図 14～17号土坑	41
第29図 18～20号土坑	42
第30図 23～26号土坑・1号屋外炉	43
第31図 1・11・22号土坑出土土器	44
第32図 縄文土器—遺構外(1)	45
第33図 縄文土器—遺構外(2)	46
第34図 縄文土器—遺構外(3)および石器	47
第35図 土師質土器・内耳系土器	48
第36図 雑器ほか・遺構外出土土器類	49
第37図 その他の出土遺物	50
第38図 黒曜石産地推定判別図	56
第39図 銅製遺物のPb/Cu-Sn/Cu分布図	59
第40図 地下式坑の方位	62

図版目次

図版1	調査区全景写真
図版2	発掘調査の経過等(1)
図版3	発掘調査の経過等(2)
図版4	1号住居跡
図版5	1・11・22号土坑
図版6	1～5号陥し穴
図版7	6～12号陥し穴
図版8	13～19号陥し穴
図版9	1号竪穴遺構
図版10	2・3号竪穴遺構、屋外炉
図版11	1号溝
図版12	9・27号土坑(墓坑)
図版13	1・5・9号地下式坑
図版14	2・3号地下式坑
図版15	4・6・7・8号地下式坑
図版16	2・7・10・14・17・23～26号土坑
図版17～19	縄文時代の土器
図版20	縄文時代の石器・弥生～古墳時代の土器
図版21	中世の土器
図版22	中世のその他の遺物
図版24	1号竪穴遺構銅製品及びその他の遺物

序章 調査報告のあらまし

1 はじめに

上の原下削遺跡は、東八代郡御坂町の上黒駒地区にある縄文時代と中世の遺跡です。

この報告書は、今回の上の原下削遺跡における発掘調査、すなわち字上の原下削4489番地ほかの約3,000 m²を対象に、埋蔵文化財記録保存のための調査の成果をまとめたものですが、この章では本書を利用する際の手引きとなるよう、調査の概要を整理しておきます。

2 調査の進められ方

(1) 調査に至るまで

この調査が実施されることとなったのは、当地を国道137号線の上黒駒バイパス建設工事の計画がなされたからで、事前に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の確認をしたところ縄文時代と中世の大きく二つの時期にまたがる遺跡であるが明らかになりました。この試掘結果を受けて工事主体の県土木部と県教育委員会とで協議し、1999(平成11)年の5月10日から8月9日までの日程で発掘調査し、調査成果をもって記録の上で保存するという対応がとられたことになりました。経過や調査の体制は第1章に詳述されます。

(2) 調査の方法

調査の方法は、まず試掘調査でわかった埋蔵文化財までの深さのデータをもとに、そのすぐ上までの土(表土)を重機によって除去し、その後は人手によって遺構確認や遺構の掘下げ、遺物の取上げなどを進めていきました。どのような配置で住居跡などの遺構が確認されたか記録を取るために10m間隔の杭(グリッド)を設定し、それに基づいて測量したり、各段階での写真撮影などを行いました。

現地調査終了後は、出土遺物のデータ化や調査中の図面・写真等による記録類の整理などを進め、本書が作成されました。調査方法の詳細は第3章にあります。



陥れ穴の調査のようす(1号陥れ穴)

3 調査で発見されたもの

細かな内容は第4章に報告のとおりですが、ここでどのようなものが出土したのかを概観しておきます。

(1) 縄文時代の遺構と遺物

この時代の遺構は、1つだけ確認された竪穴住居跡と、土坑が4基、陥れ穴が19基が確認されました。

このうち3基の土坑からはやまとまとて土器などの遺物が出土していますが、いずれも縄文中期前半の時期のものでした。住居跡や陥れ穴には明確に伴う遺物が見られないもののおよそ縄文中期と見られるものでした。このほか遺構は伴わないものの前期から中期や後期の土器片も調査区のそこそこから採集されています。

(2) 中世の遺構と遺物

中世の遺構では、竪穴遺構(竪穴状の建物跡)が3、溝が1、地下式坑が10、土坑が2といった状況で確認されています。

また遺物は、「かわらけ」ともよばれる土師質土器の皿やすり鉢、ひで鉢、北宋錢、刀子、銅製品残欠、古骨などが出土地でいます。

(3) 年代不確定の遺構

今回の調査では遺物を伴わないと時代が確実につかめない土坑が21基と屋外が1基確認されました。土坑の多くは縄文時代のものかと見られます。また平たい石を組み合わせて造られた屋外伊は、中に多くの炭や灰土が詰まっているもので、はじめ縄文時代のバーベキュー場との見方もありました。状況的に見てより新しいと推定されるものでした。

(4) その他の遺物

たいへんわずかな資料ですが、弥生時代後半から古墳時代の初めにかけてのものと見られる土器片が数点確認されています。しかしながらその時期の遺構は確認するにいたりませんでした。

(5) 出土遺物の理化学的分析

第4章第5節にその詳細がありますが、調査の一環として出土遺物のうち、①27号土坑出土の古人骨の形質鑑定、②遺構及び遺構外出土の黒曜石製石器



調査区西半ぶの作業状況

及び薄片20点の石材産地同定、③1号竪穴遺構出土銅製品残査の成分分析の3件について、関係機関の協力を得て理化学的な手法での分析を行いました。

27号土坑に埋葬されていた成人人骨は、前後に芋積み（おうみ）のような生業に携わることによってできる特殊な摩耗が見られるという所見が得られました。

また本遺跡から採集された20点の石器等の素材である黒曜石は、蛍光X線分析による原石の产地同定の結果、長野県の和田岬から蓼科辺りを原産地とするものが大部分であるが、2点だけ伊豆の神津島方面からもたらされた黒曜石であることが判明しています。

さらに出土した時点では青銅製と見ていた1号竪穴遺構の資料は、蛍光X線分析の結果、青銅ではなく、縄青に覆われた銅製品であることも明らかになりました。

4 調査の結果わかったことと今後の課題

第4章に報告の成果をもとに、いくつかの視点で検討を行った結果は、つづく第5章に記述されます。大まかには次のようなことになります。

(1) 繩文時代について

i) たった1軒の竪穴住居跡

竪穴住居跡は明確な伴出遺物がないのですが、中程に設けられた石圍いの炉を含め、その形態から繩文中期の前半もしくは半ば頃のものと見られるもの



遺物の多く見られた土坑（22号土坑）



地下式坑の内部のようす（2号地下式土坑）

です。かなり広い範囲を調査してもかかわらず、1軒だけというのはちょっと不思議です。

ii) 遺物の多く見られた土坑

繩文中期の1号土坑、11号土坑、22号土坑の3つの土坑からは、比較的まとまった繩文土器が出土しています。完全な形に復元されるものではないですが、大きめの破片を用いたその状況から墓穴であった可能性が考えられます。

iii) 散在する陥し穴

調査範囲内から点々と19基の陥し穴が確認されています。個々の陥し穴の年代の決め手となるような、直接それに結びつく遺物は確認されていませんが、おそらく繩文時代中期のものではないかと思われます。それらは、当時の現地の土地利用が居住よりも狩り場的な状況であったことを物語るのではないかと見られます。

(2) 中世の時期について

i) 類例の少ない竪穴遺構

調査区の西北部には、近接して3つの竪穴遺構が確認されました。これは竪穴式の建物の跡と見られます。いずれも四角形の平面形をしていましたと思われますが、斜面の下側が削られて完全な形をとどめるものではありません。あまり類例もわかつていませんが、居住というより何か作業小屋のような雰囲気が感じられるもののように見られます。

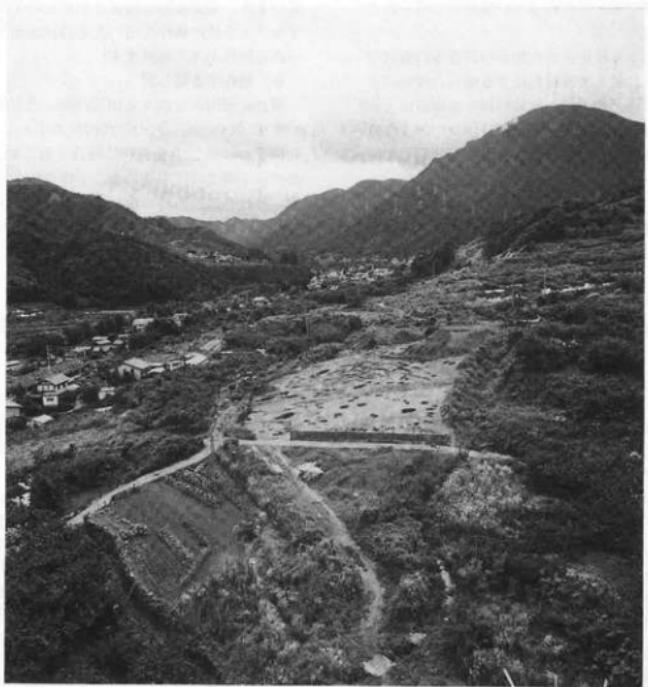
ii) 謎の多い地下式坑（ちかしきこう）

「地下式坑」というあまり聞き慣れない遺構は、中世に造られた地下室で、関東地方から中部地方にかけてよく見られるものです。この謎めいた地下室を当時の人たちはどのように利用していたのかについては、特定の人の葬送儀式に結びつくものではないかとか、貯蔵のための穴だというような説もあります。

このような地下式坑が、上の原下削道路から10基も確認されました。県内では北巨摩地域にまとまった調査例があるほか、各地で少しづつ発見されていますが、この御坂町では初めての調査例となります。結局、今回の調査でも地下式坑に直接結びつく遺物は発見されず、その用途を解明する糸口はつかめませんでした。しかし、ローム層を掘りこんでつくった地下室の壁には、掘るときに用いた鉤の歯の形が明瞭に残っており、当時の人々の生活の様子を垣間見ることができます。

(4) 今後の課題

このたびの上の原下削道路の発掘調査は、一定の新知見が得られましたが、道路幅ということに限定された中で、歴史的な性格の把握に十分でない所も多く、それらは今後の課題として引き続いて研究されるべきものと考えられます。



背後に御坂峠を望む道路の全景



1号竪穴住居の状況（手前の黒い部分は5号地下式坑）

第1章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査に至る経緯

国道137号線は、山梨県の中心部の中府盆地エリアと、富士北麓地域、さらにその先の静岡県方面とを結ぶ動脈として古くより重要な役割を担ってきた。しかし、昭和63（1988）年に供用開始された中央自動車道の開通やこれにアクセスするための一宮・御坂インターチェンジが設置されたことも一因となって、車両交通量が大幅に増加した。また、この国道はカーブが極めて多く、高低差も激しいため、毎年多くの交通事故を引き起こす要因となっていた。そうした状況を解消するため、この御坂町上黒駒地内にバイパス建設事業が計画された。

この計画路線内の埋蔵文化財の取り扱いについては、事業主体である県土木課（道路建設課・石和土木事務所管）と県教育委員会（学術文化財課）との協議により、年度ごとに用地取得された段階で試掘調査を進め、範囲が絞り込まれた埋蔵文化財について記録保存の措置をとることが確認され、事業が進められてきた。こうした進め方で、平成7年度（1995）から試掘調査が開始され、また翌8年度から3か年にわたって桂野遺跡、10年度には西馬鞭遺跡の本調査などが行われている。

上の原下削遺跡は、平成10年度分の事業化のための協議の中で、新たに埋蔵文化財の有無の確認が必要とされた上黒駒地区の小字「上の原下削」における路線延長350m区間について、同年12月に県埋蔵文化財センターが試掘調査を実施した結果、確認されたものである。

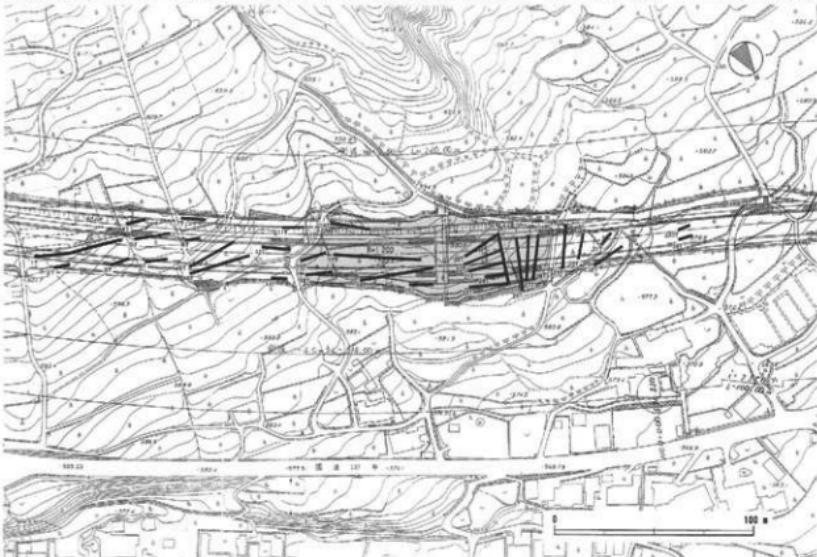
この試掘調査の成果により明らかとなった上の原下削遺跡は、直ちに周知化され、これを受けて土木部と学術文化財課および調査を担当する埋蔵文化財センターの3者で、計画地における埋蔵文化財（上の原下削遺跡）の取り扱いを協議、調整した結果、翌平成11年度に本格的な発掘調査に取り組むこととされた。

第2節 発掘調査の経過ならびに概要

（1）試掘調査

試掘調査は、前節に見た経過の中で、平成10（1998）年12月1日から12月11日まで実施された。

試掘調査の対象面積は、約13,000m²で、道路建設予定図に基づいた路線上に、結果的に試掘坑を計34本設定し、重機による掘削の後、人力によって精査を行い、埋蔵文化財の有無について確認を行った。その結果、試掘対象



第1図 道路計画と遺跡の確認状況

（アミ点の部分が路線内の遺跡の範囲）

面積の約4分の1ほどの部分（約3,000m²）において、縄文時代及び中世の遺構・遺物の分布が明らかになった。

この試掘結果により存在が明らかとなった埋蔵文化財は、遺跡所在地の小字名に従って、上の原下割遺跡と命名された。

（2）本調査

上の原下割遺跡は、次章でも詳細にふれるが、甲府盆地東部に連なる御坂山塊の末端に形成された緩やかな斜面の桂野台地上に位置し、標高は約586から594mとなっている。

平成11（1999）年5月10日から8月9日までの調査期間で、約3,000m²を調査した結果、縄文時代及び中世の複合遺跡としての具体的な内容が、あらためて確認された。

縄文時代の遺構は、石囲い炉を持つ竪穴住居跡1、土坑4、陥し穴19が確認され、遺物では縄文時代前期後半から後期前葉の土器及び石器が出土している。

また中世の遺構では、竪穴遺構（竪穴状の建物跡）3、溝1、地下式坑10、土坑2が確認された。遺物は土師質土器を中心に、すり鉢、火出鉢、北宋銭、刀子、銅製品残欠、古入骨などが出土している。

なお、この他に時期の限定が明確できなかった土坑が21基と屋外炉が1基が確認されている。

（3）整理調査

整理調査は、上の原下割遺跡の現地発掘作業終了後、11年度末まで、遺物の洗浄、注記、図面等のデータ整理などの基礎的な整理調査を行い、12年度に報告書刊行に向けての本格的整理調査を9月まで行い、以後発掘調査報告書の編集から刊行までの作業を進めた。

第3節 調査組織

上の原下割遺跡の発掘調査（現地作業）並びに整理調査に関する組織は、以下のとおりである。

調査主体 山梨県教育委員会（所管課：学術文化財課）

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 平成11年度（発掘調査）

　　調査研究第一課調査第二担当　　出月洋文・長田雅巳

平成12年度（整理調査）

　　調査研究課調査第三担当　　出月洋文・望月郁也

発掘調査作業員

雨宮行子、飯島澄子、石原由美子、宇佐美理恵、金子浩江、久保田明義、河野逸広、越石力、小林文造、三枝明男、塩澤太郎、篠本明美、清水英二郎、杉原俊男、須田良子、土屋重男、中込幹一、中込よしみ、野本憲雄、古屋清美、村田静一、山崎靖子、渡辺和子（以上、11年度現地調査）

石原由美子、今村香恵子、佐野治美、三科政子（以上、11年度整理調査）

猪股順子、大塚敦子、志村君子、土橋園子（以上、12年度整理調査）

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

本遺跡は、山梨県東八代郡御坂町上黒駒字上の原下割4489外に所在する。

御坂町はその町域の70%近くが山地であり、残る部分が金川扇状地と天川扇状地からなっている。御坂山脈の八町付近より源を発する金川は、多くの支流を集め、山間部を12kmほど流れ下った上黒駒の字若宮の辺りで、山地から扇状地に入り、さらに7kmほど流れて笛吹川に合流する河川である。金川は山間部で深い谷を刻んでいて、その右岸は断崖崖面となり、左岸には山麓斜面が多く、河岸段丘が発達している。

この金川の谷が幅を広め、山地から平地になる若宮付近の左岸一帯には、桂野台地と呼ばれる台地があり、本遺跡はこの台地の上流側の延長に当り、緩やかに流れ出る段丘の端部に位置している。遺跡の及ぶ範囲の標高は、約586mから594mとなっている。

遺跡が立地する台地は、南側に大柄山(1414m)と大堀山(767m)の峰があり、その間の北側で、北向きのなだらかな斜面となっている。詳細に見れば、台地は西ノ沢によって形成された扇状地であるといえ、この扇央や扇端部にかけていくつかの遺跡が分布し、本遺跡もそのうちの一つになっている。

第2節 歴史的環境

上の原下割遺跡の所在する御坂町域は、原始より古代にいたる間の歴史が刻まれた遺跡が、比較的濃密に分布する地域である。

旧石器時代の良好な資料には、まだ恵まれていないが、縄文時代では、本遺跡周辺の山間地ないし金川扇状地の扇端部付近にまとまって遺跡の存在が確認されている。とくに本遺跡の周辺では、怪奇な形相をした「黒駒土偶」を出土したことで有名な、金川右岸の上黒駒の相沢地区にある中丸遺跡や、縄文中期の特徴ある渦巻文と波状文を施した著名な円筒形の深鉢形土器と多くの住居跡が確認されている桂野遺跡などが有名である。さらに金川水系からは離れるが、町の南東部にあたる竹居地区に縄文前期の諸磁式土器の標式的な遺跡として知られる花鳥山遺跡、あるいは縄文時代早期から晩期に渡る長期で、かつて大型大珠を出土した三光遺跡などが見られる。

弥生時代の遺跡は、金川扇状地の扇端部に寄った地域にいくつかの遺跡が点在しているようだが、これまでに報告されている好資料は多くない。

続く古墳時代だが金川扇状地の扇央部を中心に、集落遺跡や古墳の築造が確認されている。本町の古墳は前方後円墳などの前期古墳の流れを持つ巨大な古墳はほとんど見られず、その大部分が後期古墳の横穴式のものばかりである。ただし、特殊なものとして比較的古い古墳に比定されるものとして、成田の亀甲塚古墳がある。また下井之上的姥塚古墳は、巨大な横穴式石室の遺構を伴い、全国的に見ても有数の規模を誇るものとして存在している。扇央部には、さらに7世紀に盛期をおく錦生古墳群や長田古墳群などが広範な広がりを見せている。

また、これらの古墳築造の関係も示唆される古墳時代から平安時代にかけての大規模な集落遺跡として知られる二之宮遺跡・姥塚遺跡なども注目されるもので、周辺にはまだ十分に実態の把握がされていない伝統的な古代集落が予想されるところである。

奈良～平安時代に目を移すと、北3.5kmの東山梨郡春日居町に国府、本県最古の寺本庵寺跡、北東2.7kmの東八代郡一宮町に国分僧寺、国分尼寺などの重要な遺跡が周辺に点在している。さらに国衙地区には、その地名や土地区画などを手がかりに、第二次の甲斐国府跡を想定する考え方が定説的といわれている。これに関してはまだ良好な遺構に当たっていないが、成田地区の地耕面遺跡では律令的祭祀の状況を窺わせる調査成果が知られている。

また本遺跡の北側には、東海道を横走駅で分岐し、御坂峠を越えて甲斐の国府に至る古代の官道が通過していることが想定されている。いわゆる「甲斐路」であるが、当地は律令体制下の中央と地方を結ぶ交通の要衝であったといえる。この「甲斐路」は、中世以降も重要な交通路であり続けるが、中世まで時代が下ると「鎌倉街道」の呼称が一般的になる。ちなみに本遺跡の北側にそびえる御坂山地の支脈上には、文明19(1487)年の文書にもその存在が登場する旭山砦も知られており、そうした中で、本遺跡の調査で、竪穴遺構や地下式坑など、該段の好資料が得られたことは重要な意味を持つのではないかと思われる。

以上見たように、本町を含めた周辺地域は、本県の歴史上に大きな比重を持った地域といえるのではないかと考えられる。



第2図 上の原下割遺跡の位置とその周辺

- | | | | | |
|-----------|----------|--------------|---------|----------|
| 1 上の原下割遺跡 | 2 西馬籠遺跡 | 3 中丸遺跡 | 4 桂野遺跡 | 5 甲斐国分寺跡 |
| 6 甲斐国分寺尼跡 | 7 鮎塚古墳 | 8 二之宮遺跡・鮎塚遺跡 | 9 長田1号墳 | 10 織姫塚古墳 |
| 11 弾薙窓古墳 | 12 花鳥山遺跡 | 13 三光遺跡 | 14 原山遺跡 | |

第3章 調査の方法と層序

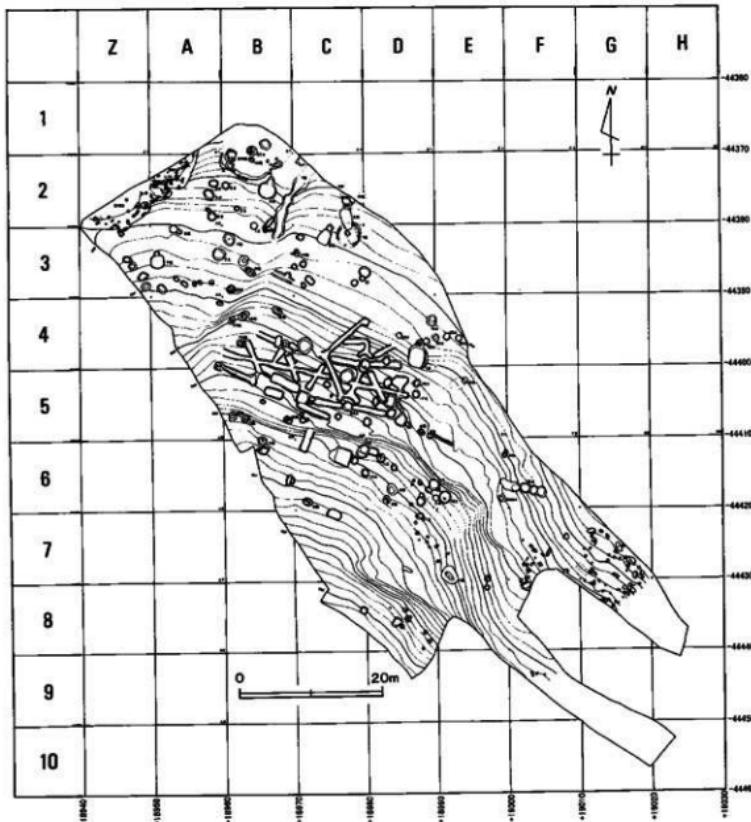
第1節 調査区設定と造構調査

(1) 調査区の設定

上の原下削遺跡における今回の発掘調査区は、第1章でもふれたように、事前に行われた試掘調査の成果に基づいて設定された。すなわち、切り通しで通過する国道バイパスの道路幅プラス両側の法面敷き、最大40mの幅で、延長130m弱の範囲であるが、南東側の谷状の地形になる部分に、当初、水場造構の予想がされていたが部分的な造構確認作業の結果、時々の出水で流れらしく、造構が見られないエリアが発生したので、結果的に本調査の対象面積は約3,000m²となっている。

(2) グリッド配置

調査区は、南北方向をX軸、東西方向をY軸とする国上座標系に準拠した10mメッシュをかけ、X・Y両軸の10mごとの交点に基準杭を打ち、グリッド設定を行っている。なお、調査区の北西隅に置いた基点の国上座標は、X=-44,360.000, Y=18,950.000である。



第3図 調査区の設定およびグリッド配置

グリッドの名称については、第3図のとおりであるが、基点から南に向かって1から順に10までの数字を割り当て、基点から東に向かってAからHまでのアルファベットを割り当て、Aの西側にZを設定し、両者を合せて「A-1」とか「E-7」のようなグリッド名とした。

(3) 造構調査の方法

調査区設定後、重機により耕作土など表土を除去し、その後、造構確認面上からは人力で精査し造構の検出に努め、確認された造構から順次移植ゴテ等による掘り下げ作業を行った。

出土した遺物の記録・取り上げは以下の方針を行った。

①造構確認以後の出土遺物は原則として光波測量機・コンピュータを用い、全点について3次元的に位置データを登録しながら、取り上げを進めた。

②造構内については、基本的にセクションベルトを設定し、それ以外を底面まで遺物を残しながら掘り下げる。遺物の記録及びセクションベルトの土層の記録終了後に、ベルトも同様に掘り下げ遺物の記録を行う。

造構の図化記録作業は、原則的に1/20ないしは1/40の縮尺で平板測量した。また造構全体図は調査と平行して1/200縮尺で平板測量し、同時に20cm間隔のセンターを測り込んでいる。

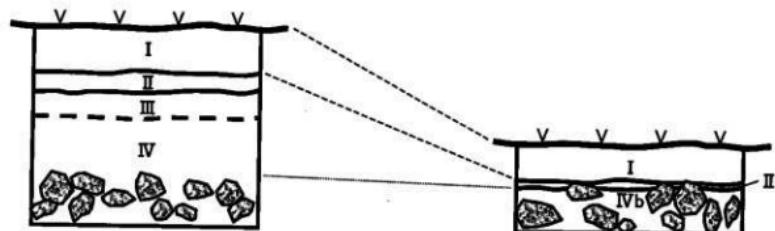
現地調査に係る写真撮影は、35ミリ判カメラで、カラーポジ・カラーネガ・モノクロネガの3種類のフィルムを使用して、担当職員が随時進めた。

空中写真撮影は、造構全体図をすべて現地測量によることとして、景観的な記録のみを目的としたものであったため、調査の終了に近い段階で、係留バルーンによる撮影を実施している。

第2節 基本層序

今回調査の実施範囲における標準的な層序は、第4図に示した模式図のような状況であった。図中のI層は暗褐色土で、常時耕作が及ぶ表土層であり、平均して30cm程度の厚さである。II層も暗褐色土であるがいくぶん黒味と緑色が増す漸移層的なもので、数cm程度の厚さである。III層は地山の上部にあたる暗黄褐色土で、いわゆるソフトロームである。この層以下は遺物を含まず、基本的にはこの層の上面が造構確認面となっている。IV層はよく緑まった黄色味の強い褐色土で、ハードロームである。このIV層の下は、大小の礫が多く混じる、地山の基盤をなす土層である。試掘調査で造構の見られない隣接地を深掘りした際に、そうした扇状地性の堆積が確認された。

なお、調査区の東側の南から北に流下する谷状地形部では、III層及びIV層は、かなり流失したものと見られ、変質したIV層の中に礫層が露頭する状況が確認された（第4図のB）。



A. 標準土層模式図

B. 谷部土層模式図

第4章 発見された遺構と遺物

今回の調査で明らかになった遺構は、縄文時代についてのものとして、石圓いがを持つ竪穴住居跡1、上坑4、陥し穴19があり、中世のものとしては、竪穴遺構3、溝1、地下式坑10、土坑（墓坑）2が確認されている。この他に、時期の限定ができなかった土坑が20基と屋外炉1が確認されている。ここでは以下に、これらの遺構とそれに伴う遺物について、遺構ごとに報告し、さらに遺構外遺物を追って年代順に取り上げ、報告する。

第1節 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号住居跡（第7図・第34図131、図版4・17・20）

調査区の北寄り、C-3グリッドの北東隅にあって、試掘調査の段階で確認されていた竪穴住居跡である。5号地下式坑と重複する。すなわち、後世にこの住居跡の北北西方向から掘り進め構築された5号地下式坑は、住居床面の1mほど下を天井とし、南壁近くまで達する状況にある（第23図参照）が、その後の地下式坑の天井の崩落により、その北側の一部の床面が消失している。

平面形は、ほぼ円形を呈し、径3.40mを測る。主柱穴は5本であったと考えられるが、そのうち4本が確認された。残りの1つは5号地下式坑による欠失部分に存在したものと推定される。ピット1は径24cm・深さ42cm、ピット2は径14cm・深さ65cm、ピット3は径30cm・深さ18cm、ピット4は径27cm・深さ54cmを測る。柱穴の配置等の状況から見て、出入口は南側と推定され、主軸はN-10°-Wと考えられる。壁は直に近く立ち上がり、壁高は南半では30~40cmを測るが、北側では削平を受けている。周溝も北側を除き、ほぼ断続的に一回すると考えられ、幅20~40cm、深さ10~20cmとなっている。

炉は、住居跡のほぼ中央付近に存在する石圓いがで、大きさは主軸方向で95cm、幅90cm、深さ40cmを測る。平板な角礫を組み合わせた構造で、石には被熱の痕が認められ、堆積土の中にも繊かな炭化材が多く認められたが、土器や食物残滓などは確認されなかった。

埋甕や床底といった住居跡に明確に伴うと見られる出土遺物は確認されなかったが、覆土中からは第7図1~14の土器片と15の土器片鍤が検出され、石器では第34図131の搔器が1点採集されている。

本住居跡の年代は、住居や炉の形態および覆土中の遺物の状況などから、縄文時代中期前半の藤内式期から井戸戸式期にかけてのものではないかと考えられる。

(2) 土坑

1号土坑（第8図・第31図16~18・第34図129、図版5・17・20）

B-2、B-3グリッドのほぼ中間に位置する。他の遺構との重複はない。平面は円形を呈しており、径は90cmを測る。また底面までの深さは48cm程度である。底面は平坦であり、壁は中程から上が袋状にオーバーハングして縁辺に至っている。

覆土より出土した遺物は、縄文土器59点（2329g）、石器2点（53g）、黒曜石片4点（11.5g）があった。このうち図示可能なものに第31図の16、17の2点の深鉢形土器がある。いずれも土坑内の覆土下位からの大型破片である。また石器には第34図129の打製石斧がある。

この1号土坑は、16、17の土器がその年代を示すものと判断され、縄文時代中期前葉の藤内期と見られる。

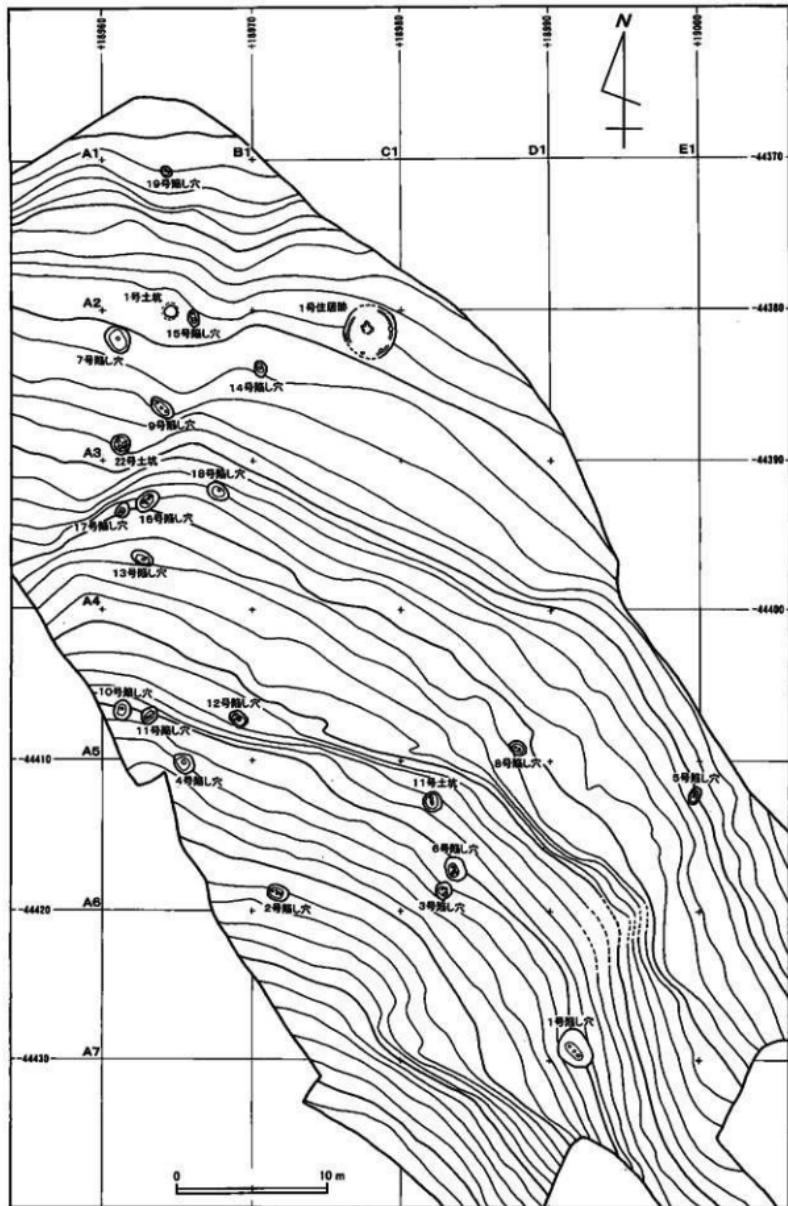
11号土坑（第8図・第31図19a・b、図版5・17）

D-6グリッド内の北西寄りに位置する。平面は整った円形を呈し、他の遺構との重複はない。径は1.25mで、確認面から底面までの深さは最深部で33cmを測る。底面は、ほぼ平坦であり、壁は直に近く立ち上がっている。

土坑内よりの出土遺物は、縄文土器片がほとんどで、その量は10点（1685g）を数えた。このうち本来1つの個体であった2つの比較的大きな破片が、底面から5cm前後浮き、ほぼ水平に検出されたのが目を引いた。第31図の19のa・bとして図示したものがそれである。円筒形をした大型の深鉢形土器に図上復元されたが、これも藤内期の所産と位置づけられるもので、11号土坑の年代もこの時期のものと考えられる。

21号土坑（第8図、第34図130）

D-7グリッド内の北東寄りに位置する。この土坑の平面形は長径105cm、短径75cmの不整形で、深さも最深部20cm程度と皿状の浅いものである。底面には起伏があり、窪みには砂利の混入が見られ、底面近くには拳大の礫が散点まとまってみられるなど他の土坑とは様相を異にしている。



第5図 繪文時代の遺構の分布

この土坑からの出土遺物としては、縄文土器片2点(5.5g)と石匙1点(15g、第34図130)があった。これらの遺物から、土坑の年代も縄文時代中期かと位置づけたが、1号土坑、11号土坑、それに22号土坑などと比較すると若干不確定な要素がある。

22号土坑(第8図・第31図20~24、図版5・18)

B-3グリッド内で、その南西隅に確認された。土坑の平面形は円形で、他の遺構との重複はない。径は1.15mを測り、確認面から底面までの深さは最深部で23cmとなっている。底はほぼ平坦であり、壁は直に近く立ち上がる。

出土遺物は、縄文土器片が中心だが、その量は他の土坑よりも格段に多く、54点(4338.5g)となっている。そのうち図上に復元されたものは、第31図に20~24としたものがそれで、これらも縄文時代中期前葉の藤内期の所産としてとらえられるものである。

これらの土器の出土状況であるが、底面から数cmのレベルに敷き詰められるような状態で24の土器があり、それに重なるように他の土器や数個の20cmほどの様が出土している。また、覆土中からは少量の炭化物も検出されている。土坑の時期は24の土器が決め手となると思われ、やはり藤内期と位置づけられよう。

(3) 陥し穴

陥し穴は、19基が確認されたが、内容を項目立てに沿って検出順に見てゆく。

1号陥し穴(第9図、図版6)

位 置 E-7・8グリッド中央西寄りに位置する。

形態・規模 楕円形。2.55m×1.8mで、深さは1.45m。

底・壁 底面は平坦で楕円形を呈し、小ピットは3個確認された。壁は直に近く立ち上がる。

出土 遺 物 なし。

備 考 斜面に対してほぼ直交。

2号陥し穴(第9図、図版6)

位 置 C-6グリッド南西隅に位置する。

形態・規模 楕円形。1.5m×1.1mで、深さは55cm。

底・壁 底面は平坦で楕円形を呈し、小ピットは4個確認された。壁は直に近く立ち上がる。

出土 遺 物 なし。

備 考 斜面に対して直交。

3号陥し穴(第10図、図版6)

位 置 D-6グリッド南西寄りに位置する。

形態・規模 円形。1.15m×1.15mで、深さは75cm。

底・壁 底面は、ほぼ平坦で楕円形を呈し、小ピットは3個確認された。壁は軸方向では直に近く、その他では45度近くの立ち上がりとなる。

出土 遺 物 なし。

備 考 斜面に対して直交。

4号陥し穴(第10図、図版6)

位 置 B-6グリッド北寄りに位置する。

形態・規模 卵形。1.35m×1.2mで、深さは65cm。

底・壁 底面は平坦で隅丸方形をなし、小ピットは3個確認された。壁は直に近く立ち上がる。

出土 遺 物 なし。

備 考 斜面に対して直交。

5号陥し穴(第10図、図版6)

位 置 E-6グリッド北東寄りに位置する。

形態・規模 楕円形。1.4m×1.05mで、深さは65cm。

底・壁 底面は、ほぼ平坦で楕円形を呈し、小ピットは4個確認された。壁は丸みをもって立ち上がる。

出土 遺 物 なし。

備 考 斜面に対して直交。

6号陥し穴 (第11図、図版7)

位 置 D-6グリッド中央よりやや南西寄りに位置する。

形態・規模 橢円形。1.55m×1.25mで、深さは60cm。

底・壁 底面は、ほぼ平坦で楕円形をなし、小ピットは7個確認された。壁は45度近くに立ち上がる。

出土遺物 なし。

備 考 斜面に対して直交。

7号陥し穴 (第11図、図版7)

位 置 B-3グリッド北西寄りに位置する。

形態・規模 楕円形。1.8m×1.45mで、深さは95cm。

底・壁 底面は平坦であり、隅丸方形小ピットは1個確認された。壁は直に近く立ち上がる。

出土遺物 なし。

備 考 斜面に対してほぼ直交。

8号陥し穴 (第11図、図版7)

位 置 D-5グリッド南東寄りに位置する。

形態・規模 卵形。1.0m×0.75mで、深さは45cm。

底・壁 底面はほぼ平坦で卵形をなし、小ピットは2個確認された。壁は直に近く立ち上がる。

出土遺物 なし。

備 考 斜面に対してほぼ直交。

9号陥し穴 (第12図、図版7)

位 置 B-3グリッド中央よりやや南西寄りに位置する。

形態・規模 楕円形。1.65m×0.85mで、深さは55cm。

底・壁 底面は、ほぼ平坦であり楕円形を呈し、小ピットは3個確認された。直に近く立ち上がる。

出土遺物 なし。

備 考 斜面に対して直交。

10号陥し穴 (第12図、図版7)

位 置 B-5グリッド南西寄りに位置する。

形態・規模 卵形。1.45m×1.1mで、深さは52cm。

底・壁 底面は、ほぼ平坦で不整形形であり、小ピットは1個だけ確認された。直に近く立ち上がるが部分的に階段状の立ち上がりも見られる。

出土遺物 なし。

備 考 斜面に対して平行。

11号陥し穴 (第12図、図版7)

位 置 B-5グリッド南西寄りに位置する。

形態・規模 楕円形。1.2m×1.1mで、深さは58cm。

底・壁 底面は平坦で卵形をなし、小ピットは4個確認された。壁は直に近く立ち上がる。

出土遺物 なし。

備 考 斜面に対して平行。

12号陥し穴 (第13図、図版7)

位 置 B-5グリッド南東寄りに位置する。

形態・規模 不整形形。1.2m×0.95mで、深さは35cm。

底・壁 底面は、ほぼ平坦で不整形形を呈し、小ピットは5個確認された。壁は直に近く立ち上がる。

出土遺物 なし。

備 考 斜面に対してほぼ直交。

13号陥し穴 (第13図、図版 8)

位 置 B-4 グリッド中央よりやや南西寄りに位置する。
形態・規模 橢円形。1.4m × 0.75m で、深さは63cm。
底・壁 底面は、ほぼ平坦で楕円形をなし、小ピットは5個確認されている。壁は直に立ち上がる。
出土遺物 なし。
備 考 斜面に対して直交。擾乱との切りあいが見られる。

14号陥し穴 (第13図、図版 8)

位 置 C-3 グリッド西寄りに位置する。
形態・規模 不整形。1.15m × 0.85m で、深さは55cm。
底・壁 底面は平坦で、方形に近く、小ピットは1個確認された。壁は直に立ち上がる。
出土遺物 なし。
備 考 斜面に対してほぼ平行。

15号陥し穴 (第14図、図版 8)

位 置 B-3 グリッド北東寄りに位置する。
形態・規模 橢円形。1.12m × 0.67m で、深さは35cm。
底・壁 底面は、ほぼ平坦で楕円形をなし、小ピットは3個確認された。壁は直に近く立ち上がる。
出土遺物 なし。
備 考 斜面に対して平行。

16号陥し穴 (第14図、図版 8)

位 置 B-4 グリッド中央よりやや北寄りに位置する。
形態・規模 橢円形。1.55m × 1.05m で、深さは40cm。
底・壁 底面は、平坦で不整円形をなす。小ピットは8個確認された。壁は、長軸方向では直に近く立ち上がり、短軸に対しては45度ほどの立ち上がりを見せる。
出土遺物 なし。
備 考 斜面に対してほぼ平行。

17号陥し穴 (第14図、図版 8)

位 置 B-4 グリッド西寄りに位置する。
形態・規模 橢円形。1.12m × 0.85m で、深さは58cm。
底・壁 ほぼ平坦で楕円形、小ピットは1個確認された。曲線を描いて立ち上がる。
出土遺物 なし。
備 考 斜面に対してほぼ平行。

18号陥し穴 (第15図、図版 8)

位 置 B-4 グリッド北東寄りに位置する。
形態・規模 橢円形。1.4m × 0.95m で、深さは88cm。
底・壁 ほぼ平坦で楕円形、小ピットは1個確認された。直に近く立ち上がる。
出土遺物 なし。
備 考 斜面に対して直交。

19号陥し穴 (第15図、図版 8)

位 置 B-2 グリッド北寄りに位置する。
形態・規模 橢円形。0.75m × 0.6m で、深さは40cm。
底・壁 ほぼ平坦で不整方形、小ピットは1個確認された。直に近く立ち上がる。
出土遺物 なし。
備 考 斜面に対して直交。

第2章 中世の遺構と遺物

(1) 穴式遺構

1号穴式遺構 (第18図、第35図160~162・第37図212・221、図版9・22・23)

調査区北端部のA-2からZ-2グリッドにかけて確認された。南西側に接して3号穴式遺構があるが、それとの前後関係は明確にはとらえられなかった。

遺構の北西側の大部分が農道によって壊されているため、はっきりした平面プランは捉えることができないが、残存部から推測すると恐らく1辺が約5~6m前後の方形を呈していたと考えられる。東側での深さは70cmを測る。床はほぼ平坦であり、床面は硬く踏み固められた状況で、所どころ赤化して強い被熱を受けた痕が認められている。壁は緩やかに立ち上がり、数多くのビットが見られた。また、覆土下部からは大小多数の自然礫が存在した。これらのビットや礫は建物の構造とも関係するものと考えることができる。

遺構に結びつく時期の遺物としては、土師質土器片・内耳土器片があり、このうち第35図の160~162の3点の土師質土器皿が図示されるものであった。160・161はともに灯明皿として使われた痕跡が見られ、とくに161は口縁部端を削り取っている点が注意された。また特殊な遺物として、東側の壁面に礫に混じって見られたひで鉢の残欠 (第37図221) や、床面に接して見られた銅製品の残欠がある (第37図212)。

この1号穴式遺構の年代であるが、160~162の土師質土器が16世紀代 (前半か) とみられ、これにより遺構もおよそ16世紀代と見ておきたい。

2号穴式遺構 (第17図・第35図163・164、図版10)

調査区北端部のB-2グリッドに位置する。19号陥し穴、27号土坑と重複し、前後関係は19号陥し穴を貼つてそれより新しく、27号土坑には切られている。

検出された遺構の北半部分は近年行われた土取り作業の影響で擾乱されているため、本来的な平面プランは捉えることができないが、おそらく遺構の北側は調査区外に出るものと推定され、残存部の状況から、一辺が6~7mの方形を呈していたものと考えられる。

壁は緩やかに立ち上がり、壁面に数個のビットが確認されている。また、遺構内の西南コーナー寄りの部分にコの字型をした石組み施設が検出されている。これは一部石が抜かれており、元は方形の石組み施設であったと思われるが、その性格は明確にし得ない。

遺物は、覆土中より土師質土器片や内耳土器片など、わずかに見られたが図示し得たものに、第35図163・164の土師質土器の皿がある。

2号穴式遺構の年代は、決め手とする163・164の土師質土器がいずれも細片のため確かにはし得ないが、重複しない位置関係などから1号穴式遺構とほぼ同年代と考えたい。

3号穴式遺構 (第16図、図版10)

Z-2グリッドに位置し、北東側に1号穴式遺構が接する。1号穴式遺構と同様に北西部が農業道路によつて壊されている。平面形態は1辺が6~7mの方形を呈していたと考えられ、深さ30cmを測る。床面は柔らかく平坦であり、緩やかに立ち上がる。壁には多数のビットが検出され、中には礫を伴うビットも確認された。この遺構に明確に伴う顕著な遺物は検出されていない。

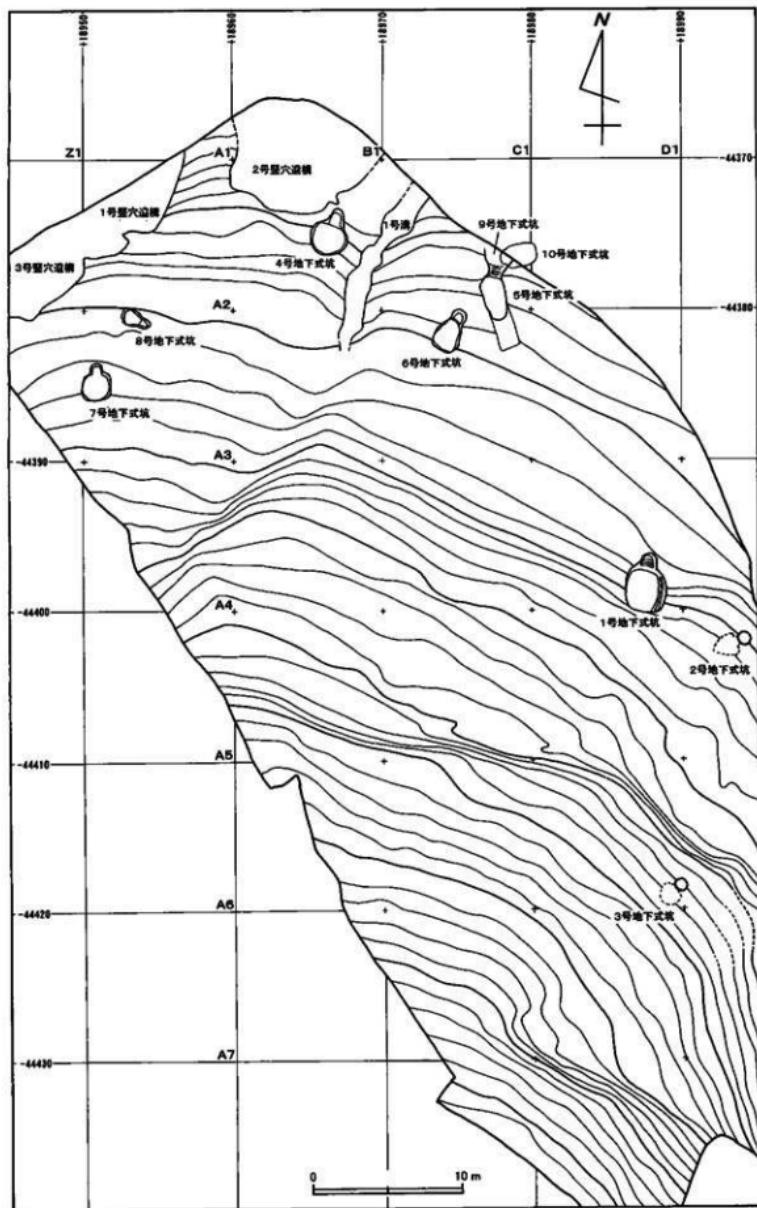
2号穴式遺構の年代は、確かな遺物がないことから確実にし得ない。床面の硬化の度合いや被熱の有無などでは状況を異にするが、平面形や壁付近のビットや礫などの存在は1号穴式遺構に通じるものがある。1号穴式遺構とは接する部分での前後関係の把握がうまくできなかつたが、建物であれば上屋構造のこともあり、両者の間で前後関係があったことは間違いないであろうが、そう大きな時間差はないものと見られる。

(2) 土坑

9号土坑 (第18図・第35図140~143、図版12・21)

B-2グリッド内の中央や東寄りに位置し、4号地下式坑に重複して構築されている。調査段階では最初から2つの異なる遺構の重複ということに気付かず、結果的に両者を半裁して一緒に掘り進めたもので、断面により両者を分離することとなった。このため西半部の形は推定となるが、4号地下式坑の西壁に影響を残していないことや東半分の分層的な掘り下げによる平面形の確認の結果、長軸をN-41°-Eとする長円の平面形で、長径1.75m、短径1.35mとなるものであることが判明した。また確認面からの深さは40cmほどである。4号地下式坑の覆土を切りて形成された底面はほぼ平坦に固められ、壁の立ち上がりは直に近いものである。

この9号土坑からの遺物は、4点の土師質土器の皿すなわち「かわらけ」(第35図140~143) があるが、このうち140~141は完形で、第18図掲載の微細図のとおり、有意性をもった状態で出土している。9号土坑の土器群



第6図 中世の遺構の分布

は1号溝や1号竪穴遺構のものよりやや薄目の作りであり、年代的に16世紀代の早い段階を考えたい。これにより9号土坑の年代も16世紀前半頃かと見られる。

27号土坑（第18図、図版12）

B-1とB-2の両グリッドの中間部付近に位置する。3号竪穴遺構の床面を掘り込んで造られている。円形に近い平面形をしており、その径はおよそ1.3m。確認面から底面までの深さは40cmほどである。底は平坦であり、壁は東側を除いて、直に近く立ち上がる。

この土坑の覆土下位からは、頭を北にして四肢を屈し、西向きに横臥した状態の人骨が検出された。人骨の上には、確認面すれすれのレベルで角張った人頭大かややそれより大きい顎が、土坑の中心から少し南西方向に偏して4個ほど並べられていた。南西側に偏っていることについては、周辺で近年行われたという土取り作業の影響が著しく見られることもある。当初からこの状態であったのか、いくつか抜かれたことによるのか、若干疑惑が残るが、遺構確認面での観察段階では、明確な顎の抜き取りの状況は観察されなかった。

このように、27号土坑は明らかに墓壙であるといえるが、土坑内に伴う遺物は見いだせなかつた。このためその年代も、3号竪穴遺構より後出だということくらいしかいえないが、状況的に16世紀後半頃が推測される。

なお、埋葬されていた人骨は、異存状態がきわめて良くなく、頭骨と上肢骨、大腿骨、背骨の一部がぼろぼろの状態ながら確認された。頭骨を周辺の土ごと切り取って取り上げ、聖マリアンナ医科大学解剖学教室に依頼して形質鑑定を受けたところ、成人のものであり、長年にわたり前歯に特殊な摩耗が観察されるとの所見をいただいたが、詳細は次節の鑑定レポートを参照されたい。

（3）溝状遺構

1号溝（第19図・第35図144～158・177～181・第36図184～186・第37図213・214、図版11・21～23）

C-2からB-2・B-3グリッドにかけて位置する。ほぼ南北に、等高線に直行して斜面上を南から北へ流れ下る溝状の遺構である。上流部は最近までの土地利用の影響で削平されており、また下流側は近年の土採取による掘削の影響を受けたものらしく途中で把握困難となっていて、確認された溝状遺構の延長は、約12mである。その幅は約1～2m、確認面からの深さは平均15cm程度である。底面は凸凹状で、大小の自然疊が点在し、底面にできた凹部には砂利の混入が顕著に確認され、明らかに水が流れていることを物語っている。

出土遺物は、後世の影響を受けた上流側1m分と下流側4m分を除き、疊の間や底面付近の砂層内を中心には、本遺跡の中では最も豊富に見られた。内容的には、土師質土器（144～158）や、内耳系の土器・すり鉢（177～181・184～186）といった土器類の破片、また馬の歯（213）や北宋銭の「元豐通寛」（214）などの中世遺物のほか、縄文土器片や槍先（128）や石匙（131）、黒曜石製の楔形石器（139）など、付近にあった縄文時代中期の遺構が搅乱され、流れ込んだと見られる2次の遺物も多く確認された。

1号溝の帰属する年代であるが、出土遺物のうちの土師質土器の形態などから、16世紀代と見られ、近くに存在する竪穴遺構とほぼ同時期に所属すると考えられる。

（4）地下式坑

つぎに10基の地下式坑について、確認の番号順に報告するが、その記述の中で、地表からの入り口部の縱方向の穴について「竪坑」、竪坑底から横方向に掘られた地下室について「主室」（ないしは「横坑」と呼び、両者をつなぐ通路状の部分を「縫門部」と呼称することを確認しておきたい。またそれぞれの説明に用いた計測値については、竪坑の高さは、確認面から竪坑の主室とは反対側の底面までの数値を、主室（横坑）の幅は壁の最大幅を、奥行きも同様で、天井高は最大値をそれぞれ表している。

また、大部分の地下式坑で年代を決める手掛かりに乏しく、そのためここでは構築年代については一々記さず、次章でまとめて検討することとした。

1号地下式坑（第20図、図版13）

D-4グリッド内の南東部に位置する。ちょうど調査前の畠地だった段階での土地の境界に当たり、竪坑のある北側で大きく削平を受けている。竪坑から主室に至るまで天井はほぼ完全に崩れており存在しなかつた。内部の土層の堆積状況を見ると、竪坑側からの主室内への土砂の流れ込みや天井部の崩落の状況が観察される。他の遺構との重複については、主室の北西隅に当たる堆積土中に、主室の壁に沿うように掘り込まれた8号土坑が存在した。

入り口である竪坑は径1.0m、確認面からの深さ40cmほどの規模で、平面形は円形であったと見られる。竪坑底から南側にある主室へは3段の階段状になっており、高低差は70cmほどあって急な縫門部となっている。地下室の平面形態は隅丸方形を呈し、奥行き3.5m、幅2.6mである。天井高は、奥壁部で2m近くまで壁が残ってい

るので、それを若干上回る2~2.2mほどと推定される。底は多少の凸凹がみられるが、総じて平らに作られている。また、地下室の東西に壁回りには、高さ30cmほどの部分的な中段が見られた。また豊坑の堆積土の下部に封鎖に用いられたと思われる角張った礫が確認されている。

この1号地下式坑からは、覆土中に繩文土器片などが混じるもの、直接的に伴う遺物は確認されなかった。

2号地下式坑（第21図、図版14）

E-5グリッド内のやや北寄りに位置しており、天井部が未崩落のまま検出されている。

豊坑は、直径0.9m、深さ1.4mほどの規模で、円筒形を呈し、高さ60cm弱の狭門部を介して南西側にある主室につながる。主室の平面形は、左右の二辺が丸く膨らみを持った三角形をしている。奥行き1.7m、幅1.6mほどの大さきで、天井高は90cmを測る。豊坑底から主室底面へは40cmほどの高低差があり、狭門入り口で角度がついている。平坦に仕上げられた主室底面には、狭門側を除いた壁際に幅10cm、深さ4~5cmの溝がまわる。周囲の壁から天井にかけては蒲鉾状になり、天井部は中心部に向かって若干の丸みが見られる。

調査段階で主室は空洞で、始めは地下式坑とは全く気付かずに、豊坑部を半裁して土層確認をしながら掘り進めたところ、狭門部近くまでに達した段階で、半裁して残したしまりの弱い黒色土が一気に狭門から主室に吸い込まれるように雪崩れ込んだ状況があった。調査前に流入していた土砂は少量で、深い部分でも10cm程度である。こうした状況から狭門は板などの腐朽し残りにくいもので閉鎖され、豊坑が黒色土で埋め戻されたのではないかと推測される。なお、主室の側壁には、掘削の際に使用した鍬状の工具の痕が顕著に認められる。

3号地下式坑（第21図、図版14）

D-6グリッド内の南東隅に検出されたもので、2号地下式坑と同様に、天井部が未崩落の状態のままで存在した。

豊坑は、径0.75m、深さ1.3mと、2号地下式坑よりやや小振りで、やや胴貼り傾向のある円筒形を呈しており、高さ70cm弱の狭門部を介して南西側にある主室に連絡している。主室の平面形は2号地下式坑より丸みを帯びていて円形に近いもので、奥行き、幅ともに1.6m、天井までの高さは90cmほどとなっている。豊坑底から主室底面への高低差は30cm程度で、狭門部に中段がつき、2号地下式坑の場合よりもだらかなものとなっている。天井もフラットで、主室の断面形は、2号地下式坑が蒲鉾形なのに対し、方形に近いものがある。

3号地下式坑においても主室は空洞であり、地下室に流入していた土砂の量は5cm程度とより少量である。また主室の側壁には掘削の工具痕が顕著に認められる。

4号地下式坑（第22図、図版15）

B-2グリッド内のやや東寄りに位置する。豊坑から主室に至るまで、天井は完全に崩落しており、存在しなかった。内部の土層の堆積状況を見ると、豊坑側からの主室内への土砂の流れ込みの状況が窺える。他の造構との重複については、主室の範囲にほぼ収まるようにこの堆積土中に掘り込まれた9号土坑が存在した。豊坑側はこの周辺で近年に行われていた土取り作業により、かなり削平が及んでいる。

豊坑は直径1mほどの大きさで、確認面からの深さは30cmであった。豊坑の南西側にある主室の平面形は不整円形を呈しており、奥行き2.1m、幅2.3mほどの規模である。天井部は崩落のため確認できなかったが、おそらく蒲鉾状で、南壁側で1.0mまで壁が残存するので、これから類推すると1.2m前後の高さがあったものと考えられる。豊坑底から主室底面までの高低差は25cm程度で、狭門から主室にかけ段ができる。主室底面は平坦だが豊坑でいくぶん低くなっている。

5号地下式坑（第23・24図、図版13）

C-2からC-3のグリッドにまたがって確認された、たいへん細長い主室を持つ地下式坑である。南側半分が縄文中期の1号住居跡の直下に入り込んでいる。狭門から主室の北半では天井が崩落して存在しないが、この部分の主室内の土層の堆積状況を見ると、主室内に土砂の流入がまだわずかな段階で、天井が崩落した状況が認められる。また北側に9号地下式坑が接しており、豊坑はその9号と共有しているように観察された。豊坑の位置は、主室の主軸線に対し、東側にかなりずれているが、これは9号地下式坑と豊坑を共有することに因るものと思われる。

豊坑は、直径約60cm、深さ1.7mの円筒形であるが、豊坑の上部はロート状を呈している。豊坑底から主室底面までの高低差は10cm余りで、狭門から主室にかけ段ができる。主室の平面形は長方形で、規模は奥行き4.9m、幅1.4mを測る。底面はたいへん平坦に仕上げられている。また天井部は1号住居跡の下部において一部残存するが、かなり剥落しており、壁面の状況から推測すると天井高は80~90cmと見られる。

覆土中より、陶器片1点（第36図204）が出土しているが、これは数片の縄文土器片や第34図134の石器などとともに、流れ込みによるものと考えられる。遺構に直接結びつくものはない。

6号地下式坑（第24図、図版15）

C-3グリッド内の北側に位置する。羨門から主室にかけての天井は崩落し、残存しない。主室の主軸方向の土層断面には、竪坑側からの土砂の流れが確認される。

竪坑は径70cm、深さ75cmほどの円筒形である。竪坑の南西側に位置する主室の平面形は、奥行き2.0m、幅は羨門側で1.2mに対し奥壁側で1.7となる台形に近い隅丸方形を呈す。竪坑底から主室底面までの高低差は30cm余りで、羨門から主室にかけ段ができる。主室底面は平坦であるが、南東隅側がやや低くなる。天井高は、天井部崩落のため不明だが、奥壁側で床から1.1mまで壁が残存するので、これから推測すると1.3m前後の高さがあつたものと考えられる。

遺物は、覆土中上部から、流れ込みによると思われる縄文土器片が5片確認されているほか、遺構に結びつくものはない。

7号地下式坑（第25図、図版15）

A-3グリッド内の西端に位置する。これも羨門から主室にかけての天井は崩落し、残存していない。主室の主軸方向の土層断面には、竪坑側からの土砂の流入があつたことが見て取れる。

竪坑は径80cm、深さ40cmほどの規模で、円筒形を呈する。竪坑の南側につながる主室の平面形は、ほぼ円形で、奥行き、幅ともに1.9mを測る。竪坑底から主室底面にかけての高低差は35cmほどで、羨門から主室にかけ段ができる。主室底面は平坦に近いが、他の地下式坑のように底面から壁にかけての立ち上がりに明確さを欠くところがある。天井高は崩落のため不明だが、残存部分からドーム状を呈し、90cm程度の高さがあつたと考えられる。竪坑下部から20cm大の礫2つが検出されている。

8号地下式坑（第25図、図版15）

A-3グリッド内の北側に位置する。10基確認された地下式坑の中で最も小さなもので、空間的にも非常に狭く、竪坑部と羨門、主室の区分も付きにくい。地下式坑と呼べるものか判断に迷うところもあった。小型のため掘り込みも浅かったことでもあったのか残存状況が悪い。主軸方向の土層断面には、竪坑側からの土砂の流入が観察される。

竪坑は直径70cm、深さ20cm程度で、残存部ではすり鉢状の形態に見られる。竪坑の北西部に連続する主室の平面形は不整橢円形を呈し、奥行き1.65m、幅0.95mを測る。羨門から主室にかけての天井は失われているため、天井高不明だが、残存部分からドーム状で、0.8-1mくらいの高さであったと考えられる。遺物は見られない。

9号地下式坑（第23・24図、図版13）

C-2グリッド内の東寄りに位置する。北側が調査区外にわたって造られているためはっきりとした全体像はつかめていないが、5号地下式坑と竪坑を共有するのではないかと見られる。羨門から主室にかけての天井は崩落し失われている。また主室の東南隅に10号地下式坑が接続している。

竪坑の状況は5号地下式坑の項すでに述べたが、竪坑から北側につながる主室の平面形は、北側が調査区外で未調査であるが、おそらく隅丸の長方形を呈していたと考えられる。奥行きは不明であるが、確認されただけでも1.4mはあり、幅は1.5mとなっている。竪坑底から主室底面にかけての高低差は50cmほどあり、この間は階段状になっている。主室底面は平坦で、5号地下式坑の主室底面に対しては40cmほど低くなっている。天井部の高さは1m前後と考えられる。遺物は見られなかった。

10号地下式坑（第23・24図）

C-2グリッドに位置する。大部分が調査区外にわたっており、また天井崩落の危険性もあったので全体像を把握することはできなかった。本地下式坑は9号地下式坑に接続して確認されたもので、主室内部には天井付近に20-30cmの空間を残し、黒色土が堆積していた。この隙間から観察する程度であったので確かではないが、東側には竪坑が付かない可能性があり、その場合9号地下式坑の副室と位置づけがなされるものとなる。

9号地下式坑との接続部は、通常の9号地下式坑の羨門に類似した形態になる。主室は、天井付近の隙間からの計測に限れば、奥行き2m、幅1.5mで、隅丸の長方形であると見られる。主室底面は、9号地下式坑のそれより低く、20cm弱のレベル差をもつてつながる。天井はほぼ平坦であり、高さは1.0mを測る。

遺物としては、接続部の近くの覆土中より出土した刀子1点（第37図220）がある。

第3節 年代不明の遺構

ここでは、年代の把握ができなかった土坑21基と屋外が1基の概略を報告する。

(1) 土 坑

2号土坑（第26図、図版16）

位 置 B-2グリッド南西寄りに位置する。

形態・規模 円形を呈しており、径0.6m。底面までの最深部12cmを測る。

底・壁 底はほぼ平坦である。壁の立ち上がりには規則性はなく、緩やかに立ち上がる箇所や、ほぼ直に立ち上がる箇所などが見られる。

出土 遺物 覆土中位から動物のものかと思われる骨片が検出されている。

3号土坑（第26図）

位 置 B-2グリッド西寄りに位置する。

形態・規模 円形を呈しており、径1.0m。底面までの最深部12cmを測る。

底・壁 底は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

出土 遺物 遺物は検出されていない。

4号土坑（第26図）

位 置 A-2グリッド東寄りに位置する。

形態・規模 楕円形を呈しており、長軸1.2m、短軸1.0m。底面までの最深部14cmを測る。

底・壁 底は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

出土 遺物 遺物は検出されていない。

5号土坑（第26図）

位 置 A-2グリッド東寄りに位置する。

形態・規模 楕円形を呈しており、長軸1.55m、短軸1.24m。底面までの最深部22cmを測る。

底・壁 底は平坦であり、壁は直に近く立ち上がる。

出土 遺物 遺物は検出されていない。

6号土坑

位 置 A-2グリッド南東隅に位置する。

形態・規模 円形を呈しており、径1.3mを測る。

底・壁 底は平坦であり、壁は直に近く立ち上がる。

出土 遺物 遺物総数・・・2点、遺物総量・・・92g

7号土坑（第26図、図版16）

位 置 A-3からB-3グリッドにかけて、そのほぼ中央に位置する。

形態・規模 円形を呈しており、径1.65m。底面までの最深部38cmを測る。

底・壁 底は平坦であり、タライ状の立ち上がりを見せる。

出土 遺物 遺物は検出されていない。

8号土坑（第20図）

位 置 D-4グリッド内南寄りに位置し、1号地下式坑の覆土中に構築されている。

形態・規模 円形と見られ、径は1.2mほどである。

底・壁 底は平坦で、断面は袋状となる。

出土 遺物 見られない。

時 期 1号地下式坑より新しい。中世以降。

10号土坑（第27図、図版16）

位 置 D-5グリッド北東寄りに位置する。

形態・規模 円形を呈しており、径1.1m。底面までの最深部50cmを測る。

底・壁 底はほぼ平坦である。壁は直に近く立ち上がるが、土坑西部ではオーバーハングした形状が見ら

れる。

出土遺物 遺物は検出されていない。

12号土坑（第27図）

位置 F-6グリッド南西寄りに位置する。

形態・規模 不整円形で、長径1.4m、短径1.3mとなる。

底・壁 底はほぼ平坦であり、底面に2つのピットが存在する。

出土遺物 遺物は検出されていない。

13号土坑（第27図）

位置 C-D-6グリッド中央部に位置する。

形態・規模 円形を呈しており、径1.0m。底面までの最深部40cmを測る。

底・壁 底はほぼ平坦であり、壁は直に近く立ち上がる。

出土遺物 遺物は検出されていない。

14号土坑（第28図・第34図132、図版16）

位置 C-D-6グリッド北寄りに位置する。

形態・規模 円形を呈しており、径1.4m。底面までの最深部85cmを測る。ただし土坑の南側及び東側部分は搅乱によって壊されている。

底・壁 底は平坦であり、タライ状の立ち上がりを見せている。

出土遺物 繩文土器1点(49g)および石器（第34図132）

時期 不明。あるいは縄文時代か。

15号土坑（第28図）

位置 D-4グリッド中央に位置する。

形態・規模 円形を呈しており、径0.75m。底面までの最深部75cmを測る。

底・壁 断面は袋状となる。

出土遺物 繩文土器1点(9g)・土師質土器（中世）1点(5g)

16号土坑（第28図）

位置 D-E-4グリッドほぼ中央に位置する。

形態・規模 不整円形で、長径1.5m、短径1.4m。

底・壁 底は平らで、壁は直に近い立ち上がりとなる。

出土遺物 見られない。

17号土坑（第28図、図版16）

位置 D-5グリッド中央やや東寄りに位置する。

形態・規模 横円形を呈しており、長軸1.1m、短軸0.95m。底面までの最深部40cmを測る。

底・壁 底は平坦である。壁は直に近く立ち上がるが、部分的にオーバーハングしている形状も見られる。

出土遺物 遺物は検出されていない。

18号土坑（第29図）

位置 E-6グリッド南西隅に位置する。

形態・規模 円形を呈しており、径1.7m。底面までの最深部44cmを測る。

底・壁 底は平坦であり、壁は直に近く立ち上がっている。

出土遺物 遺物は検出されていない。

19号土坑（第29図）

位置 D-E-6グリッド南寄りに位置する。

形態・規模 不整形を呈している。2箇所ほど搅乱との切りあいが見られる。

底・壁 底は平坦であり、壁は直に立ち上がる。

出土遺物 繩文土器1点(2g)

20号土坑(第29図)

位置 C-5グリッド中央よりやや南東寄りに位置する。

形態・規模 不整円形。長径1.4m、短径1.2mを測る。

底・壁 底はほぼ平らで、壁は直に近く立ち上がる。

出土遺物 見られない。

23号土坑(第30図、図版16)

位置 D-4グリッド東寄りに位置する。

形態・規模 横円形を呈しており、長軸1.0m・短軸0.9m。底面までの最深部75cmを測る。

底・壁 底はほぼ平坦であり、壁は直に立ち上がる。

出土遺物 遺物は検出されていない。

24号土坑(第30図、図版16)

位置 D-E-4グリッド中央付近に位置する。

形態・規模 円形を呈しており、径80cm・底面までの最深部94cmを測る。

底・壁 底は土坑中心部で若干の窪みが見られる。壁は直に立ち上がるが、土坑北側部分ではオーバーハングした状況も見られる。

出土遺物 遺物は検出されていない。

25号土坑(第30図、図版16)

位置 E-4グリッド西寄りに位置する。

形態・規模 円形を呈しており、径1.0m。底面までの最深部75cmを測る。

底・壁 底はほぼ平坦であり、壁は直に近く立ち上がる。

出土遺物 遺物は検出されていない。

26号土坑(第30図、図版16)

位置 E-4グリッド中央付近に位置する。

形態・規模 円形を呈しており、径80cm・底面までの最深部62cmを測る。

底・壁 底はほぼ平坦であり、壁は直に近く立ち上がる。

出土遺物 遺物は検出されていない。

(2) 屋外炉

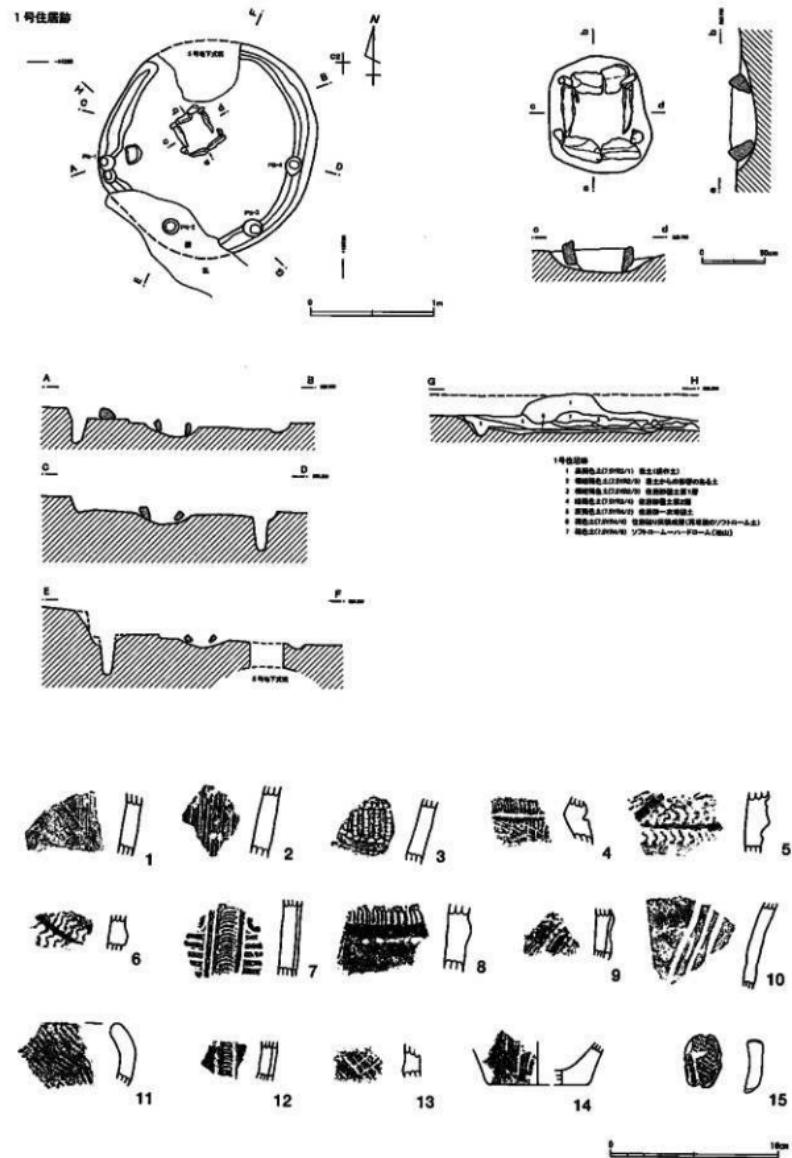
1号屋外炉(第30図、図版10)

E-6グリッドに位置する。径1.0mの円形を呈し、深さ40cmを測る。上部から底部にまで10~30cm大の平らな石が集中している。覆土は二層に分かれており、第1層よりカーボンが、第2層より焼土が確認されている。遺物が出土していないため時期は不明である。

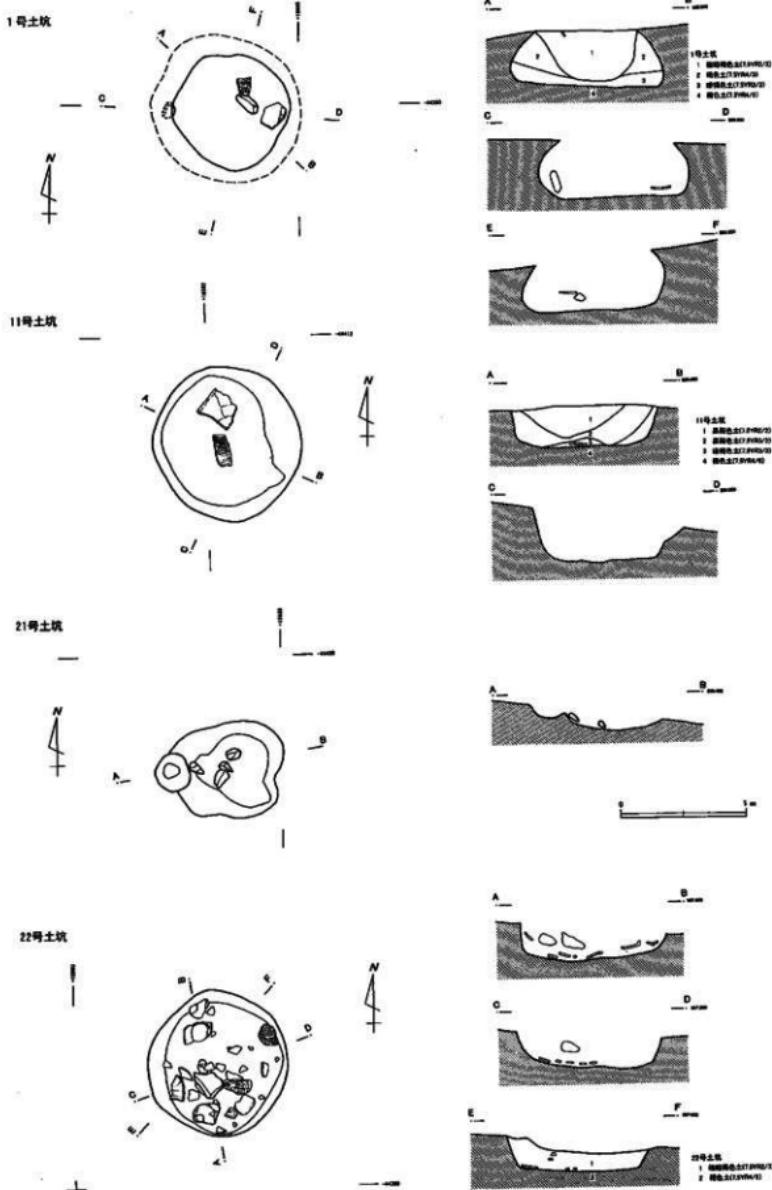
第4節 造構外の遺物

造構外の遺物として縄文時代、弥生時代、中世およびそれ以降の土器、陶磁器、石器・石製品、錢貨がある。

まず造構外の縄文土器は、前期末葉から中期初頭にかけてのもの(第32図)、中期前半のもの(第33図)、中期後半から後期初頭にかけてのもの(第34図)がある。縄文の石器で2点の石錐(第34図155・156)と磨り石(同図133)があった。また弥生土器は後期の破片資料(第36図192~203)が採集されている。中世およびそれ以降の土器、陶磁器類、その他の遺物は第4表を参照されたい。

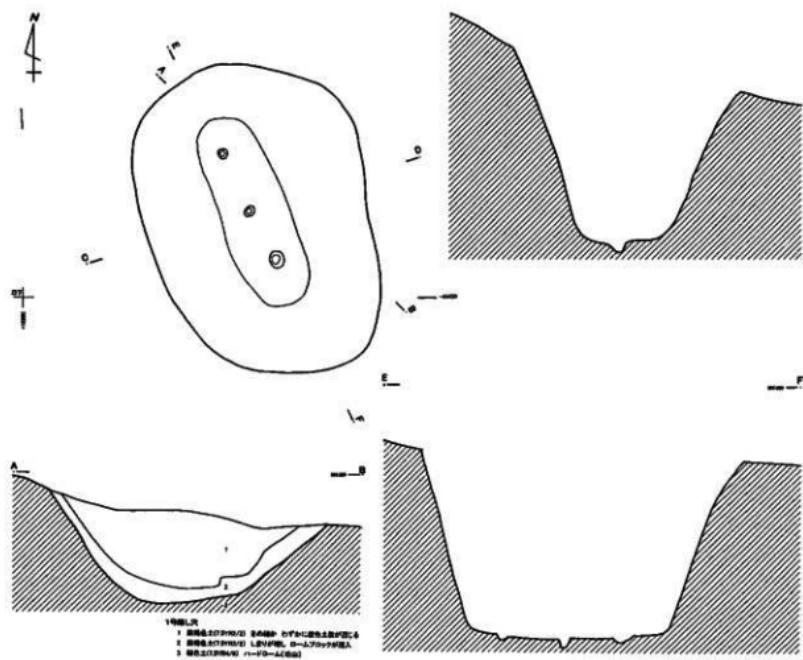


第7図 1号住居跡とその関連遺物

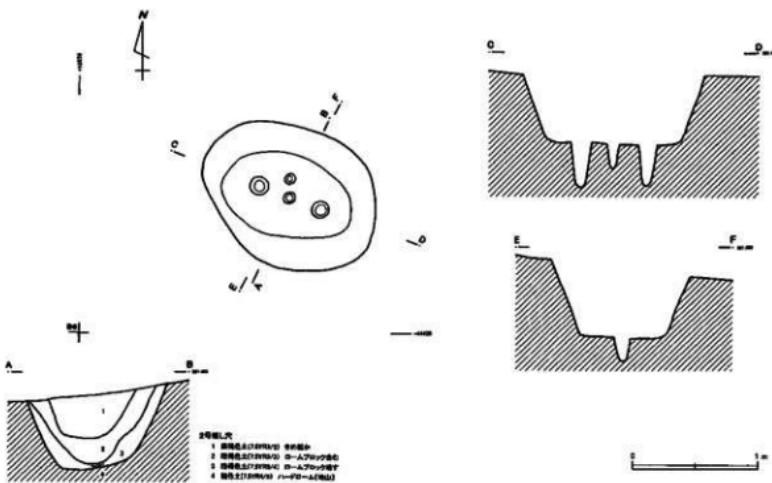


第8図 1・11・21・22号土坑

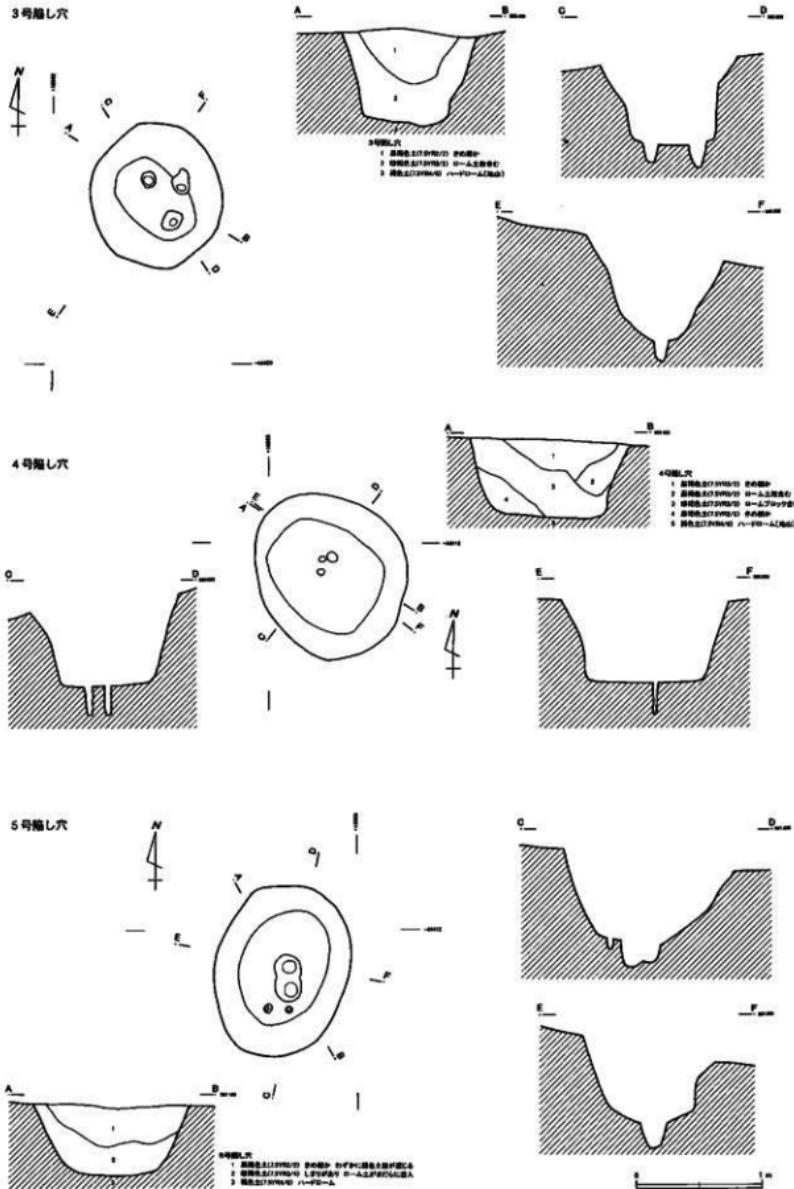
1号陥し穴



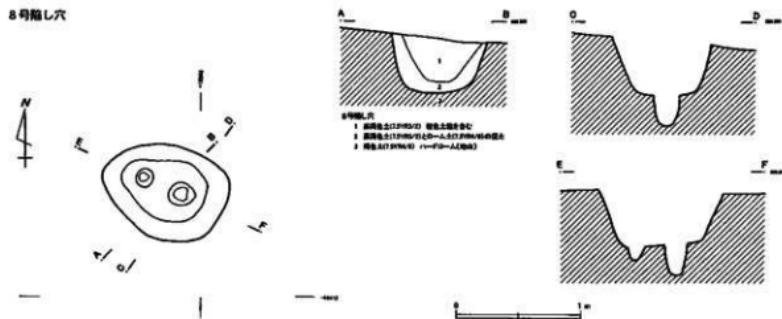
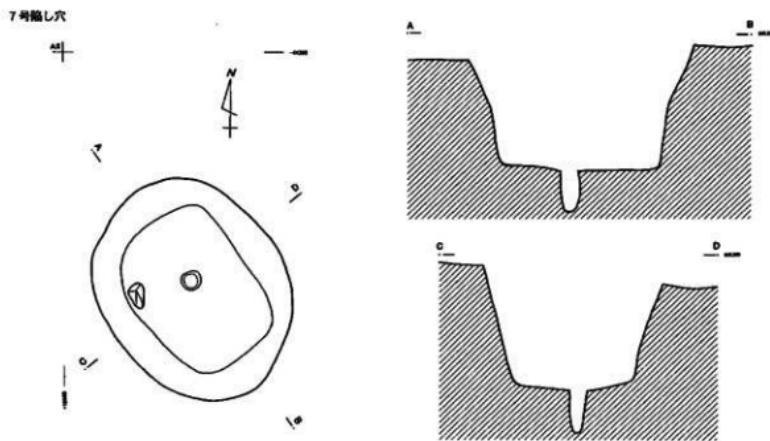
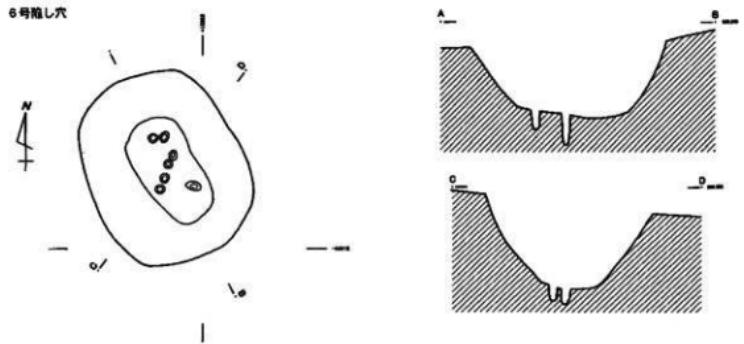
2号陥し穴



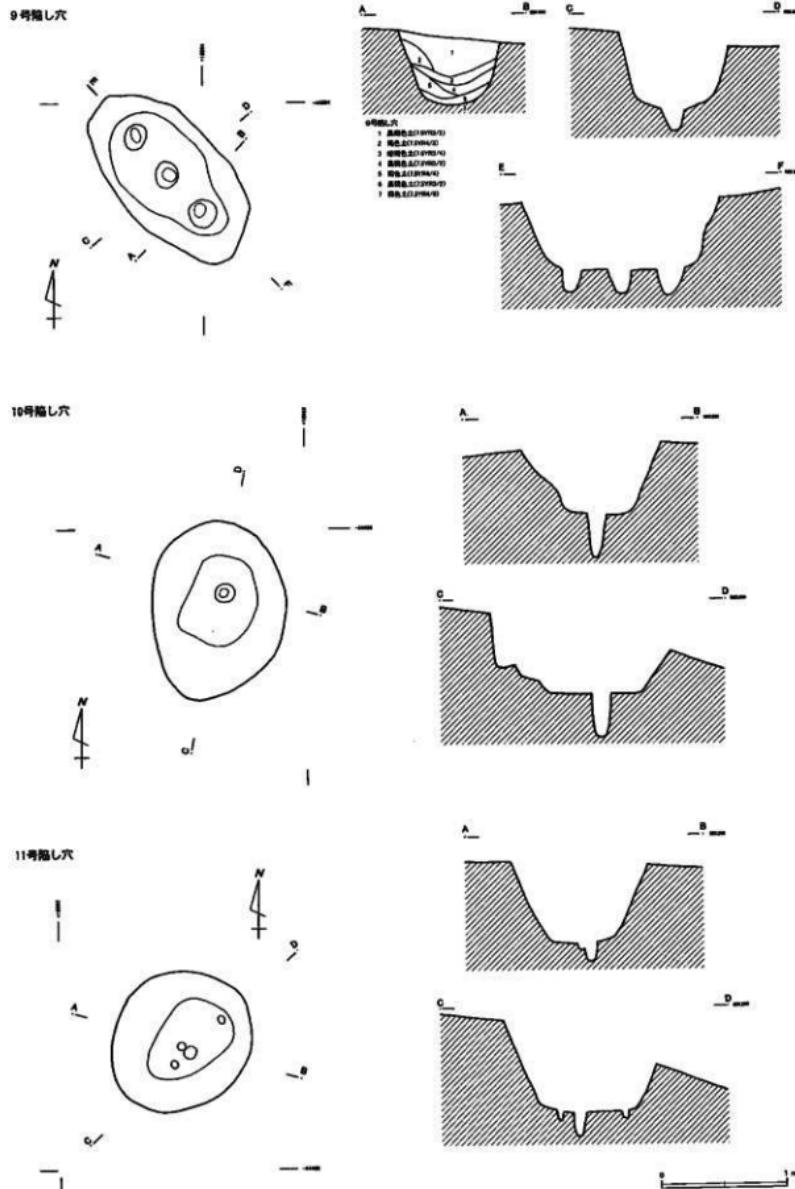
第9図 1・2号陥し穴



第10図 3・4・5号鑿し穴

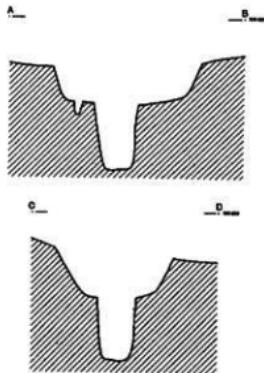
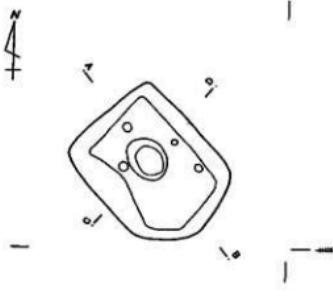


第11図 6・7・8号陥し穴

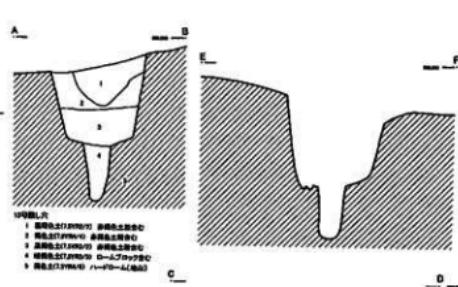


第12図 9・10・11号陥し穴

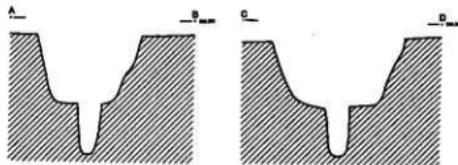
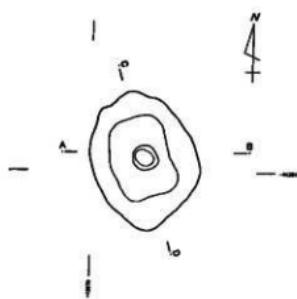
12号階し穴



13号階し穴

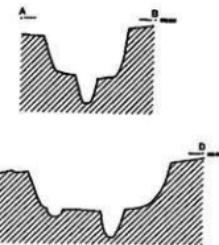
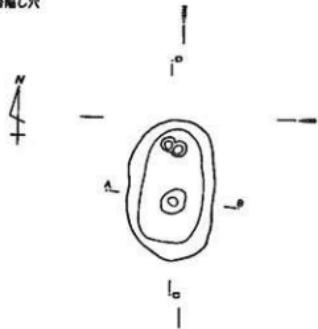


14号階し穴

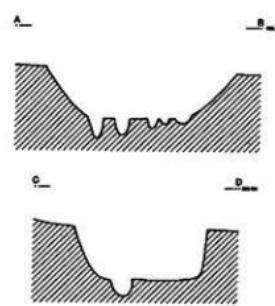
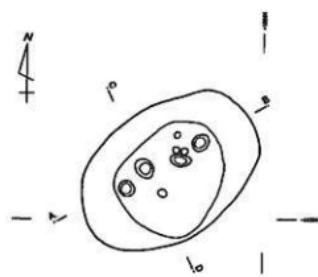


第13図 12・13・14号階し穴

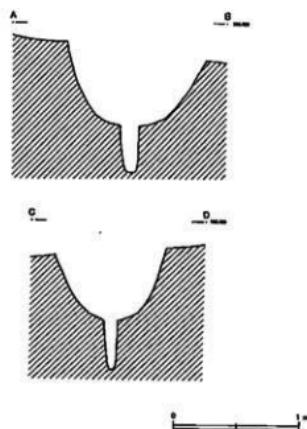
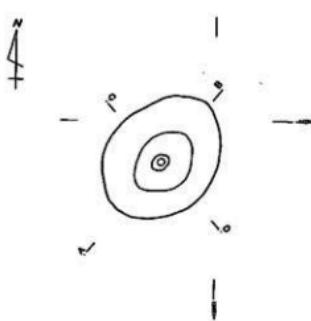
15号陥し穴



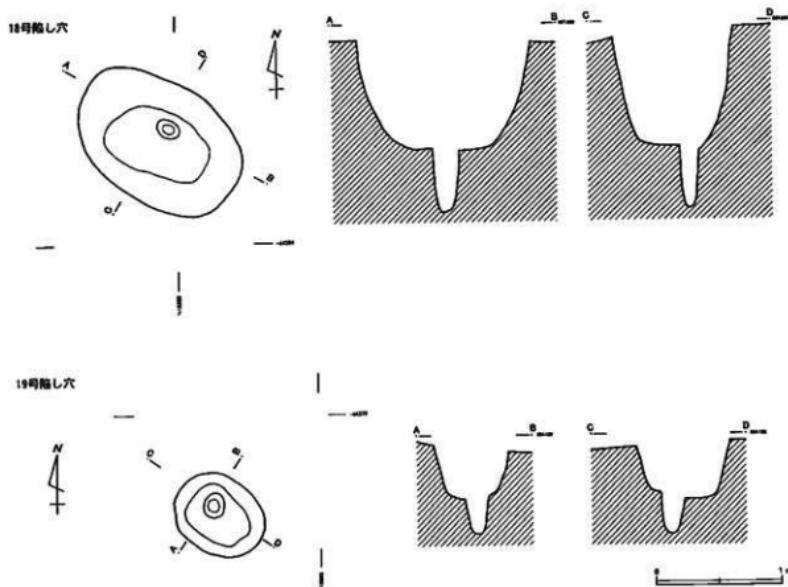
16号陥し穴



17号陥し穴



第14図 15・16・17号陥し穴

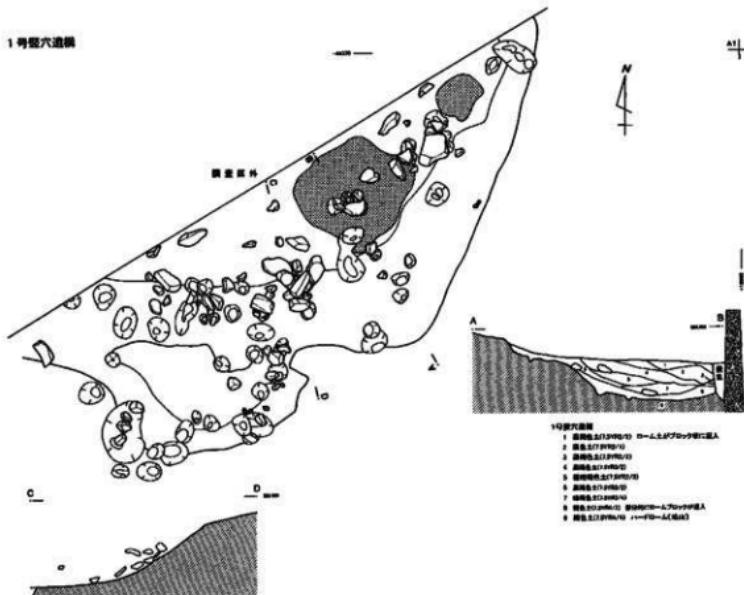


第15図 18・19号陷し穴

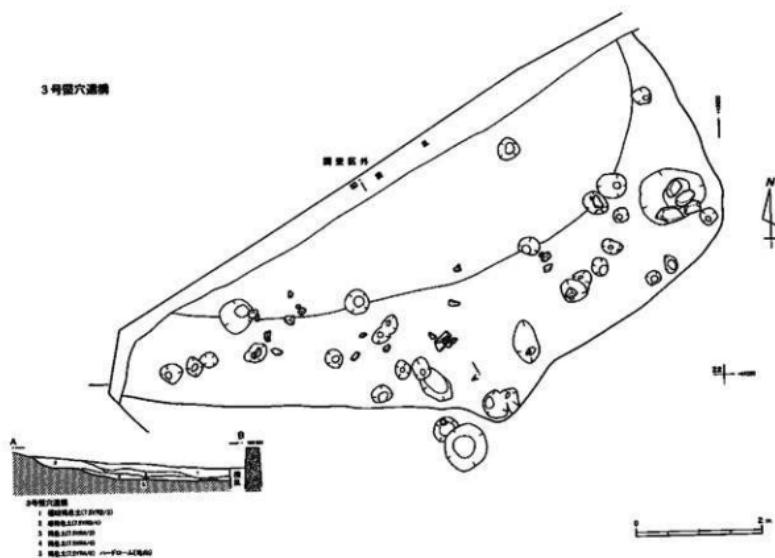
第1表 陷し穴一覧表

造構N _{o.}	所在グリッド	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面形状	立ち上がり	底面ピット	長軸:斜面の関係	備考
1号陷し穴	E 7—E 8	楕円形	2.55	1.80	1.45	平／楕円	直に近い	3	直交	
2号陷し穴	C 6	楕円形	1.05	1.10	0.55	平／楕円	直に近い	4	直交	
3号陷し穴	D 6	不整円形	1.20	1.05	0.57	平／楕円	ほぼ直／傾斜は45°	3	直交	
4号陷し穴	B 6	卵形	1.35	1.20	0.65	平／楕丸方形	直に近い	3	直交	
5号陷し穴	E 6	楕円形	1.40	1.05	0.65	やや瘤状／瘤円	直に近い	4	平行	
6号陷し穴	D 6	楕円形	1.55	1.25	0.60	平／楕円	ゆるく立ち上がる	7	直交	
7号陷し穴	B 3	楕円形	1.85	1.45	0.95	平／楕丸方形	直に近い	1	直交	
8号陷し穴	D 5	卵形	1.00	0.75	0.45	平／卵形	直に近い	2	直交	
9号陷し穴	B 3	楕円形	1.65	0.85	0.55	平／楕円	直に近い	3	直交	
10号陷し穴	B 5	卵形	1.45	1.10	0.52	平／不整方形	ほぼ直／斜面斜状	1	平行	
11号陷し穴	B 5	不整円形	1.25	1.08	0.57	平／卵形	直に近い	4	平行	
12号陷し穴	B 5	不整方形	1.20	0.95	0.35	平／不整方形	直に近い	5	直交	
13号陷し穴	B 4	楕円形	1.42	0.75	0.62	平／楕円	ほぼ直	5	直交	
14号陷し穴	C 3	不整楕円形	1.15	0.85	0.55	平／楕丸方形	直に近い	1	平行	
15号陷し穴	B 3	楕円形	1.12	0.67	0.35	平／楕円	直に近い	3	平行	
16号陷し穴	B 4	楕円形	1.55	1.05	0.40	平／不整円形	直に近い	8	平行	
17号陷し穴	B 4	不整円形	1.12	0.85	0.57	平／不整円形	ゆるく立ち上がる	1	平行	
18号陷し穴	B 4	楕円形	1.40	0.95	0.87	平／楕円	直に近い	1	直交	
19号陷し穴	B 2	不整円形	0.75	0.60	0.41	平／不整円形	直に近い	1	直交	

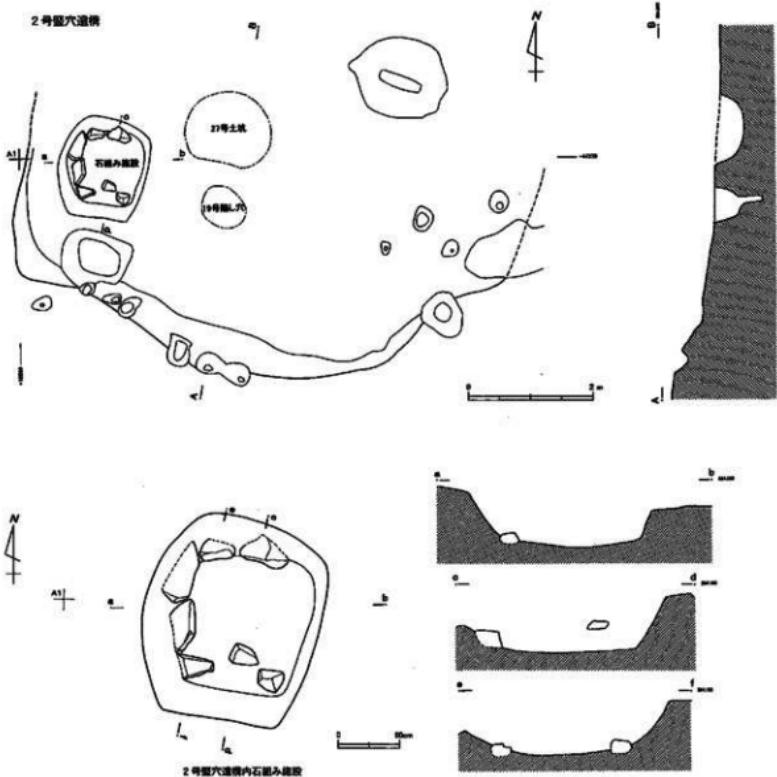
1号竖穴遺構



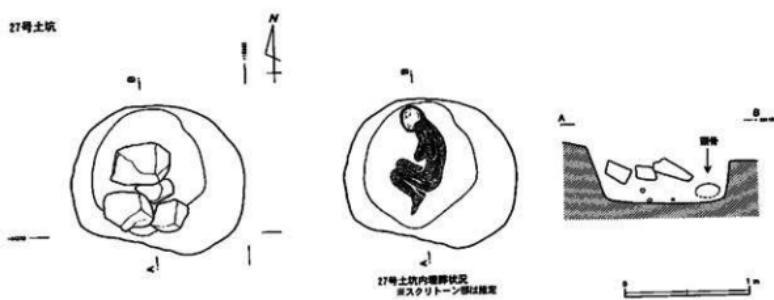
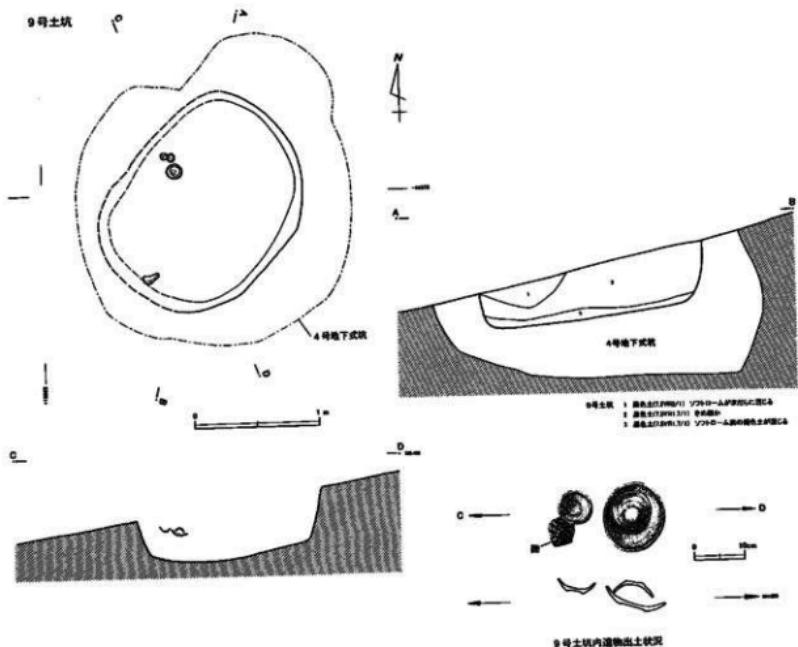
3号竖穴遺構



第16図 1・3号竖穴遺構

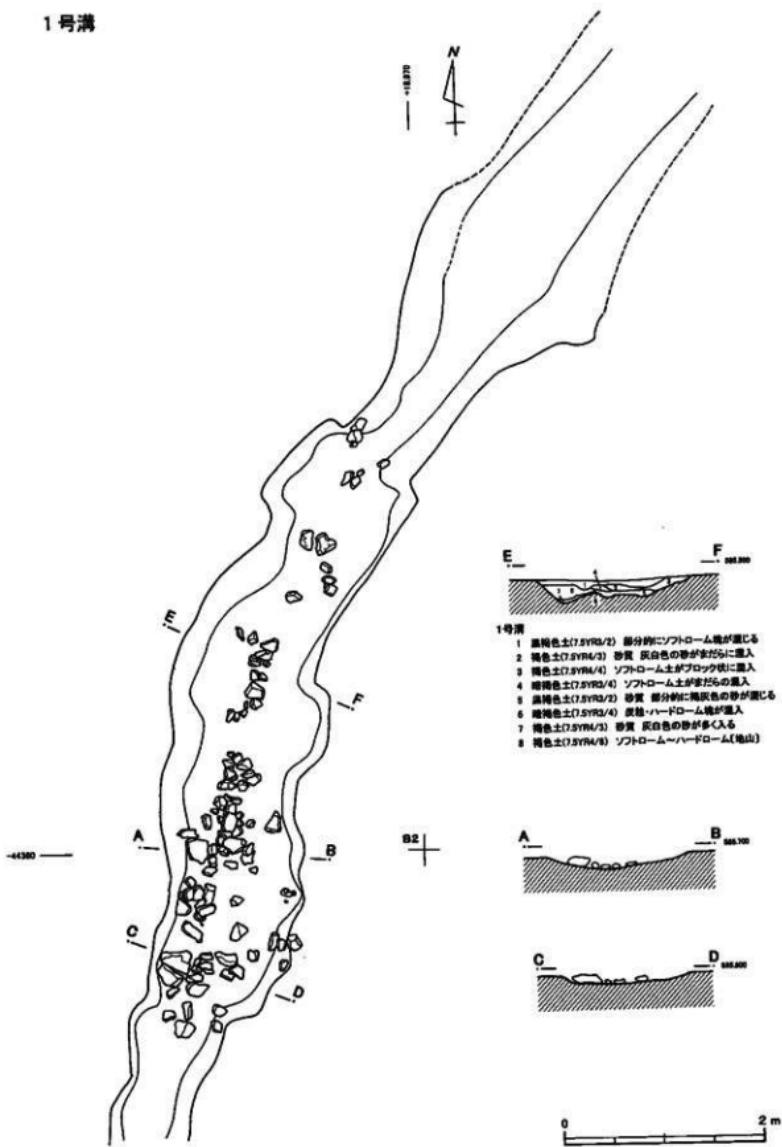


第17図 2号竖穴遗构



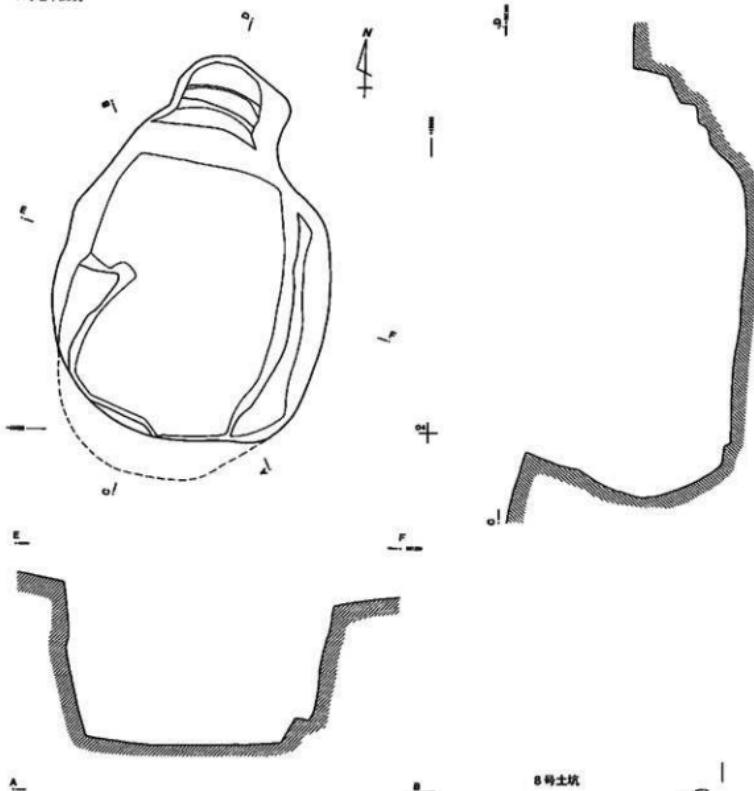
第18図 9・27号土坑

1号溝

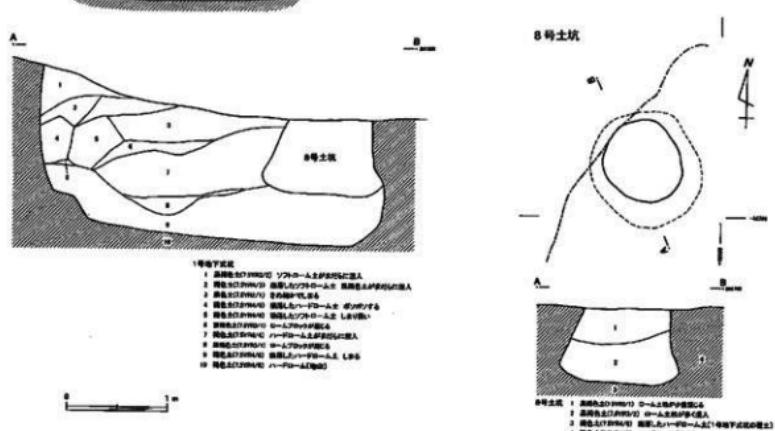


第19図 1号溝

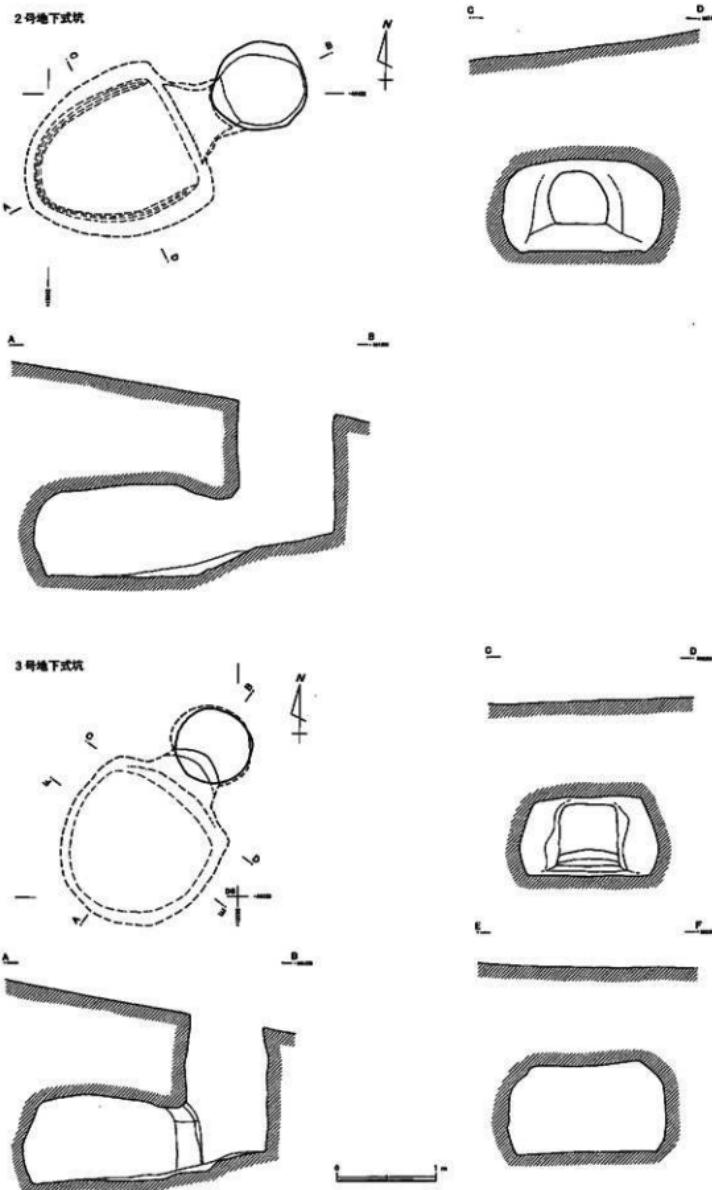
1号地下式坑



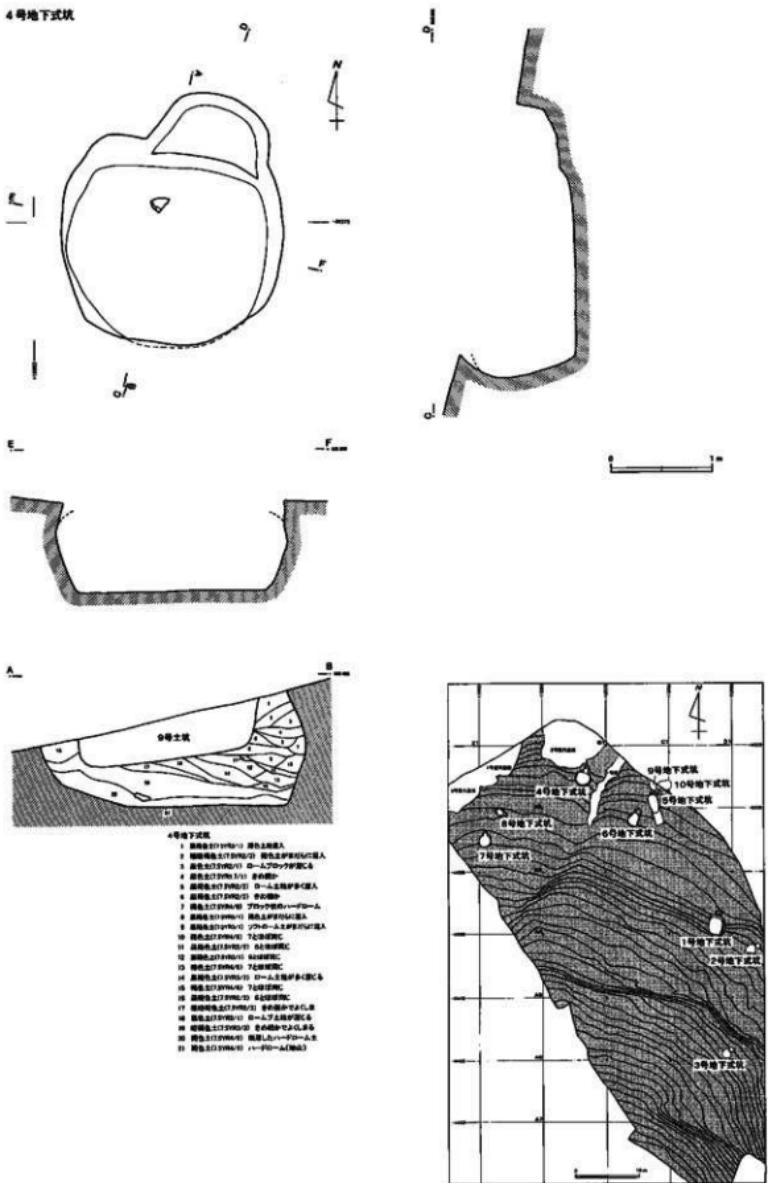
8号土坑



第20図 1号地下式坑・8号土坑

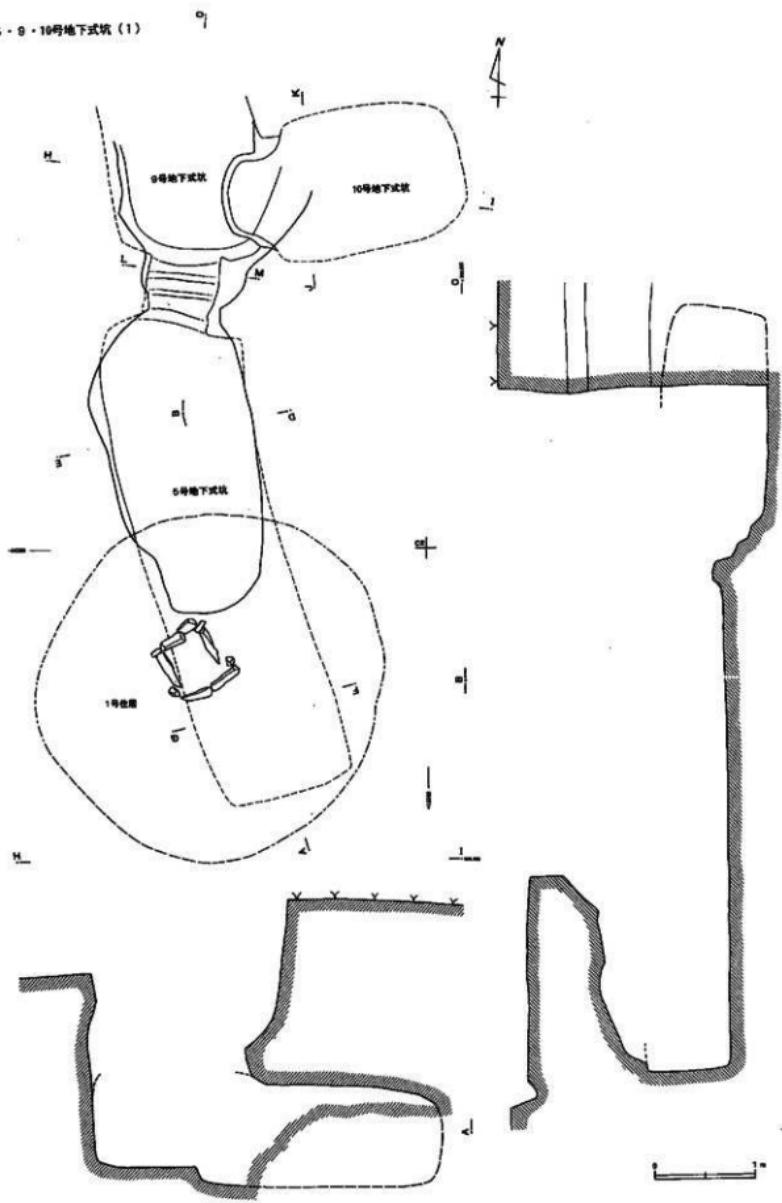


第21図 2・3号地下式坑



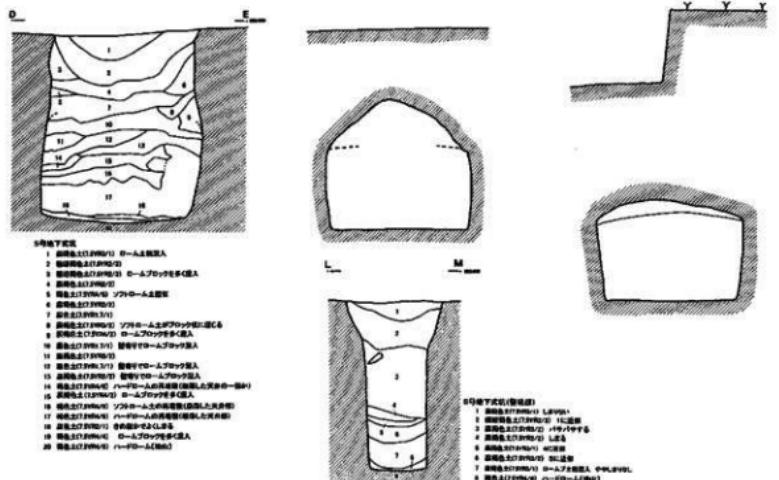
第22図 4号地下式坑

5·9·10号地下式坑(1)

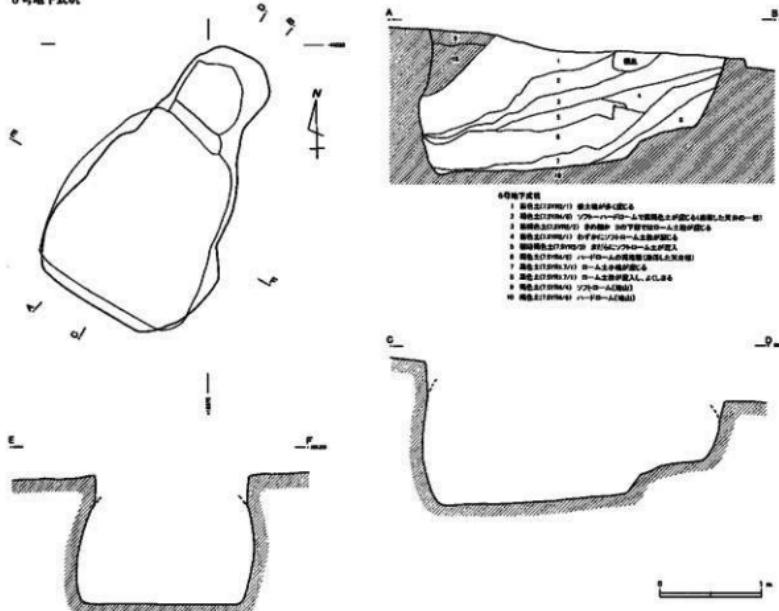


第23图 5·9·10号地下式坑

5・9・10号地下式坑(2)

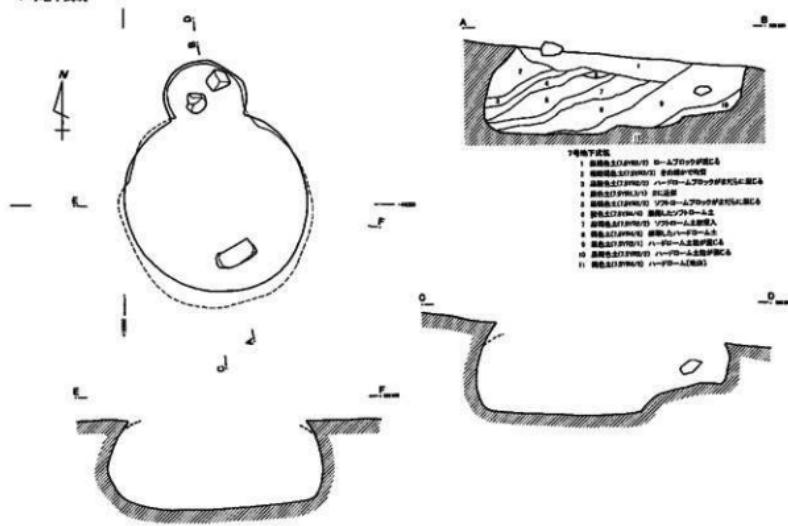


6号地下式坑

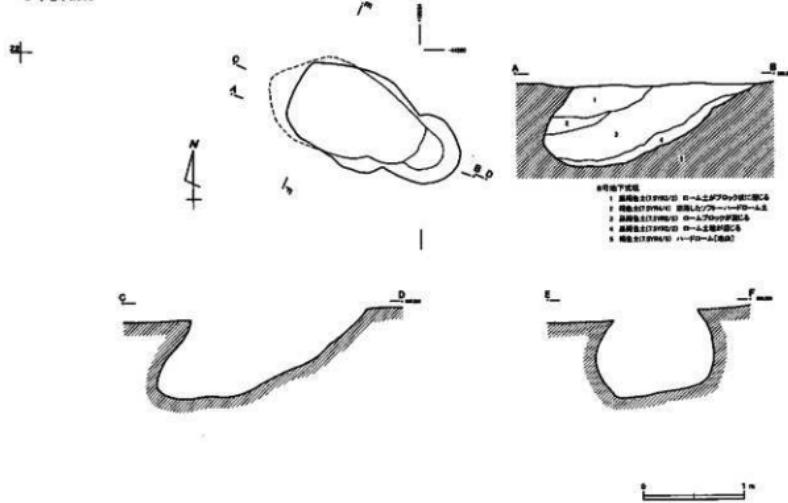


第24図 5・9・10および6号地下式坑

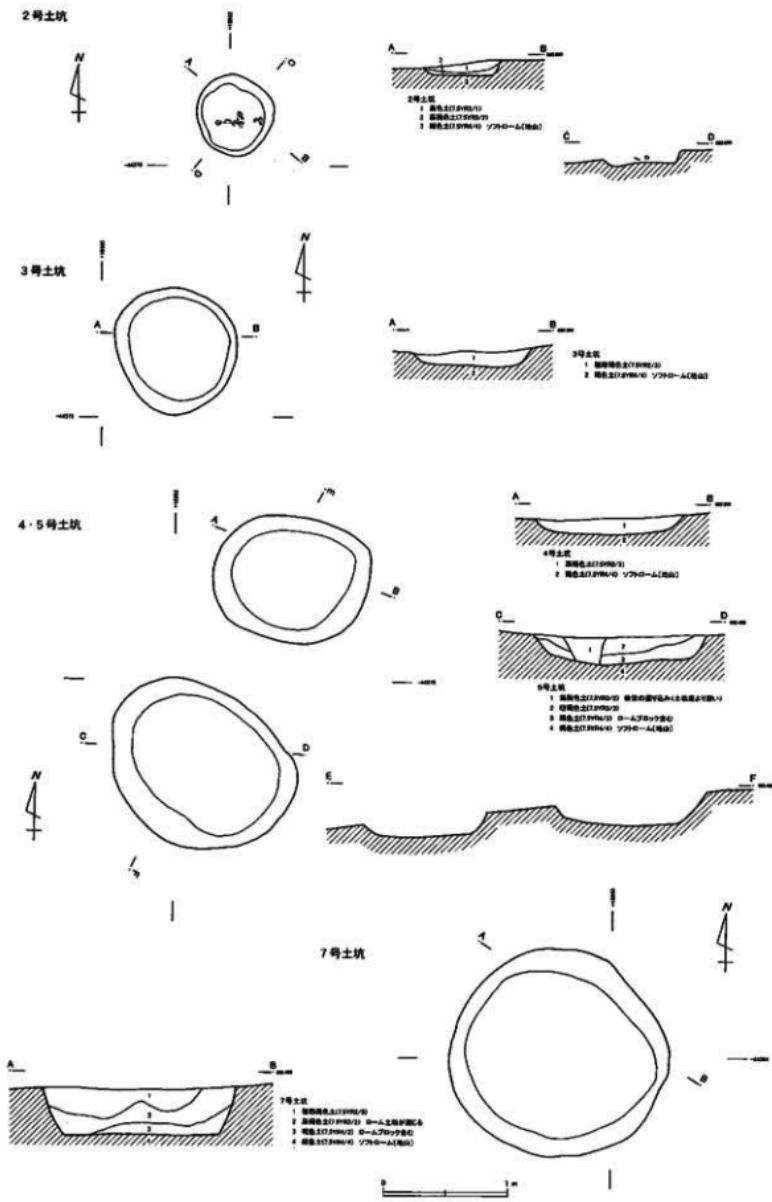
7号地下式坑



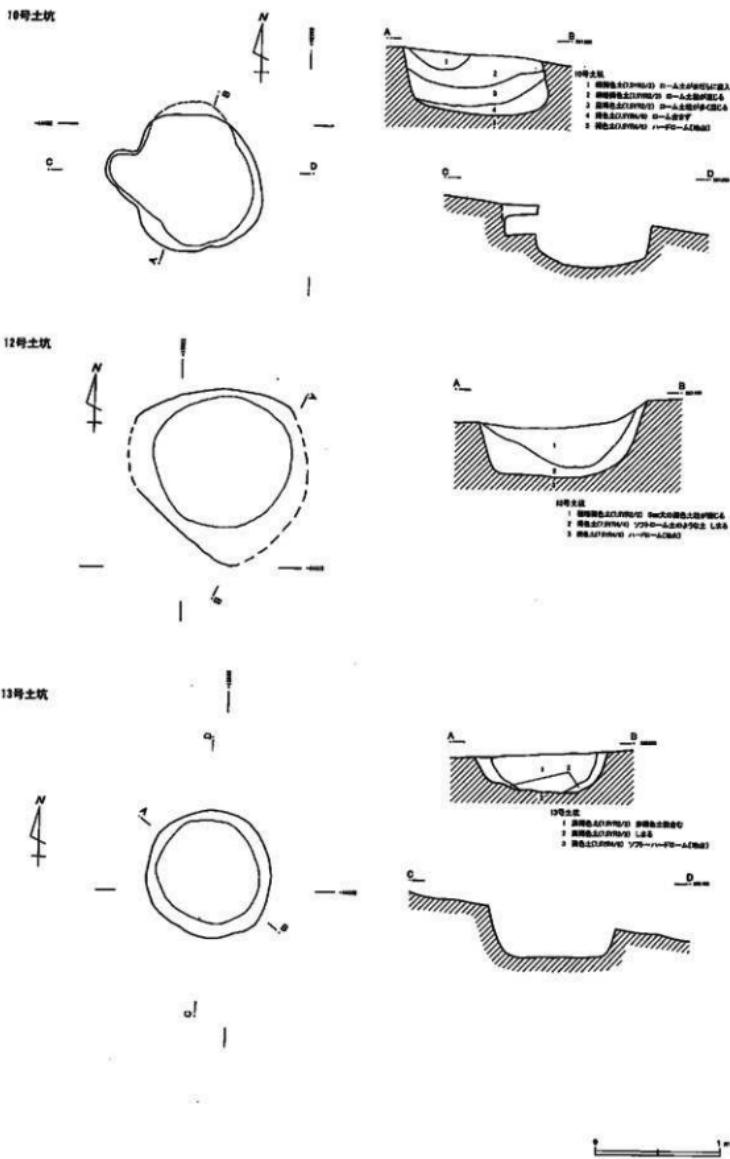
8号地下式坑



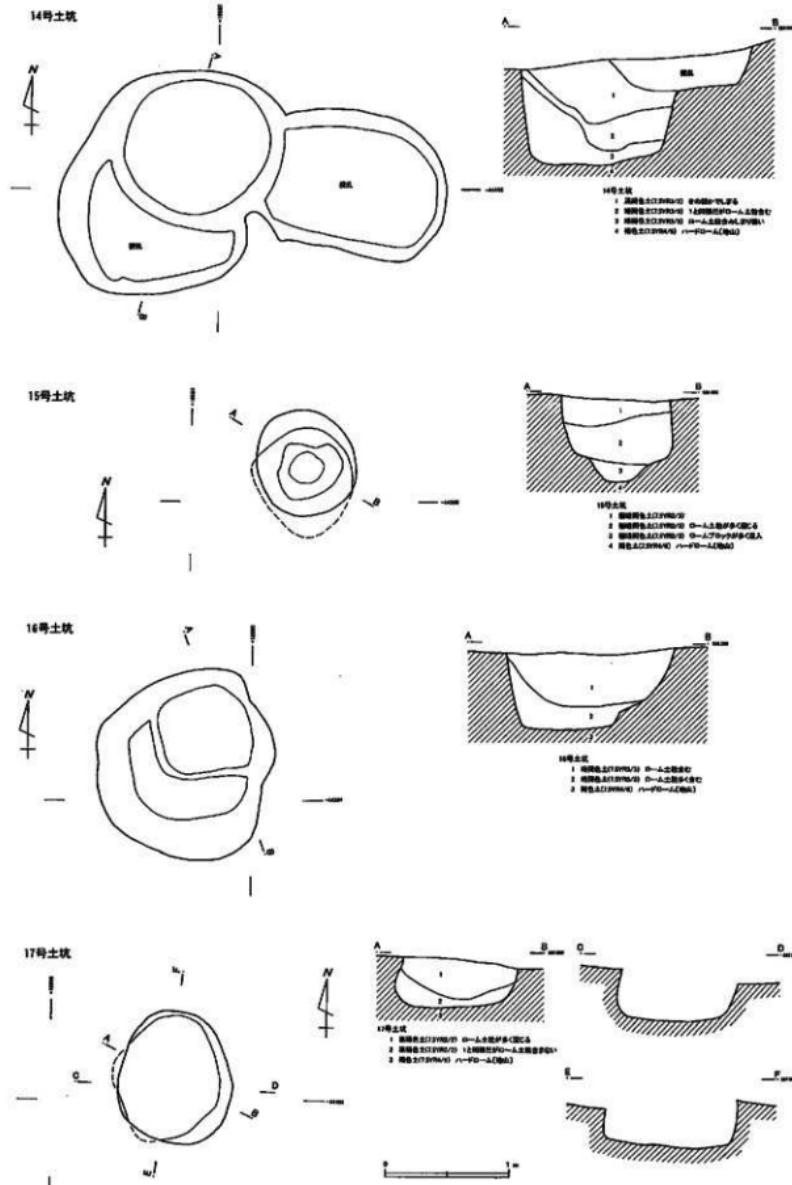
第25図 7・8号地下式坑



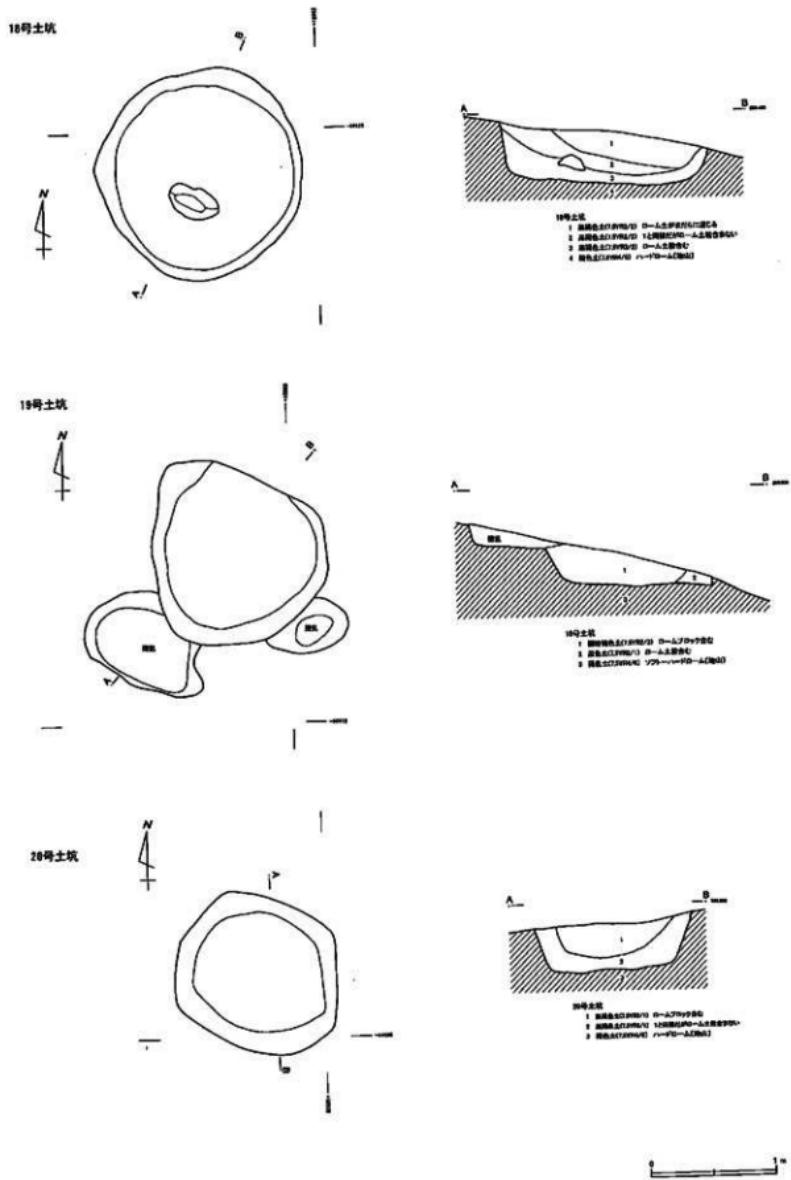
第26図 2～5・7号土坑



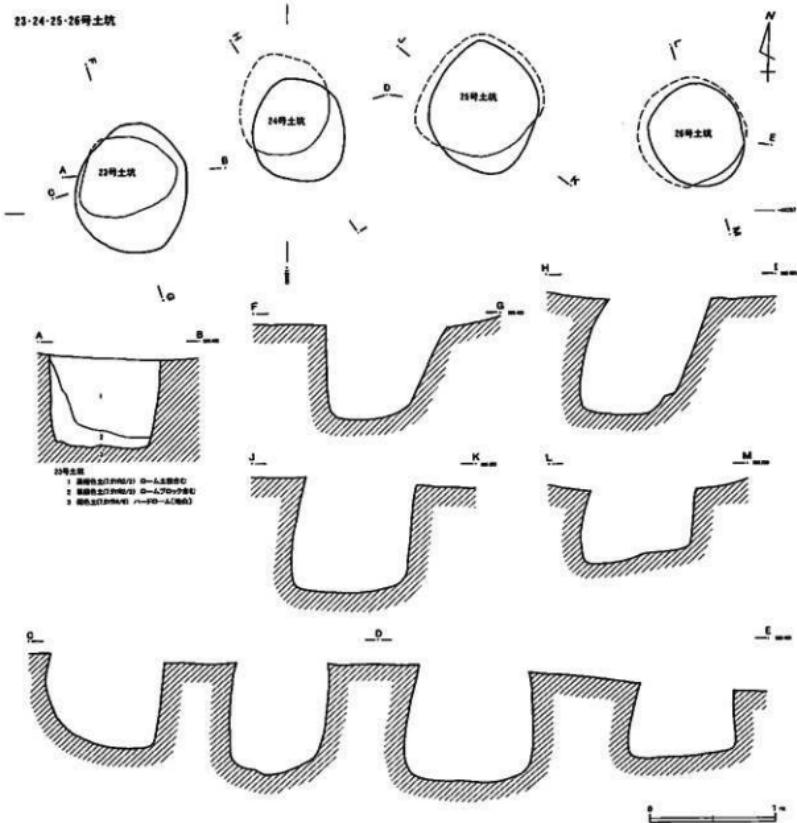
第27図 10・12・13号土坑



第28図 14~17号土坑



第29圖 18~20号土坑



第30圖 23~26号土坑・1号屋外炉



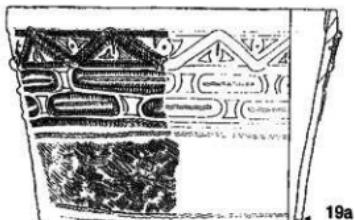
16



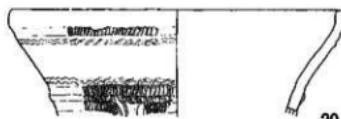
17



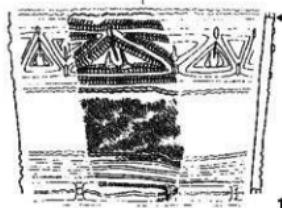
18



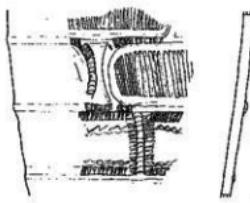
19a



20



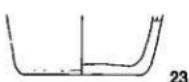
19b



21



22

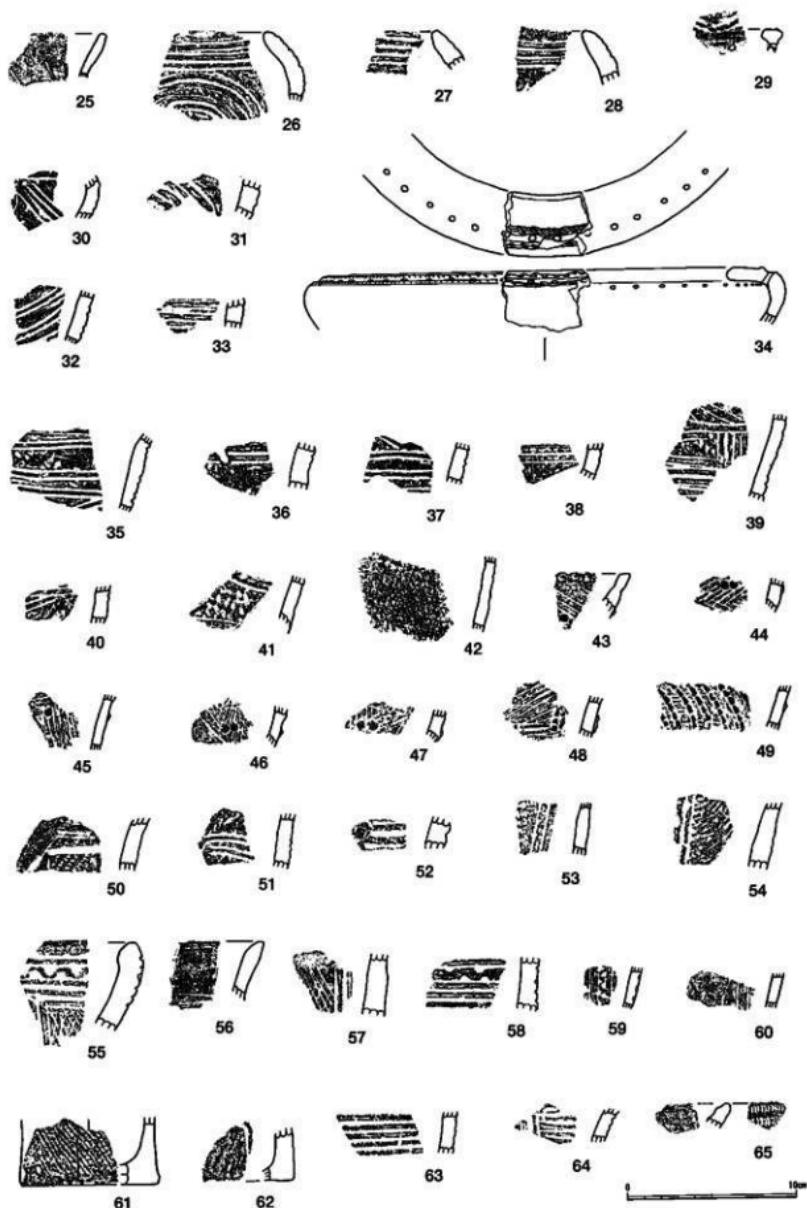


23

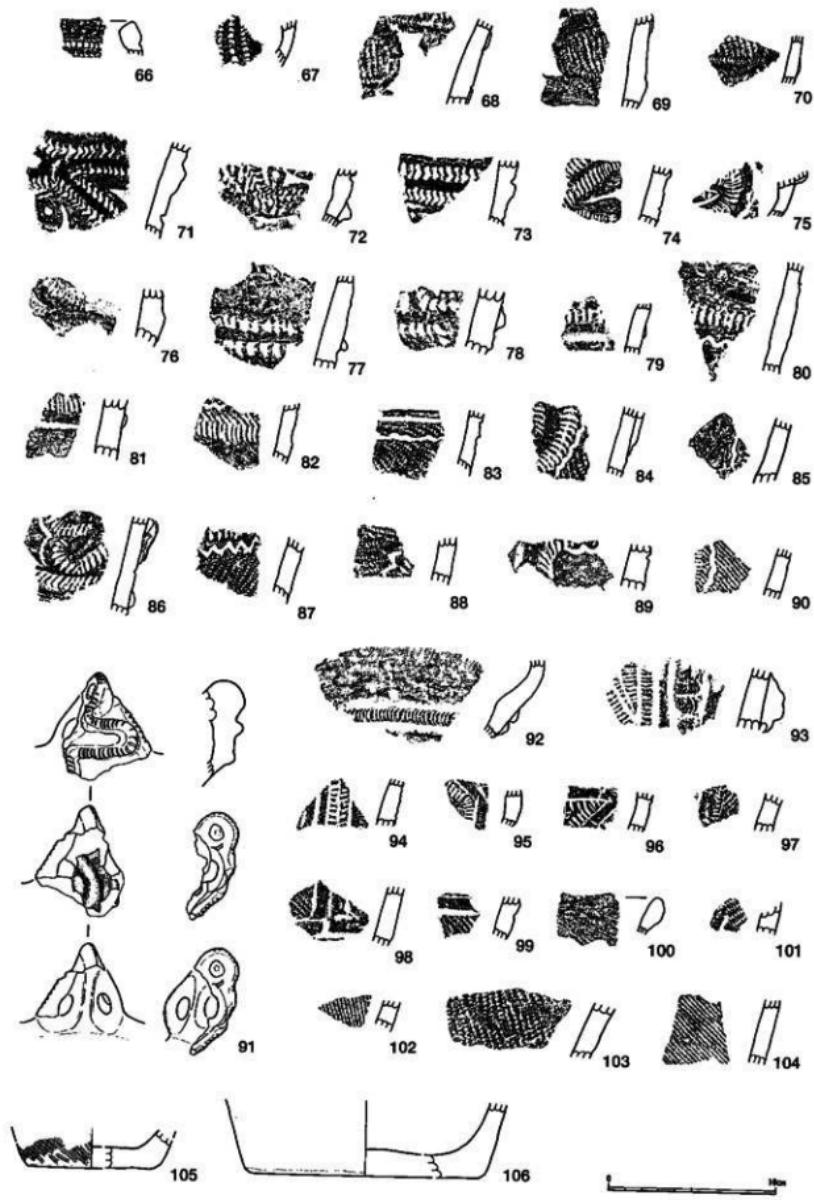


24

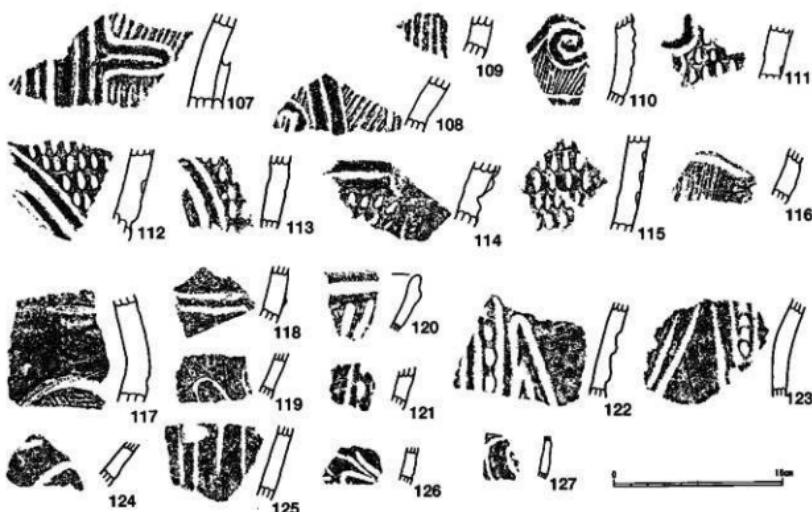
第31図 1・11・22号土坑出土土器



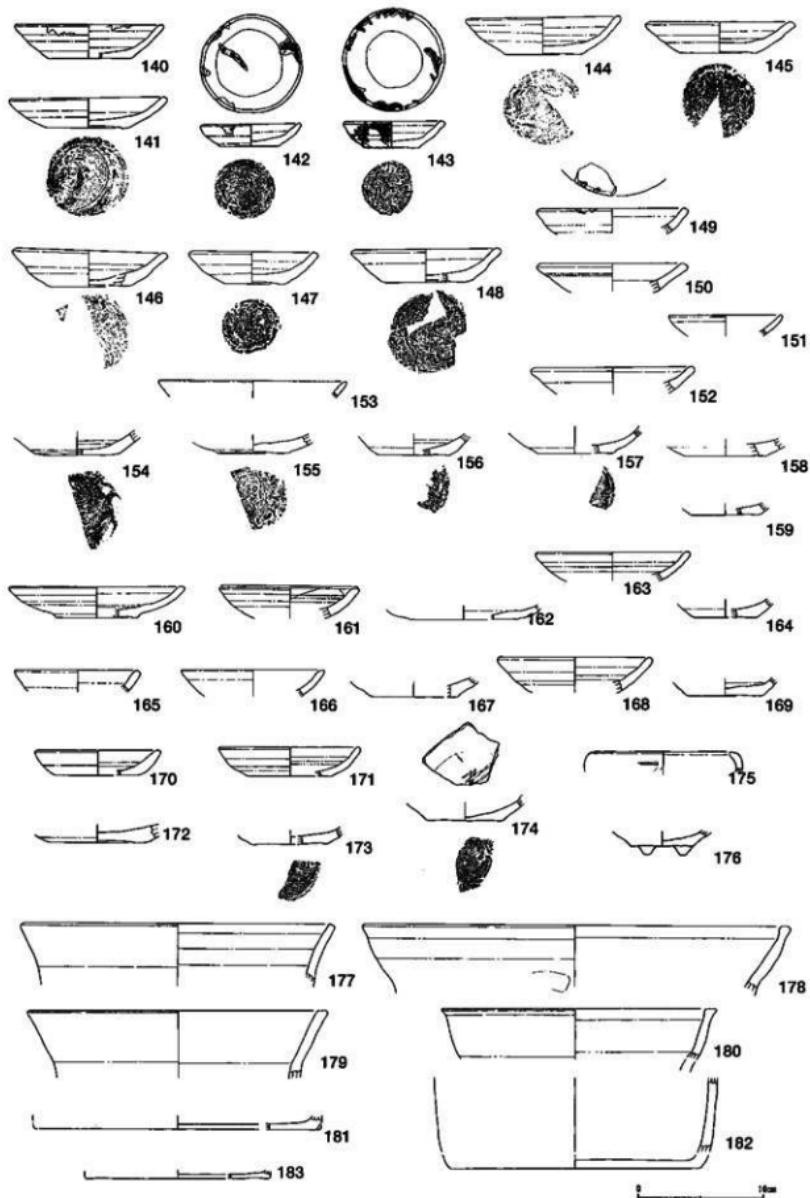
第32図 繩文土器—遺構外（1）



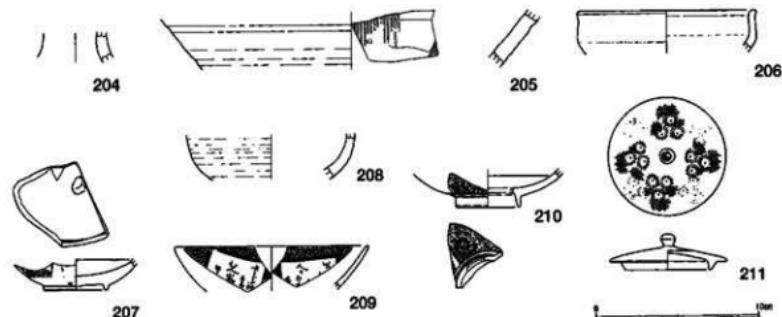
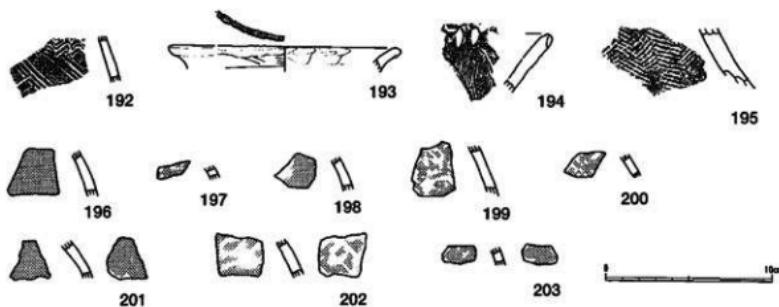
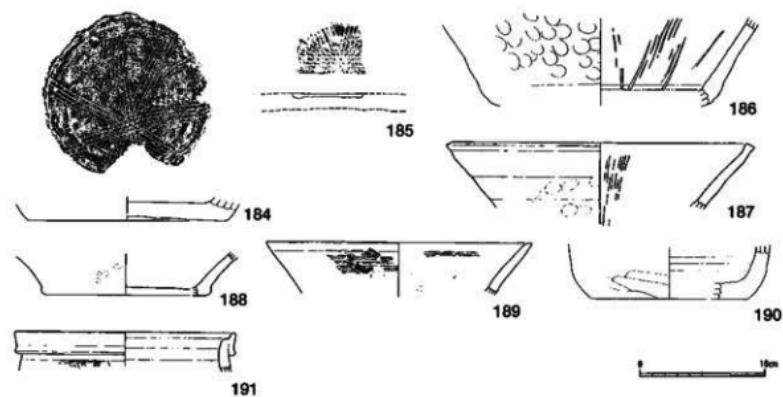
第33図 繩文土器一漁構外（2）



第34図 繪文土器一造構外（3）および石器



第35図 土師質土器・内耳系土器



第36図 維器ほか・造橋外出土土器類



212



213



214



215



216



217



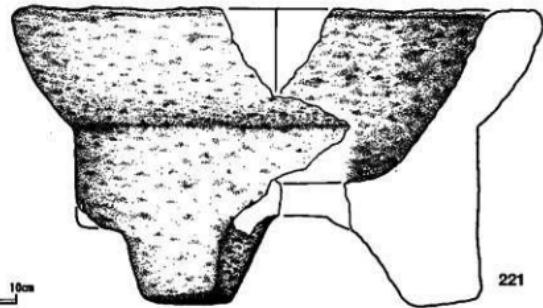
218



219



220



221



第37図 その他の出土遺物

第2表 土坑一覧表

土坑No.	所在グリッド	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	立ち上がり	遺物等	備考
1号土坑	B2~B3	円形	0.96	0.88	0.48	袋状	縄文中期土器	
2号土坑	B2	円形	1.32	1.24	0.26	ゆるやか	骨片	
3号土坑	B2	円形	1.00	0.96	0.12	ゆるやか		
4号土坑	A2	不整円形	1.13	1.00	0.14	ゆるやか		
5号土坑	A2	不整円形	1.58	1.24	0.22	直に近い		
6号土坑	A2	円形	1.30	1.30	0.30	直に近い		
7号土坑	A3~B3	円形	1.70	1.63	0.36	直に近い		
8号土坑	D4	円形	1.20	1.10	0.85	袋状		1号地下式坑より新
9号土坑	B2	長円形	1.75	1.35	0.40	直に近い	土師質土器	4号地下式坑より新
10号土坑	D5	不整円形	1.28	1.10	0.45	直に近い		
11号土坑	D6	円形	1.25	1.25	0.33	直に近い	縄文中期土器	
12号土坑	E6	不整円形	1.40	1.30	0.68	直に近い		
13号土坑	C6~D6	円形	1.04	1.00	0.33	直に近い		
14号土坑	C6~D6	円形	1.50	1.38	0.85	直に近い		
15号土坑	D4	円形	0.85	0.78	0.65	袋状		
16号土坑	E4	不整円形	1.50	1.40	0.60	直に近い		
17号土坑	D5	円形	1.05	0.95	0.40	直に近い		
18号土坑	E6	円形	1.70	1.64	0.44	直に近い		
19号土坑	D6	不整円形	1.58	1.48	0.30	直に近い		
20号土坑	C5	不整円形	1.40	1.20	0.38	直に近い		
21号土坑	D6	不整形	1.05	0.75	0.20	皿状	石匙	
22号土坑	B3	円形	1.16	1.16	0.23	直に近い	縄文中期土器	
23号土坑	D4	不整円形	1.03	0.90	0.75	直に近い		
24号土坑	D4~E4	円形	0.85	0.73	0.94	部分的に袋状		
25号土坑	E4	不整円形	1.07	0.90	0.92	ぼぼ直		
26号土坑	E4	円形	0.82	0.72	0.62	直に近い		
27号土坑	B1	不整円形	1.40	1.28	0.40	直に近い	人骨	

第3表 出土遺物観察表(1)

図No	遺構名	出土位置	種別	器種	Dia(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	残存率	技法・形態の特徴	色調	胎土	備考
第35回140	9号土坑	PP-134・2号竪穴PP-124	土師質土器	皿	(11.8)	(6.2)	2.7	38	30%	形ナフ, 壁凹	に赤褐色: 15026/1		打明顔
第35回141	9号土坑	PP-306	土師質土器	皿	12.4	6.5	2.5	130	100%	形ナフ, 壁凹	銀色: SYRS/6		
第35回142	9号土坑	PP-305	土師質土器	皿	8.1	4.8	1.8	50	100%	形ナフ, 壁凹	に赤褐色: 15026/1		打明顔
第35回143	9号土坑	PP-307	土師質土器	皿	8.3	4.1	2.2	60	100%	形ナフ, 壁凹	に赤褐色: 15026/1		打明顔
第35回144	1号溝	PP-430・1号竪穴PP-677	土師質土器	皿	12.4	6.1	3.1	77	50%	形ナフ, 壁凹	銀色: SYRS/6		
第35回145	1号溝	PP-152・159・162	土師質土器	皿	11.8	5.8	2.5	111	65%	形ナフ, 壁凹	銀色: SYRS/6 (鐵)純鍛		
第35回146	1号溝	PP-623・624	土師質土器	皿	12.2	6.1	3.5	92	50%	形ナフ, 壁凹	銀色: SYRS/6		
第35回147	1号溝	PP-625	土師質土器	皿	10.4	4.7	2.6	95	60%	形ナフ, 壁凹	銀色: SYRS/6		
第35回148	1号溝	PP-324・335・549	土師質土器	皿	(12.1)	(6.2)	2.7	99	40%	形ナフ, 壁凹	銀色: SYRS/6	白色粒子	
第35回149	1号溝	PP-765	土師質土器	皿	(12.0)	—	—	5	<5%	外) ナフ	に赤褐色: 15026/1		打明顔
第35回150	1号溝	PP-540	土師質土器	皿	(11.9)	—	—	18	5%	外) ナフ	銀色: SYRS/6		
第35回151	1号溝	PP-286	土師質土器	皿	(9.0)	—	—	2	<5%	外) ナフ	銀色: SYRS/6		
第35回152	1号溝	PP-461・602・258・533・530	土師質土器	皿	(13.0)	—	—	33	20%	外) ナフ	銀色: SYRS/6		
第35回153	1号溝	PP-622	土師質土器	壺	(15.0)	—	—	2	<5%	外) ナフ	暗赤褐色: SYRS/8	検査	平安か
第35回154	1号溝	PP-553	土師質土器	皿	—	(5.0)	—	10	20%	形ナフ, 壁凹	銀色: SYRS/6		
第35回155	1号溝	PP-537	土師質土器	皿	—	(5.6)	—	43	20%	形ナフ, 壁凹	銀色: SYRS/6		
第35回156	1号溝	PP-156	土師質土器	皿	—	(5.6)	—	15	5%	形ナフ, 壁凹	銀色: SYRS/6		
第35回157	1号溝	PP-173	土師質土器	皿	—	(6.0)	—	20	—	形ナフ, 壁凹	に赤褐色: 15026/1		
第35回158	1号溝	PP-163	土師質土器	皿	—	(6.4)	—	22	10%	形ナフ, 壁凹	銀色: SYRS/6		
第35回159	15号土坑	PP-420	土師質土器	皿	—	(5.2)	—	5	5%	形ナフ, 壁凹	に赤褐色: 15026/1		
第35回160	1号竪穴道構	PP-413・355・26・25・392	土師質土器	皿	(14.0)	2.5	(6.5)	61+8	40%	形ナフ, 壁凹	に赤褐色: 15026/1		打明顔
第35回161	1号竪穴道構	PP-388・365	土師質土器	皿	(11.2)	—	—	20	15%	外) ナフ	に赤褐色: 15026/1		打明顔
第35回162	1号竪穴道構	PP-29	土師質土器	皿	—	(8.0)	—	15	<10%	形ナフ, 壁凹	に赤褐色: 15026/1		
第35回163	2号竪穴道構	PP-123	土師質土器	皿	(12.4)	—	—	8	<5%	外) ナフ	に赤褐色: 15026/1		
第35回164	2号竪穴道構	PP-126	土師質土器	皿	—	(5.0)	—	11	<5%	形ナフ, 壁凹	に赤褐色: 15026/1		
第35回165	5号地下式坑	PP-Naなし	土師質土器	皿	(9.8)	—	—	3	<5%	外) ナフ	銀色: 15YR2/6	雲母少量混入	
第35回166	8号地下式坑	PP-Naなし	土師質土器	皿	(11.4)	—	—	6	<10%	外) ナフ	銀色: SYRS/6		
第35回167	8号地下式坑	PP-Naなし	土師質土器	皿	—	(7.3)	—	7	<5%	形ナフ, 壁凹	銀色: SYRS/6		
第35回168	1号住居周辺	PP-517	土師質土器	皿	(12.4)	—	—	22	20%	外) ナフ	に赤褐色: 15026/1		
第35回169	1号住居周辺	PP-523・453	土師質土器	皿	—	5.6	—	28	10%	形ナフ, 壁凹	銀色: SYRS/6		
第35回170	1号住居周辺	PP-452	土師質土器	皿	(10.0)	2.0	(5.6)	12	10%	形ナフ, 壁凹	に赤褐色: 15026/1		
第35回171	遺構外	PP-483	土師質土器	皿	(11.0)	(5.7)	2.3	11	10%	形ナフ, 壁凹	に赤褐色: 15026/1		
第35回172	遺構外	PP-484	土師質土器	皿	—	(8.2)	—	40	<10%	形ナフ, 壁凹	に赤褐色: 15026/1	雲母混入	
第35回173	試掘26トレ	Noなし	土師質土器	皿	—	(6.0)	—	14	<10%	形ナフ, 壁凹	暗赤褐色: SYRS/6	雲母少量混入	
第35回174	試掘26トレ	Noなし	土師質土器	皿	—	(6.0)	—	15	10%	形ナフ, 壁凹	銀色: SYRS/6	検査	器内に細繊維
第35回175	試掘26トレ	Noなし	土師質土器	内溝土器	(11.0)	—	—	8	<5%	外) ナフ	銀色: 15YR6/6		
第35回176	試掘26トレ	Noなし	土師質土器	三足土器	—	(4.9)	—	20	15%	形ナフ, 壁凹	に赤褐色: 15026/1		
第35回177	1号溝	PP-609	内耳土器	鍋	(25.0)	—	—	24	<5%	内・外) ナフ	に赤褐色: 15026/1		
第35回178	1号溝	PP-147	輪器	すり鉢	(34.4)	—	—	45	<5%	形ナフ, 壁凹	灰褐色: 15YR4/1		
第35回179	1号溝	PP-611	内耳土器	鍋	(24.0)	—	—	31	<5%	内・外) ナフ	黒褐色: SYR2/1	所蔵文書	
第35回180	1号溝	PP-643	内耳土器	鍋	(22.5)	—	—	32	<5%	内・外) ナフ	黒褐色: SYR1.7/1	所蔵文書	
第35回181	1号溝	PP-552	内耳土器	焰培	—	(23.0)	—	24	<5%	—	黒褐色: 15YR4/3		
第35回182	1号竪穴	PP-24	内耳土器	鍋	—	—	—	32	<5%	外) 炎培調整	に赤褐色: 15026/1		
第35回183	試掘26トレ	PP-Naなし	内耳土器	焰培	—	(22.0)	—	19	<5%	—	に赤褐色: 15026/1		

第4表 出土遺物観察表(2)

団No	遺構名	出土位置	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	残存率	技法・形態の特徴	色調	胎土	備考	
第36団184	1号溝	PP-325	鍍器	すり鉢	—	15.8	—	418	20%	内: 帽日本車か 外: 帽日本車か	褐色: SVR6/6			
第36団185	1号溝	PP-649.651	鍍器	すり鉢	—	—	—	10	<5%	内: 帽日本車か	褐色: SVR6/6			
第36団186	1号溝	PP-272.670	鍍器	すり鉢	—	—	—	183	15%	内: 斜面調整 外: 帽日本車か	褐色: SVR6/6			
第36団187	試掘26トレ	PP-N _o なし	鍍器	すり鉢	(37.0)	—	—	140	10%	内: 斜面調整 外: 帽日本車か	褐色: 7.5VR6/6			
第36団188	試掘26トレ	PP-N _o なし	鍍器	すり鉢	—	(19.3)	—	70	<5%	外: 指頭調整	褐色: SVR6/6			
第36団189	試掘26トレ	PP-N _o なし	鍍器	すり鉢	(32.0)	—	—	70	<10%	外: 指頭調整	褐色: 7.5VR7/6			
第36団190	1号溝	PP-250	鍍器	鉢?	—	(12.4)	—	99	<10%	内: 帽日本車か 外: 帽日本車か	褐色: 7.5VR6/3			
第36団191	試掘26トレ	PP-N _o なし	陶器	甕	(24.6)	—	—	90	<5%	内: 字口付	褐色: 7.5VR6/3	常滑焼		
第36団192	道横外	PP-N _o なし	弥生土器	甕	(14.0)	—	—	—	<5%					
第36団193	道横外	PP-636	弥生土器	甕	—	—	—	—	<5%					
第36団194	道横外	PP-N _o なし	弥生土器	甕	—	—	—	—	<5%					
第36団195	道横外	PP-N _o なし	弥生土器	甕	—	—	—	—	<5%					
第36団196	道横外	PP-N _o なし	弥生土器か	甕	—	—	—	—	<5%				外面赤彩	
第36団197	道横外	PP-N _o なし	弥生土器か	甕	—	—	—	—	<5%				外面赤彩	
第36団198	道横外	PP-N _o なし	弥生土器か	甕	—	—	—	—	<5%				外面赤彩	
第36団199	道横外	PP-N _o なし	弥生土器か	甕	—	—	—	—	<5%				外面赤彩	
第36団200	道横外	PP-N _o なし	弥生土器か	甕	—	—	—	—	<5%				外面赤彩	
第36団201	道横外	PP-N _o なし	弥生土器か	甕か	—	—	—	—	<5%				内外面赤彩	
第36団202	道横外	PP-N _o なし	弥生土器か	甕か	—	—	—	—	<5%				内外面赤彩	
第36団203	道横外	PP-N _o なし	弥生土器か	甕か	—	—	—	—	<5%				内外面赤彩	
第36団204	5号地下式坑	PP-N _o なし	陶器	木腹か	—	—	—	—	<5%	胎輪				
第36団205	道横外	PP-339	陶器	すり鉢	—	—	—	—	<10%	鐵輪				
第36団206	道横外	PP-594	陶器	天日晒	(11.0)	—	—	—	<10%	鐵輪				
第36団207	道横外	PP-474	陶器	甕	—	4.0	—	—	10%	良質による密付				
第36団208	道横外	PP-348	陶器	甕	—	—	—	—	<10%	灰輪				
第36団209	道横外	PP-351	紐器	甕	(12.0)	—	—	—	5%	調節輪写染付				
第36団210	道横外	PP-410	紐器	甕	—	4.0	—	—	5%	調節輪写染付				
第36団211	道横外	PP-385	陶器	甕	7.2	2.8	—	—	100%	スタンプ泥乾付				
第37団212	1号堅穴遺構	PP-359	銅製品残欠	容器?	長5.3	—	—	19	—					
第37団213	1号溝	PP-542	自然遺体	馬の骨	長3.7	—	—	7	—					
第37団214	1号溝	PP-558	錢貨	元豊通宝	径2.4	—	—	—	—				篆書	
第37団215	道横外	試23T	錢貨	元豊通宝	径2.3	—	—	—	—				篆書	
第37団216	道横外	PP-337	錢貨	永祐通寶	径2.2	—	—	—	—					
第37団217	道横外	PP-313	錢貨	永祐通寶	径1.7	—	—	—	—					
第37団218	道横外	PP-490	土製品	碁石	径1.9	—	—	—	—					
第37団219	道横外	PP-485	石製品	石板残	厚0.3	—	—	—	—					
第37団220	10号地下式坑	PP-N _o なし	鉄製品	刀子	長19.7	—	—	—	—					
第37団221	1号堅穴遺構	N o-51	石製品	ひで鉢	(32.2)	17.8	(24.4)	—	—					

第5節 出土遺物の理化学的分析

調査の一環として、出土遺物のうち「27号土坑出土人骨1体」「遺構及び遺構外出土の黒曜石製石器及び薄片20点」「1号堅穴遺構出土銅製品残1点」の3件について、関係機関の協力を得て理化学的な手法での分析を実施しているがで、ここではこれらの分析により得られた成果の報告を掲載する。

(1) 27号土坑出土人骨の分析（形質鑑定）

調査区の北西際に確認された27号土坑の内部に、四肢を屈して埋葬された状態で検出された1体の古人骨について、形質等の正確な把握の目的で、聖マリアンナ医科大学解剖学教室の協力によって分析を進めた。分析の結果は以下に掲げる報告のとおりである。

上の原下割遺跡発掘人骨について

星野敬吾・平田和明

(聖マリアンナ医科大学解剖学教室)

1 形質鑑定所見

上の原下割遺跡から出土した中世に属する人骨1体の形質鑑定所見について記載する。

保存状態はきわめて不良で、軽い触圧を加えるだけで破壊されてしまう。

残存部位は、頭蓋骨および歯片、ほか少量の骨片が認められる。

頭蓋は左右から強く圧平されている。側面觀から成人と推定される。左外耳孔が確認できるが乳様突起は破損していて観察できない。側頭縫も、破損により明瞭には認められない。

数個の歯片が観察可能である。齒式を以下に示す。

XXXXXX 1×3 4×6 XX
XXXXXX XX3×5XXX

(注) アラビア数字(1~8): 永久歯

×: 破損・欠失

咬耗は強く、Martinの1~3度を示す。成人であることは間違いない。

歯種・部位によって、咬耗の程度が偏っている。上顎左M1および下顎左P2は咬耗1度であるが、上顎左P1は摩耗によって歯冠近心半が消失するほどである。同様に、上顎左Cにも唇側面から遠心部にかけて大きく摩耗が認められる。

また、その咬耗形態が特殊なことから、何らかの特殊な習慣を持った個体であった可能性がある。一例として、苧積み（おうみ）作業により、前歯に特殊な摩耗を見せることがある。

2 まとめ

上の原下割遺跡から出土した人骨は一体の成人人骨で、主な残存部位は頭蓋および歯片である。保存状態はきわめて不良である。

その歯片から、成人であることは間違いないと思われる。歯に特殊な摩耗を生じさせるような特定の生業に従事していた可能性もある。

(2) 出土黒曜石の産地推定

今回の調査で、各遺構や遺構外から出土した20点の黒曜石製の石器及び薄片について、その石材である黒曜石の産地推定の分析を行った。分析は、沼津工業高等専門学校物質工学科の望月明彦氏に委託して行ったもので、分析結果の詳細は以下に掲出する報告のとおりである。

上の原下割遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定

望月明彦
(沼津工業高等専門学校物質工学科)

1 分析法

試料にX線を照射すると、試料に含まれる元素ごとに違った波長（エネルギー）をもつ蛍光X線が発生する。発生した蛍光X線の波長（エネルギー）から含まれている元素の種類がわかり、それぞれの元素の蛍光X線強度から元素組成を知ることができる。これが蛍光X線分析の簡単な原理である。試料をまったく損傷せずに分析でき、迅速に分析ができることが最大の特長である。分析装置にはセイコーアンスツルメンツ社のSEA-2110L蛍光X線分析装置を用いた。

測定条件は以下のとおりである。

印加電圧：50 kV	印加電流：産地原石 17 μA	遺跡出土試料 自動設定
雰囲気：真空	測定時間：産地原石 500sec	遺跡出土試料 240sec
		照射径：10mm

2 分析試料

産地原石：北海道から九州まで主な産地の原石はほとんど分析されている。

遺跡出土試料：山梨県埋蔵文化財センターによって発掘が行われた上の原下割遺跡出土の黒曜石製石器20点である。住居址や溝などから発掘された剥片15点、石錐3点、搔器1点、楔形石器1点からなる。

3 産地推定法

蛍光X線分析による産地推定法では、あらかじめ産地から採取した原石を分析しておき、産地原石によるデータベースを作成しておく。同様に遺跡出土試料を分析し、原石のデータベースと比較して産地を推定する。

推定法としては図を用いて推定を行う判別図法と多変量解析法である判別分析の二つの方法を用いた。これらの方法で用いた指標は以下のとおりである。

各元素の蛍光X線強度から次のような産地推定のための指標を計算する。

A= (Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)とした時、

$$Rb\text{分率} = Rb\text{強度} \times 100/A \quad Sr\text{分率} = Sr\text{強度} \times 100/A \quad Zr\text{分率} = Zr\text{強度} \times 100/A$$

$$Mn\text{強度} \times 100/Fe\text{強度} \quad log(Fe\text{強度}/K\text{強度})$$

判別図法ではZr分率を除く指標をプロットしてグラフ化する。以下の図で淡色の記号は産地原石を示し、黒色の●は上の原下割遺跡出土の黒曜石を示す。第38-1図は横軸にRb分率、縦軸にMn強度×100/Fe強度をプロットした図である。第38-2図は横軸にSr分率、縦軸にlog(Fe強度/K強度)をプロットした図からなる。●がプロットされたところの原石群がその試料の推定産地となる。

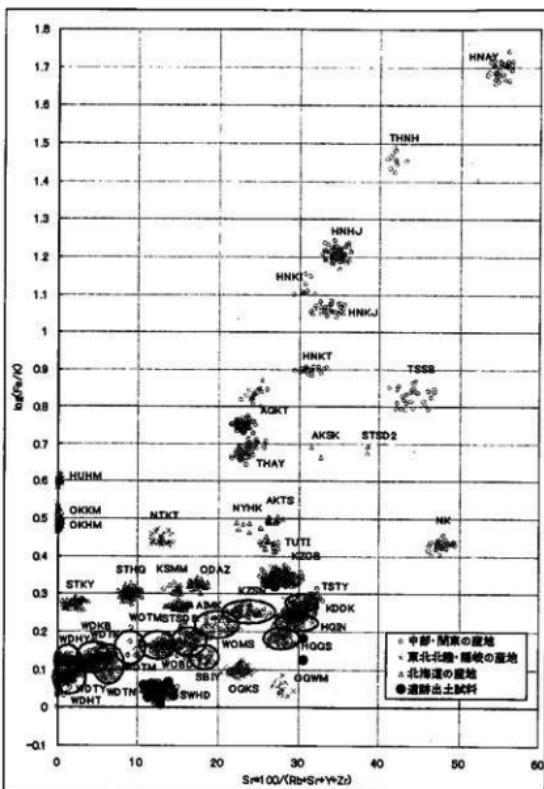
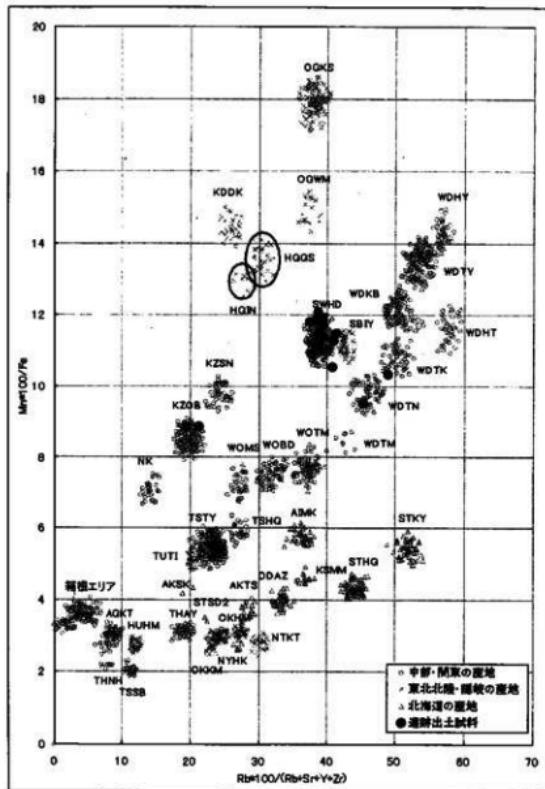
判別分析では、前述のすべての指標を用いる。判別図法で産地を推定する時は、遺跡出土試料のプロットと最も近い所にプロットされる産地をその試料の産地と判別する。言い換えれば、試料と各産地群の中心との距離を比較して、その距離がもっとも短い産地をその試料の産地としている。判別図法の場合には、縦軸と横軸だけの2次元であるが、数学的には3次元以上でも距離を計算することが可能である。判別分析では遺跡出土の各試料毎に各産地との距離（マハラノビス距離と呼ばれる）を計算する。試料との距離がもっとも小さい産地がその試料の産地である、と推定される。また、それぞれの産地とのマハラノビス距離から、試料が各産地に属する確率も計算される。確率が1に近いほど信頼性が高い推定である、といえる。

判別図法と判別分析との結果は非常に一致度が高いが、和田應山群と和田小深沢群など元々類似した群の場合には異なる結果となる場合もある。このような場合は判別分析の結果を採用している。

4 産地推定結果

第38-1図、第38-2図中の●は上の原下割遺跡から出土した各試料のプロットである。これらのプロットを淡色で示した記号と比較することにより、上の原下割遺跡では長野県の和田エリヤ（2点）、諏訪エリヤ（14点）、蓼科エリヤ（2点）のほかに神津島エリヤ（2点）の黒曜石が検出された。

第38回 黒曜石产地推定判別図



第5表 上の原下割遺跡出土黒曜石製石器の産地推定結果

分析番号	遺物番号	判別図 判別群	判別分析					器種
			候補1	候補2	距離1	距離2	確率1	
USW-1	表様	SWHD	SWHD	SBIY	10.79	71.66	1	0
USW-2	D-6 G	SWHD	SWHD	SBIY	8.62	81.87	1	0
USW-3	1溝	KZOB	KZOB	KZSN	14.88	51.32	1	0
USW-4	1住	TSTY	TSTY	TSHG	5.34	29.1	1	0
USW-5	1溝	SWHD	SWHD	WDTN	10.54	95.94	1	0
USW-6	1住周辺	SWHD	SWHD	SBIY	8.87	115.5	1	0
USW-7	1住	SWHD	SWHD	SBIY	4.78	94.88	1	0
USW-8	1土	WDTN	WDTN	WDTM	2.52	32.13	1	0
USW-9	1住	SWHD	SWHD	SBIY	4.2	98.17	1	0
USW-10	1住	TSTY	TSTY	TSHG	2.88	25.12	1	0
USW-11	1住	SWHD	SWHD	SBIY	6.09	56.04	1	0
USW-12	9土	SWHD	SWHD	SBIY	1.01	82.7	1	0
USW-13	22土	SWHD	SWHD	SBIY	1.1	95.48	1	0
USW-14	1溝	SWHD	SWHD	SBIY	20.2	88.7	1	0
USW-15	1溝	SWHD	SWHD	SBIY	14.2	130.78	1	0
USW-16	1溝	SWHD	SWHD	WDTN	3.46	94.59	1	0
USW-17	1溝	WDTK	WDTK	WDTN	6.79	13.07	0.9529	0.0471
USW-18	SX01	SWHD	SWHD	WDTN	21.73	79.26	1	0
USW-19	SX01	KZOB	KZOB	KZSN	8.72	37.58	1	0
USW-20	SX01	SWHD	SWHD	SBIY	13.35	82.71	1	0

上記表において、判別図判別群の列は判別図法による結果を示す。判別分析の候補1、候補2の列は判別分析による推定産地の第1候補、第2候補を示す。また、距離1、距離2は個々の試料と候補1、候補2の産地間のマハラノビス距離を、確率1、確率2は個々の試料が候補1、候補2の産地に属する確率を示す。本遺跡では判別図法と判別分析の結果は一致している。

(3) 1号竪穴遺構出土銅製品残片の成分分析

調査区の西端に検出された1号竪穴遺構の床面付近から出土した銅製品残片（第37図212）について、当初は青銅製品を見て取り扱っていたが、正確な材質を把握する目的で成分分析を行った。分析は、川崎テクノリサーチ株式会社に委託して行ったもので、結論的には青銅ではないことが判明した。以下に分析結果の詳細を掲げる。

山梨県上の原下割遺跡出土銅製容器残片の分析・調査

岡原正明・小川太一・伊藤俊治
(川崎テクノリサーチ株式会社分析・評価センター埋蔵文化財調査研究室)

1はじめに

山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査した、上の原下割遺跡1号竪穴遺構より出土した銅製容器残片について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査の依頼があった。

調査の観点として、①銅製容器残片の化学成分、②観察上の特記事項など、を中心に調査した。その結果について報告する。

2 調査項目および試験・検査方法

2-1 調査項目

資料No	名称	重量 g	着磁力	M C反応	外観写真	成分分析
1	銅製容器残片	18.6	無し	有	○	○

註：(1) M C反応とはメタルチェッカー（金属探知機）への感應を言う。

2-2 重量計測と着磁力調査

計重は電子天秤を使用して行い、小数点1位で四捨五入した。着磁力調査については、直径30mm・1300ガウス(0.13 テスラ)のリング状フェライト磁石を使用し、官能検査により「強・やや強・中・やや弱・弱」の5ランクで個別調査を行ったが、資料の着磁力は、認められなかった。その結果は、調査項目に表示した。

2-3 外観の観察と写真撮影

入念な観察を行うとともに、資料をmm単位まであるスケールを同時写し込みで、かつ光線の照射方向を工夫し表面状況が明瞭に識別できるようにカラーで撮影した。

2-4 蛍光X線による化学成分分析

化学成分分析は、堀場製作所製蛍光X線分析装置(MESA-500)を用いて、資料の錆化表面と一部表面錆化層を研磨し、地金に近い状態にした研磨面の2箇所について、完全非破壊分析を行った。測定条件は、それぞれの分析結果のスペクトル図の下に記載した。

3 調査結果および考察

資料の調査結果および考察を次に述べる。

資料は長さ53mm×幅13mm×厚み15~12mmの両面にやや湾曲した溝を持つ、鋳造湯口近傍の破片と思われる。全体に砂眼が固着し溝の中には小石らしきものも呑み込んでいる。片方の溝の壁は浅く、他方は深い。緑色の錆が全体に発生しており、一部ガス穴も見える。欠落部分が多いので鋳造時の破損品か、湯口近傍のものかもしれない。また、発錆により脆くなつて欠落したものか、当初から欠落したものかは判らない。表面付着粉は、磁石に付く。錆化鉄の影響であろう。本体のメタルチェッカーによる検査では、残存金属性反応がある。重量は18.6gである。

蛍光X線分析のスペクトルとその分析値を第39図に示した。また、比較のため分析値を下表にまとめて示した。

第6表 萤光X線による化学成分分析結果

資料名	Cu (銅)	Pb (鉛)	Sn (錫)	As (砒素)	Sb (アンチモニン)	Si (珪素)	Al (アルミニウム)	Fe (鉄)	Ti (チタン)	Ca (カルシウム)	K (カリウム)
銅製容器残片 (錆表面)	48.7	9.5	0.4	5.1	0.2	21.2	9.5	4.0	0.5	0.6	0.4
標準偏差 (σ)	0.5	0.7	0.1	0.4	0.1	0.3	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1
銅製容器残片 (研磨面)	91.3	2.8	0.2	3.5	0.1	1.2	0.7	0.2	0.0	0.0	0.0
標準偏差 (σ)	1.0	0.9	0.1	0.6	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0

定量値は、検出された元素濃度の合計を100重量%として補正して求めた

標準偏差は、分析値の平均値に対するバラツキを表す値

蛍光X線による研磨面の化学成分分析結果は、主要成分为銅(Cu) 91.3%でと多く、次いで砒素(As) 3.5%、鉛(Pb) 2.8%そして珪素(Si) 1.2%であった。錫(Sn)は0.2%と少なく、亜鉛(Zn)も検出されなかつた。また、その他アンチモン(Sb)、アルミニウム(Al)、鉄(Fe)が、微量成分として僅かながら含まれていた。主要成分为銅(Cu)で、錫(Sn)は存在するが微量であり、かつ亜鉛(Zn)も検出されないことから、本銅製容器残片は、銅(Cu)と錫(Sn)の合金である青銅もしくは銅(Cu)と亜鉛(Zn)の合金である真鍮とは考えにくい。

以上のことから、本資料は、鉛と銅が全く固溶しないので¹⁾、単に鉛(Pb)が機械的に分散した銅と考えられる。

また、本資料の特徴として、砒素(As)が3.5%とやや高い値を示した。これは、銅の精錬時、原料鉱石から不純物として含まれてきたのか、あるいは意図的に添加したのかは確認できなかった。

一方、公知の古代銅製品類(銅鐸、銅矛、銅劍、古錢、銅鏡等)の主要成分为銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)の配合比²⁾と比較すると(第39図)、本資料は、錫(Sn)含有量の少ない朝鮮・中国出土銅利器類(銅矛、銅戈)の配合比に近いものであった。

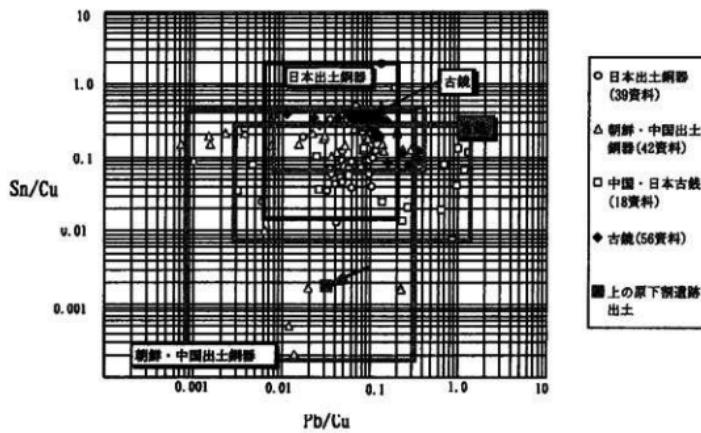
一方、銹化表面の蛍光X線による分析結果は、研磨面の分析結果と比較して、珪素(Si)とアルミニウム(Al)の含有量が非常に高く、これは、資料表面に付着した土壤由来の化合物によると考えられる。また、銹化表面は、相対的に銅(Cu)の含有量が低くなく、研磨面の分析結果と相関性を示さなかつた。これは、從来より表面銹化層が、土中での環境、雰囲気などによって、同じ地金でも組成の異なる銹(腐食生成物)が発生しており、銹上からの分析値と地金とは殆ど相關がないこと³⁾が知られ、また鉛(Pb)含有量の大きな違いは資料中の鉛(Pb)の偏析(不均一に分散)の影響が考慮されること等によるものと推察される。

本資料の場合、X線回折による表面銹化部の分析を行っていないので、明確に断言出来ないが、銹化表面の蛍光X線分析において、塩素(Cl)が検出されないこと及び銹の色調が緑色であること、等から、塩基性炭酸銅である「緑青」すなわちマラカイト[Malachite: CuCO₃·Cu(OH)₂]の存在が考えられる。

また、本報告では、資料の非破壊調査・分析を前提とし、資料を埋め込み、研磨して、その組織を観察する金属組織の形態分析を行っていないことから、本資料の製造方法に関する知見は、得られなかつた。

4 参考文献

- 1) 亀井 清「青銅器の生産」「終末期古墳の諸問題」学生社 p.81 1989
- 2) 中口 裕「銅の考古学」雄山閣社 p.141 1986
- 3) 千葉県立房總風土記の丘「銅製資料分析・調査」川鉄テクノリサーチ(株) 1991
- 服部哲則「青銅器機器分析の基礎的研究」国立歴史民俗博物館研究報告第38集 p.301 1992



第39図 銅製造物のPb/Cu-Sn/Cu分布図

第5章 調査のまとめ

今回の調査で明らかになった遺構・遺物については、前章に見たとおりであるが、概していえば縄文時代中期と中世に中心があるといえる。ここでは、それぞれの時期にこの遺跡においてどのような視点があるのか列記して調査のまとめにかえたい。

第1節 縄文時代の遺構・遺物について

(1) 壺穴住居跡の在り方

約3,000m²の調査区の中で、結果的に確認することができた縄文時代の住居跡は、1軒のみであった。こうした状況を縄文集落という観点で見ると、果たして1軒のみのムラなのか、または調査区外に共に集落を構成する別な住居が存在したのかという点が注意される。

もっとも一つの遺跡の中で何軒もの住居が重複し合って姿を現す、よく見慣れた状況は何世代にも及ぶ長い時間の集積の結果であって、それらの中で全く同時に存在した住居を抽出し、その時点での縄文のムラの景観を考えると数軒程度の壺穴住居の群からなることはよく知られていることではあるが、いずれにせよ、個々での状況は、短い時間の中の希薄な在り方といえるのではないかと思われる。本遺跡の西方1kmにある桂野遺跡が広い面積に及びかつ縄文時代の前期から中期の終わり頃までの長期に渡るとの対照的である。ちなみに本遺跡のように一定の面積を調査した中にも希薄な在り方が確認されている甲府盆地近辺での事例として、住居の年代は少し新しいが、勝沼町綿塚の沖田遺跡での調査例が想起される。これは1996年に、3万m²近くを試掘調査した結果、中期後半の壺穴住居が1軒だけ単独で確認されているものである（文献1）。

(2) 1号土坑と11号土坑・22号土坑

つぎに今回の調査の中で比較的豊富に遺物を伴い、それにより縄文時代中期の、恐らく壺穴住居跡とほぼ同じ年代のものと考えられる土坑の性格づけを少し考えてみたい。全部で27基が確認された土坑の中で、第31図に示したような遺物がまとめて検出され、それらの状況からある程度性格付けが検討されうるものに、1号土坑と11号土坑、それに22号土坑がある。

これらの土坑については時期的にはほぼ同じ年代と思われるが、形状や遺物の状況に若干差異が認められる。まず1号土坑であるが、そう深くない円形の土坑だが、顕著な袋状の形態を有するものであるところに特徴がある。縄文時代の袋状の土坑は、貯蔵目的としての性格をもつものが多いことが知られている。1号土坑からは数点の遺物が出土しているが、比較的小さな破片資料がほとんどで、廃棄の際などに紛れ込んだというような状況にあるといえる。

これに対し11号土坑と22号土坑は、ともにかなり整った円形プランを有し、壁の立ち上がりも直に近いもので、相互に似通っている。ここでとくに遺物の出土状況についてみると、11号土坑では円筒形をした藤内期の大型の深鉢形土器の比較的大きな破片（第31図19a・b）が、底面から5cmほどのレベルで、土器外面を上にしてほぼ水平に検出されている。また22号土坑では、比較的豊富な遺物が見られた中に、これも藤内期のいわゆる抽象文をもつ深鉢形土器（第31図24）の破片が、底面から数cmのレベルに並べられたような状態で見られ、他の土器片や数個の20cmほどの砾がその上に重なるように出土している。この2つの土坑は形態ばかりでなく、1つの深鉢形土器の個体が破片で底面近くに、平らに検出されるという、主たる遺物のあり方にも類似点が見いだされるのである。そこで次にそうした土坑の性格が問題となってくるわけであるが、2つの土坑に対しては土壤（覆土）の科学的分析等は実施していないので、明確な根拠こそないが、類例や該期の土坑についての研究（文献2）の成果に基づきながらいうなら、埋葬施設すなわち墓坑を見ることが出来るのではないかと思われる。

以上3基の土坑について、その性格を考えてみたわけであるが、1号土坑は貯蔵穴、11号土坑と22号土坑については墓坑との判断をもって調査所見としておきたい。

(3) 陥し穴

陥し穴は、前章第1節でふれたように、全部で19基が確認されたが、これは現地調査の段階から、底部に1~数個の小孔が見られることにより明らかに陥し穴の遺構として認識できるもののみを陥し穴として扱ってきたものである。陥し穴は、これまでの調査研究の中で、全国的に確認され、それについての論考も重ねられてきているが、調査段階ではその辺を十分承知しきれないでの対応であったため、底部に小孔のない形態を念頭におかないと進めた部分もあったので、前章第3節で年代不明の遺構として扱った20基の土坑の中には、いくつか小孔を持たないタイプの陥し穴が含まれているかも知れない。また、小孔を伴う19基の陥し穴もすべて明確な遺物を伴

うことがないものであり、遺跡の雰囲気からそれらを一括して縄文時代の、しかも中用の陥し穴と考えてきている。果たしてすべてそこに収まるものかどうか、さらに詳細な検討を要するものである。ただ加えていえば、底部の小孔については、いくつかの陥し穴で、掘削した図面には表現し切れていないが、現地での観察では、少し大きめの小孔をうがち、その中に逆茂木ともいわれる木杭を植え込んだ状況が見られるものがあった。これは、県内の調査事例で清里バイパス第1遺跡に見られた中に、それは古代以降の年代が与えられているものだが、底面に木杭を打ち込んだ状況が確認されている（文献3）とは、様相を異にしていると思われる。また丘の公園第2遺跡や同第5遺跡で観察されている鉄鋤先のような工具痕（文献4）も確認されなかった。今回の調査区が全体的にかなり後世の土地利用の中で、地形が改変されている部分があり、個々の陥し穴の深さがオリジナルなものにどの程度差異があるのか、個々の陥し穴が掘られた位置が当時の地形の中でどのような占地であったのか、同時に存在性と相互の位置関係はどうかなど、先程の帰属時期の問題と加えて、検討する課題が多く残るが、これまでの調査例が本遺跡の近辺には無く、環境的に近いところの事例の追加を持ってのこととしたい。

（4）黒曜石の供給

調査区内から、遺構の内外を問わず、また製品と薄片とをも問わず、採集された黒曜石について、分析に向かわない数点をのぞいた20点を対象に、蛍光X線分析法での産地同定を実施した。これは縄文時代の交易の実態を確かに把握できる手段が確立している黒曜石について、より多くのデータを確保する目的で行ったものである。今回の分析の中だけで結論が出るという性格のものではないので、前章第5節の詳報の中の成果の要点のみを再確認しておくと、長野県中部の諏訪～茅野の北郊エリアの山岳地帯に産出するものが18点（90%）で、残り2点（10%）は伊豆神津島エリアに産出するものもたらされていることが判明した。

第2節 中世の遺構・遺物について

（1）竪穴造構および溝状造構

中世の時期の調査成果についてだが、まず竪穴造構は1号から3号までの3軒が確認された。3軒とも半分近くが調査区外にかかっているなどして、完全な形ではなく、またこうした時期のこのような形態の遺構が類例に乏しいため、積極的に建物跡といわず、竪穴造構としてきたが、おそらく何らかの性格を持った建物跡を見てよいと思われる。3軒といつても、1号竪穴造構と3号竪穴造構の間に前後関係があると見られ、すべてが同時存在したというわけではない。

いずれも上屋の構造を考えさせられるような柱穴などは明確にされなかった。しかし、1号および3号竪穴造構に見られた緩やかに立ち上がる竪穴内壁におけるいくつものビットは、建物構造に関わるものと推測され、また人頭大の自然礫は、当否は別にして、中世の絵画資料などに見られる板屋根に載せられた重しの石を想起させるものがある。1号竪穴造構の床面はかなりよく硬化しており、長時間使用されたことがうかがえる。またその硬化面には部分的に被熱を受け赤化した状況も認められたが、これは建物の性格を考える手がかりになるのではないかと思われる。2号竪穴造構は他のものと若干方向を異にしているように見られるが、遺存状態がよくないので、確かなことはいえない。ここでは床面の一部を方形に掘り込み石を土留めにした石組み施設と呼ぶべきものが見られた。3号竪穴造構は方向を1号とほぼ同様とするが、掘り込みも浅く、床面の硬化度合いも弱いものであった。

これらの遺構の年代と性格が問題であるが、年代的には明瞭な遺物が伴わないので断定的にはできない。一応覆土中の土師質土器の破片資料から16世紀代が考えられるが、あるいはそれより遡るかも知れない。また建物の性格づけであるが、3軒とも同じだったか定かにし得ないが、状況的に見てほぼ同じか相互に関連を持つ建物といえるように思われる。1号竪穴造構の床面の硬化度や赤化箇所の存在、また赤化部付近の床面に検出された銅製品の断片資料（第37回212）など、さらに2号竪穴造構に見られた石組み施設の存在などを考えあわせると、調査所見の城を外れまったくの推測となるが、何かの工房跡ではないかと思われる。推測を付け加えれば、1号竪穴造構の銅製品残欠は、当時貴重であった銅製の何か容器のようなものを割り壊し、再溶融させる過程のもののように見られ、床面に残る強い被熱の跡はそうした作業に係るものではないかと受け止められたものである。

これら3軒の建物跡と関連性がうかがえるのが1号溝の存在である。近からず遠からずというところにある。溝というより緩やかな北向き斜面である当該地を流れ下る流路であり、現在でも調査区の西脇を流れ下っている水路の状況を勘案すると、おそらく常時適度な水流があったものと思われる。この溝跡内には、土師質土器や内耳系土器、それにすり鉢など、多くの日常生活に関わる中世土器が破片の状態ではあるが点在しており、当時の生活と密着していたことが想像に難くない。溝跡内の遺物の中には底の砂に埋もれていた北宋銭の「元豐通寔」（同図214）や海岸で検出された馬の歯（同図213）もあったが、後者などは水枯れの時などに行われた祭祀に結びつく可能性もあり注意されよう。

(2) 9号土坑および27号土坑

結論的に言つて、それぞれ16世紀代の墓坑である。27号土坑には、状態はよくないがそれでも明瞭な形で人骨が遺存したので、確実に墓坑といえる。人骨は成人で、形質鑑定の所見によれば、芋積み作業のような生業に長く從事したことを物語る特殊な摩耗が前歯に残されていたとの点が注意をそそる。この人は頭を北向きにして西面、四肢を屈し横臥した状態で葬られたが、いわゆる六道鉄などのよう、これといった副葬品は与えられなかつたと見られる。遺骸が埋葬された穴の上には、甕が並べられていた。この27号土坑は、2号竪穴遺構の中に掘り込んで造られており、2号竪穴遺構より年代が下がり、16世紀も後半代ではないかと考えられる。

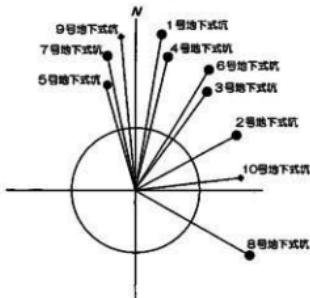
9号土坑については、遺体は痕跡をとどめていなかった。長径1.75m、短径1.35mの長円形であるが、土坑の底面から10cm前後のレベルで、土師質土器の皿が3点まとまって見られたのが一つの手がかりである。その状況は大きめの皿に、灯明皿として使われていたことがある小振りの皿を伏せ、さらに同様な皿をその脇に配している。完形の皿をこのように用いた葬法が中世に見られることは、甲府市桜井烟遺跡の土坑墓などいくつかの事例があつて、ここでの状況もそうしたよく見られるものに合致していると理解される。土坑の大きさは人が横たわって丁度よいもので、おそらく頭部を北寄りに向かしたものであろうが、その場合組み合わされた皿は胸の辺りにくるものである。なお、桜井烟遺跡は六道鉄と見られる銭貨を伴うが、ここでは27号土坑と同様にそれは見られなかつた。この9号土坑は4号地下式坑と同心円的に重複するもので、4号地下式坑が落ち、埋まりきって後に同じ場所にそれよりやや小さめに掘り込んで営まれたもので、4号地下式坑より後出であることは間違いない、皿の年代観の併せて見て、初めにふれたように16世紀代と見られるものである。

(3) 地下式坑

地下式坑については、全国的な調査事例が蓄積されてきており、これに関わる論考も多く著されてきた。もとより地下式坑は、「地下式土倉」「地下室」「地下式塙」、さらには「地下式土壙」など、いくつかの呼称がなされ来ている。これらの呼び方は、その機能を前提としたもので、地下式土倉や地下室は江戸遺跡などで見られる明らかに火災などに備えた貯蔵目的とされているものを前提とした呼称で、地下式塙ではそれが埋葬に結びついたもの、すなわち墓制に関する遺構ということになる。また「地下式土壙」については、それらを総称するものという理解も行われている（文献5）。

本報告で「地下式坑」としたのは、地表面から地下に入口に当たる「竪坑」を真っ直ぐ掘り、竪坑の底部から横方向に掘り進んで、施設の主体となる「主室」（地下室）を造ることによって出来た遺構を指し、当初段階ではそれが墓制に関わると断定されない状況であったのであえて「塙」の字を「坑」に置き換えて調査を進めてきたものである。

今回の調査では1号から10号までの地下式坑を確認した。その分布状況は第22図に示したとおりであるが、相互の位置関係にあまり規則性は感じられない。主軸の方向について見ると、第40図に示したように南北方向に取り、入口部である竪坑が北側に来るものが多い。いずれも年代や性格を特定できる直接的な遺物を伴わない。このため明確にいえることは少ないが、感觸的な所見となることを許されれば、主室が平面的に大きく、また断面形なども直方体に近く掘られている5号地下式坑などが年代的に古く、次第に主室が丸みを帯び、小型化していくという変遷があるのではないかと思われる。主軸方位で言えば、真北に近い1号から5号までのようものが先行し、それから次第にそれでいて、最も離れた、そして最も規模の貧弱な8号地下式坑が終段階に位置づけられるように見受けられる。



第40図 地下式坑の方位

別に注意が必要な10号地下式坑を取り合はず除外すると天井部が残存したのは2号と3号の2つだったが、天井部の残存の有無については、掘り込まれた深さや主室の広さによるものと掘り込まれた場所の地耐力や後世の主室上部への荷重の掛け方などによるものなどの複合的な要因によって決まったのであり、年代等は直接的な問題ではないと思われる。

10基の地下式坑のうち、7基までが単独に存在し、5号地下式坑と9号、10号地下式坑の3基は連絡し合う状態であった。とくに9号、10号の両者は大部分が調査区外にかかり、また危険性などの問題もあって、完全に全貌を把握したわけではないが、5号と9号は竪坑を共有し、10号は主軸を直交させ9号の副室的に掘り込まれたように見受けられた。構築の順序性は5号→9号→10号と推定されるが一定の同時性も考えられる。

第7表 県内地下式坑地名表

No.	遺跡名	所在地	確認基数	出土遺物	その他の中世遺構	年代	文献
1	中村道祖神道跡	北巨摩郡明野村曳尾178	45基	土器片、石器片、瓦片等、内耳土器、灰陶器、人骨等	土坑2基、土壙墓14基	15~16世紀	明野村教育委員会「千野木「中」の下道路・掘立柱石道跡・中村道祖神道跡」明野村文化財調査報告書 1990
2	神取道路	北巨摩郡明野村神取	6基	石臼片、石臼	土坑4基		明野村教育委員会「神取一帯宮闇跡整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」明野村文化財調査報告書 1994
3	小和田船跡	北巨摩郡長坂町大田8535番外	1984年度 15基 1985年度 12基	土師質土器、内耳土器、灰陶器、人骨等	土壙窓、竪穴状造構29軒、石組造構2軒、油立て柱建物跡1軒、塗覆上より天目茶碗、罐等		長坂町教育委員会「小和田船跡(北巨摩郡長坂町大田8535番外)」長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書 1984
4	小和田北遺跡	北巨摩郡長坂町大田2562番外	2基	*窓上より土師器片、須恵器片、中世陶器片、土器片	土坑44基、掘立柱建物跡1軒、住居跡3軒、溝1条、渠石造構1基	15世紀代 (一部)	長坂町教育委員会「小和田船跡(北巨摩郡長坂町大田2562番外)」長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書 1986
5	横森前遺跡	北巨摩郡高根町横森前636	27基	瓦器、人骨等、*窓上より土器片、須恵器片、中世陶器片、土器片	土壙38軒、窑穴状造物跡4軒、石組造構4軒、掘立柱建物跡1軒、塗覆上より天目茶碗、罐等	15~16世紀 (一部)	山梨県教育委員会ほか「横森前遺跡(北巨摩郡高根町横森前636)」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第164集 1999
6	金生遺跡(B区)	北巨摩郡大泉村谷戸	49基	古瓦、土師質土器片、内耳土器片、須恵器をした鉢形の水滴、鐵製茶入れの底部、五輪塔の本輪、三足付土師質土器	土壙188基、土壙窓2軒、窓上状造物跡14軒、石組造構4軒、溝状造構4条、窓上柱建物跡10軒、住居跡7軒	15世紀代	山梨県教育委員会「金生遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第39集 1988
7	御所遺跡	北巨摩郡大泉村谷戸御所	1基				山梨大学考古学研究会「御所遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 1978
8	谷戸城北	北巨摩郡大泉村谷戸	1基				八幡山若木「中世城跡」について――山梨県内の農業遺存を中心として――「甲府市のとよおきの世界」農業遺産を守る会品文部、同文書刊行、角川書店 1989
9	上行境内	北巨摩郡大泉村寺	1基				同上
10	東経神B遺跡	北巨摩郡大泉村西井出字東家経神	4基	*窓上より土師質土器片、内耳土器片、铁製品	掘立柱、土壙(墓塚を含む)、溝状造構		大泉村教育委員会「東経神B遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 1983
11	吉原遺跡	北巨摩郡小瀬沢町久保	2基				小瀬沢町教育委員会「吉原遺跡」1986
12	上原遺跡	北巨摩郡武川町宮室	1基				山下孝司「上原遺跡」「丘陵」9 甲斐丘陵考古学研究会 1982
13	伊藤塗第2遺跡	韮崎市穴山町字伊藤久保地内	3基	土師質土器、内耳土器			韮崎市教育委員会ほか「伊東塗第2遺跡――埋蔵文化財発掘調査」1991
14	長田口遺跡	中巨摩郡御影町平岡字長田口	13基	土師質土器片、窓上、*窓上より古线(天宝元年など)、内耳土器片、土師質土器片	土坑45基		山梨県教育委員会ほか「長田口遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第82集 1993
15	上野山遺跡	中巨摩郡御影町上野字上野山	1基	土師質土器			敷野雅彦「御影町上野山遺跡調査報告書」山梨県考古学研究会誌 第2集 1988
16	牛石遺跡	甲府市上春日町	1基	土師質土器、炭化物			信濃祐仁「甲府市上春日町牛石地下式「壠」(丘陵)」10 甲斐丘陵考古学研究会 1984
17	柳道遺跡	東八代郡一宮町	1基				山梨県教育委員会ほか「柳道」(1)「柳道遺跡(柳道)」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 1976
18	上の原下削跡	東八代郡御坂町上原字下削の原	10基	刀子	竪穴造構3軒、溝1、土坑2基	15世紀代	*本報告
19	古屋敷遺跡	富士吉田市大見	2基	中世陶器器、石臼、古銭(確定通鑑)など			富士吉田市教育委員会「古屋敷遺跡」1983
20	原平遺跡	大月市大月町真木字沢中原	1基	石、石臼片、土師器、麻布の炭化物			山梨県教育委員会「山梨県中巨摩郡原平遺跡(中巨摩郡原平)」山梨県考古学研究会調査報告書 1975
21	古久保遺跡	大月市笛子町古久保	3基	木材片、石		平安時代以前	同上
22	牧野遺跡	北巨摩郡上野原町西万津521	1基	自然石30個			上野原町教育委員会「牧野遺跡」大曾根町、大曾根町、北巨摩郡上野原町埋蔵文化財調査報告書 1981

以上、10基の地下式坑について、いくつかの観点からまとめを試みたが、最後に全体的な年代と遺構の性格づけについてあらためて検討してみたい。先にも述べたが地下式坑自体に直接伴う年代判定の資料はない。二次的な手がかりとして、4号地下式坑が9号土坑と重複し、16世紀代（前半か）の年代が考えられる墓坑である9号土坑に4号地下式坑が先行することから15世紀代が導き出されてくる。これはこれまで考えられているこうした地下式坑の盛行年代と矛盾しない。

次に性格づけであるが、山梨県下では第7表にまとめられただけでもこれまでに21遺跡から192基が報告されおり、多くは15世紀代でいくつか16世紀にかかる状況にあるが、1989年に八巻與志夫は、金生遺跡の49基を手がけた所見とその段階での県下の事例集成に基づいて考察し、墓制に関わるものと理解する線上で「もがり」の場とのこの種の遺構の性格づけを行っている（文献6）。その後も新たな調査例の追加があったが、そこにも墓制とつながる見方がなされる成果が多く見られた。本遺跡の場合、10号地下式坑の主室内堆積土中より、刀子が1点確認された以外、遺構の性格づけに関する情報も希薄であるが、周辺にやや後出するが墓坑が営まれているのを見ると中世のこの時期には、当該地をある程度墓域と見る傾向もあったのかも知れない。それが正しければ、本遺跡の地下式坑は正に「地下式墳」と呼ぶことが出来よう。八巻は先の論考で地下式墳を営んだ階層はを中世土塁層と見て、「土塁層およびその一族で出家した人物が死亡したとき」に構築されるとの見通しを示し、地下式墳と土塁層の提点である中世城館や彼らが関わりを持ったと見られる中世寺院との関係を総合的に検討する必要があると述べているが、本遺跡の周辺に目をやると、遺跡の北方数百mのところに中世前期に成立した、本県最古の時宗寺院ともいわれる称頼寺が視野に入ってくる。中世の甲斐では時宗寺院は武士層との密接な関係があることが知られており、そうした雰囲気の中でここでの地下式坑群を見れば、墓制と関連づけた見方が濃厚になってくるが、断定するにはさらに歴史学的な見地からの分析も含め、詳細な検討を重ねる時間を要しよう。いまは調査所見と研究史の中での課題を対比するにとどめることとした。

第3節 わわりに

1999年の5月から8月まで約3ヶ月間、約3千m²余りの範囲を対象に実施してきた上の原下削遺跡の発掘調査の成果は、以上報告したとおりである。報告の終わりにあたって、これをまとめる中で、気付きながら十分に掘下げができず今後に委ねなければならなかった点にふれておきたい。

縄文時代の内容に関しては、遺物の分析が量的に多くなったこともあって踏み込みに欠けている。また陥し穴については本章第1節でもふれたが小孔の見られないタイプの抽出やそれを含めた細部の検討を欠いている。これらを含めた遺跡の立地論ないしは性格論をも考えていく必要があろう。

次に中世に関しては、やはり土師質器などの分析と年代観の提示が不十分となった。ここの遺構の性格づけとも関連する基礎的操作を決しておろそかにしたつもりはないが、他日を期して改めて検討が深められるべきところである。また竪穴構造や地下式坑などについては、当該地域が中世鎌倉街道に沿った要衝の地であり、そうした地域の歴史の陰影を深めていくためにも重要な資料であると認識されるが、周辺環境にある歴史資料との対比的な検討に時間を割くことが出来ずにつながり終わってしまっていることも今後に残した課題といえる。

この報告にはいくつかの不備もあると思うが、これについてはご叱正をいただきながら、成果が地域の歴史を考える上での基本資料として活用されていくよう、引き続き取り組んでいきたい。文末となったが、上の原下削遺跡の発掘調査にご理解・ご支援をいただいたすべての方々に感謝申し上げ、結語としたい。

（参考文献）

- 1 山梨県埋蔵文化財センター『年報』12 1996
- 2 小林広和「縄文時代の土壤について」「研究紀要」4 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 1987
- 3 山梨県教育委員会ほか『清里バイパス第1・2遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第124集 1997
山本茂樹「清里バイパス第1遺跡の陥し穴の若干の検討」「研究紀要」14 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 1998
- 4 山梨県教育委員会ほか「丘の公園第2遺跡発掘調査報告書—丘の公園地内遺跡範囲確認調査（第2次）報告書（丘の公園第5遺跡）—」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第46集 1989
山梨県教育委員会ほか「丘の公園第5遺跡発掘調査報告書」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第56集 1990
- 5 五段田遺跡調査会「五段田遺跡II—東京都板橋区五段田遺跡第二次発掘調査報告書—」 1991
- 6 八巻與志夫「中世地下式土壤について—山梨県内の調査例を中心として—」「甲斐の成立と地方的展開」磯貝正義先生喜寿記念論文集 同論文集刊行会・角川書店 1989

写 真 図 版



遺跡から甲府盆地東部を望む

図版 1



調査区全景（南から）



調査区南側の状況（西から）

図版2



調査前の景観（南から）



試掘調査実施状況



表土除去作業の状況



造構確認状況



調査区西側の調査状況



調査区東側の調査状況



調査区東南側の調査状況



造構測量の状況（2号鉆し穴）



造構調査状況（5号地下式坑）



造構調査状況（1号地下式坑）

図版 3



土層断面の実測（3号墳穴遺構）



遺構全体図測量状況（調査区南側）



遺構全体図測量状況（調査区東側）



バルーンによる空中写真撮影



発掘調査スタッフ



現地説明会実施状況



遺物復元作業



遺物実測作業



地元小学校への広報



「山梨の遺跡展' 99」での展示速報

図版 4



1号住居跡 試掘時確認状況



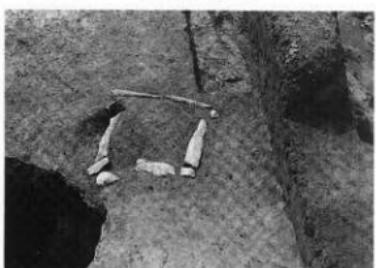
1号住居跡（東から）



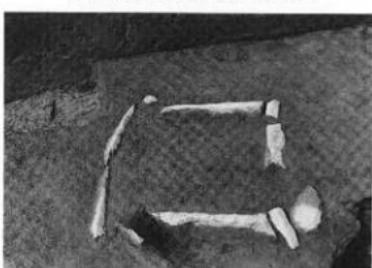
1号住居跡（北から）



1号住居跡と5号地下式坑の切り合い



1号住居跡石囲炉（西から）



1号住居跡石囲炉（北東から）



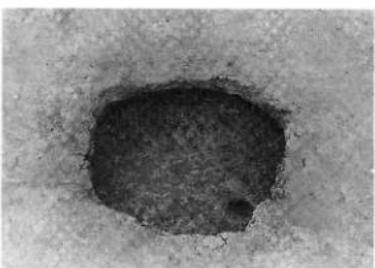
石囲炉の調査状況



石囲炉の掘り上げ状況



1号土坑 遺物出土状況



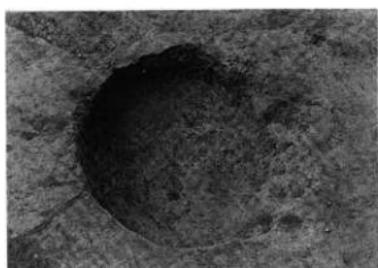
1号土坑 完掘



11号土坑 遺物出土状況



11号土坑 土層断面



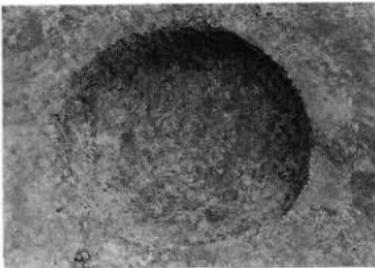
11号土坑 完掘



22号土坑 土層断面



22号土坑 遺物出土状況

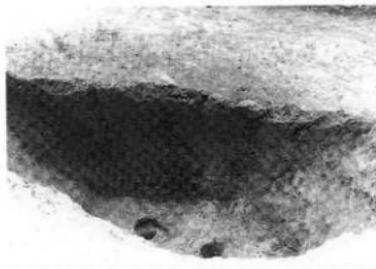


22号土坑 完掘

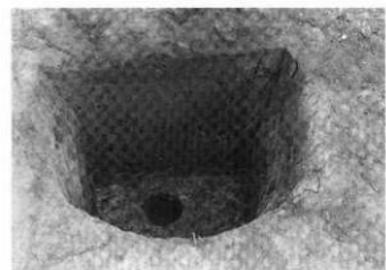
図版 6



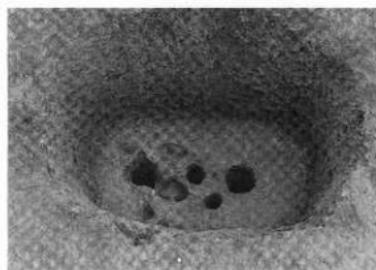
1号陷し穴



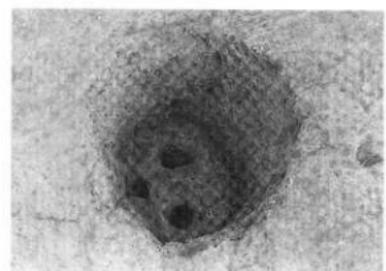
1号陷し穴 土層断面



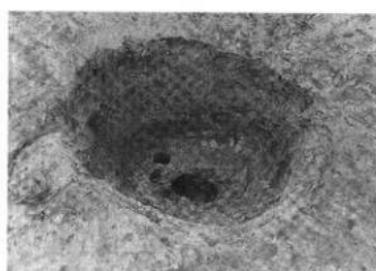
2号陷し穴 土層断面



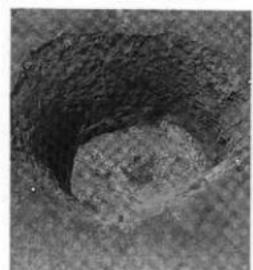
2号陷し穴



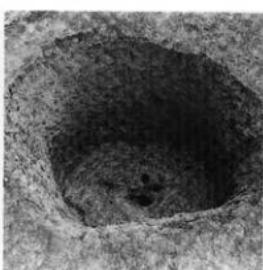
3号陷し穴



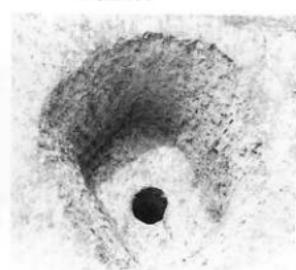
3号陷し穴



4号陷し穴 小穴確認状況

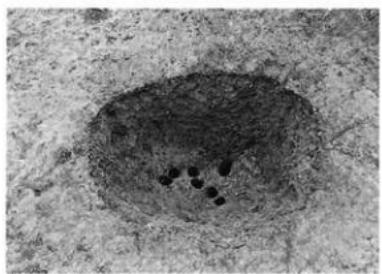


同右

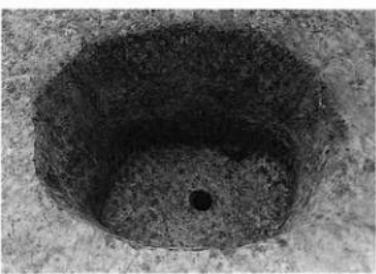


4号陷し穴 完掘

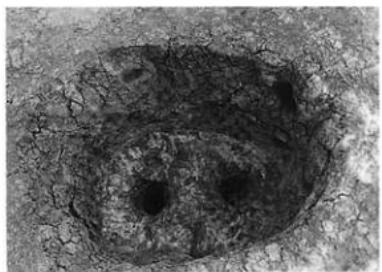
図版 7



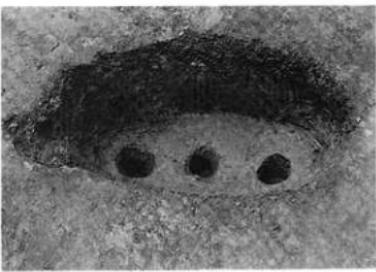
6号陥し穴



7号陥し穴



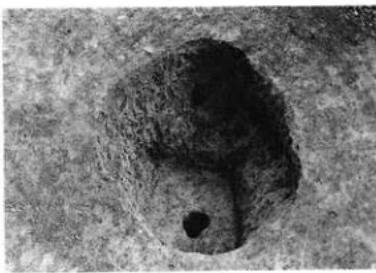
8号陥し穴



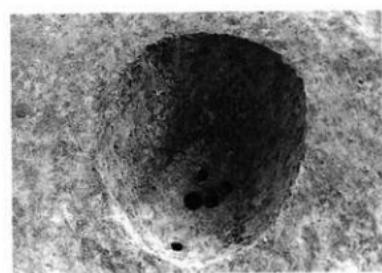
9号陥し穴



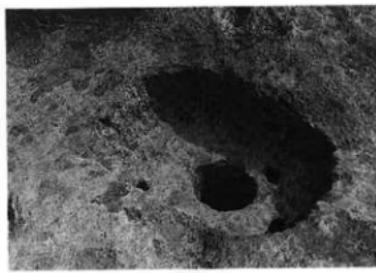
9号陥し穴 土壠断面



10号陥し穴



11号陥し穴

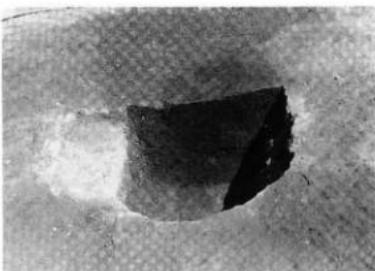


12号陥し穴

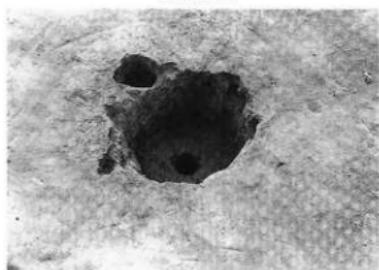
図版 8



13号陥し穴



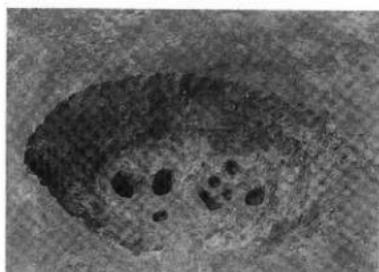
13号陥し穴 土層断面



14号陥し穴



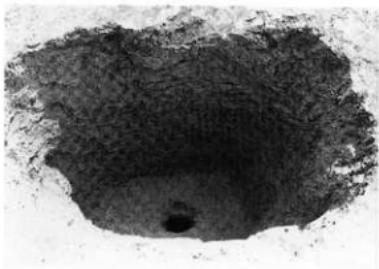
15号陥し穴



16号陥し穴



17号陥し穴



18号陥し穴



19号陥し穴



1号竪穴遺構（北から）



1号竪穴遺構 土層断面



1号竪穴遺構（南東から）



1号竪穴遺構 調査状況



1号竪穴遺構 完成状況（南から）



1号竪穴遺構 壁面の状況



1号竪穴遺構 床面の銅製品



1号竪穴遺構 壁面のひで鉢

図版10



3号竖穴造構（北から）



3号竖穴造構（東から）



2号竖穴造構（東から）



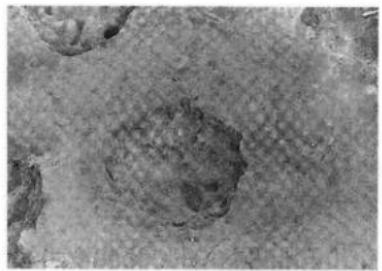
2号竖穴造構内の石組み施設



1号屋外炉（南から）



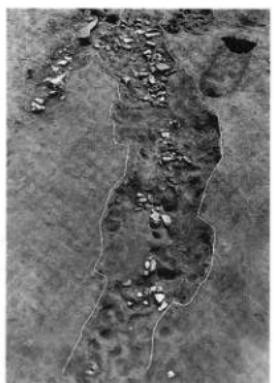
1号屋外炉（南から）



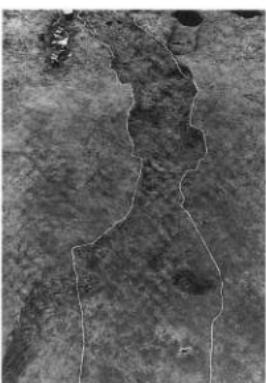
1号屋外炉 実掘状況（南から）



1号屋外炉 調査状況



1号溝（北から）



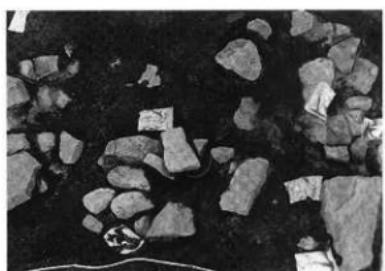
1号溝（北から）



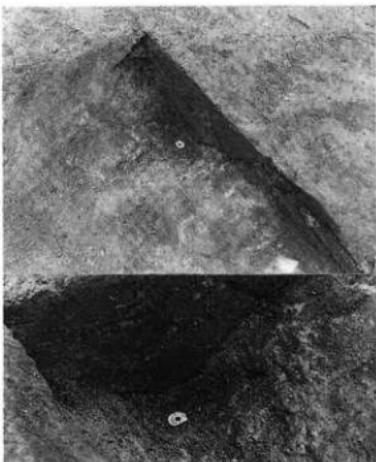
1号溝 遺物出土状況



1号溝 土器出土状況



1号溝 土器出土状況



1号溝 馬歯出土状況



1号溝 馬歯出土状況

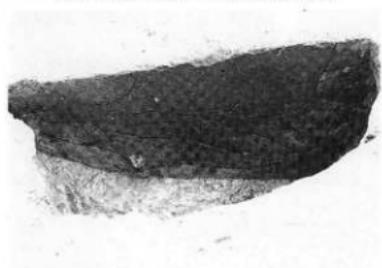
図版12



9号土坑東半（左）・4号地下式坑（右）



9号土坑 確認状況（南から）



9号土坑・4号地下式坑 土層断面



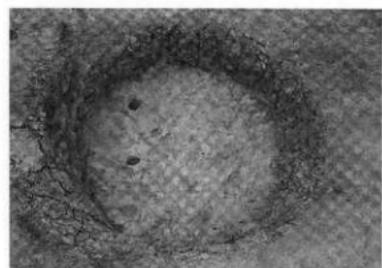
9号土坑 遺物出土状況



27号土坑 掘出状況



27号土坑（南から）

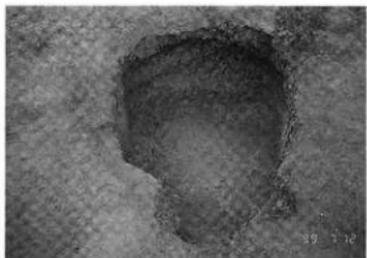


27号土坑 完掘



27号土坑 人骨出土土器

図版13



1号地下式坑（北から）



1号地下式坑 土層断面



1号地下式坑 竪坑から主室への状況



1号地下式坑 竪坑土層堆積状況



5号地下式坑・9号地下式坑（南から）



5号地下式坑（北から）



5号地下式坑 竪坑・袖壁



9号地下式坑（北から）

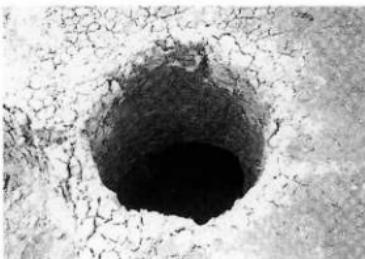


5号地下式坑 主室（北から）

図版14



2号地下式坑 入口部



3号地下式坑 入口部



2号地下式坑 猗門（内から）



3号地下式坑 猗門（内から）



2号地下式坑 壁坑調査状況



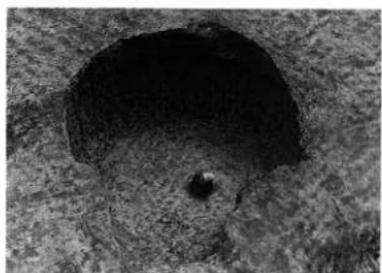
3号地下式坑 主室内東壁の工具痕



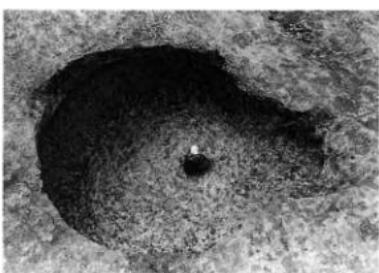
2号地下式坑 猗門確認状況



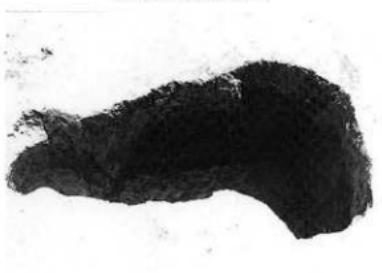
3号地下式坑 壁坑土層堆積状況



4号地下式坑（北から）



4号地下式坑（東から）



6号地下式坑（西から）



6号地下式坑調査状況



7号地下式坑（北から）



7号地下式坑 土層断面



8号地下式坑（東から）

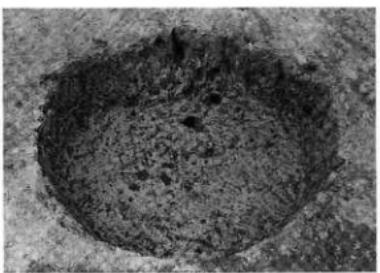


8号地下式坑（北から）

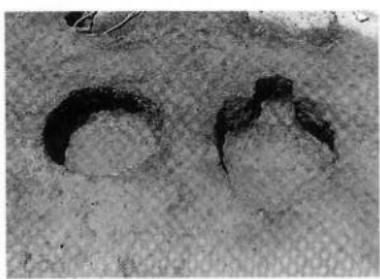
図版16



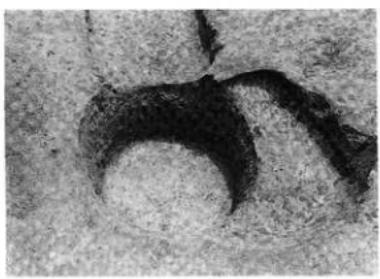
2号土坑



7号土坑



10号土坑（右）・17号土坑（左）



14号土坑



23号土坑



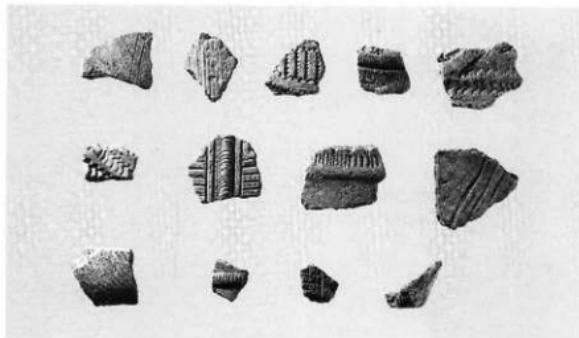
24号土坑



25号土坑



26号土坑



1号住居跡 出土土器



1号土坑 出土土器

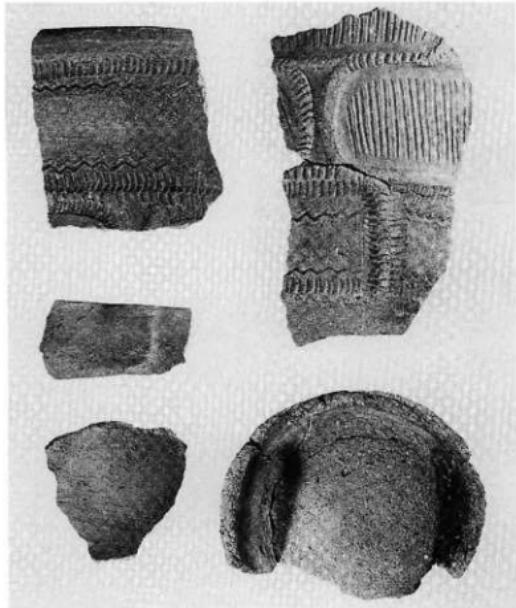


1号住居跡 土器片錐



11号土坑 出土土器

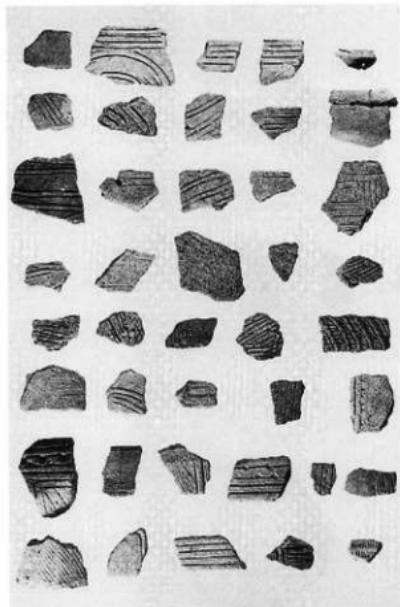
図版18



22号土坑 出土土器（1）



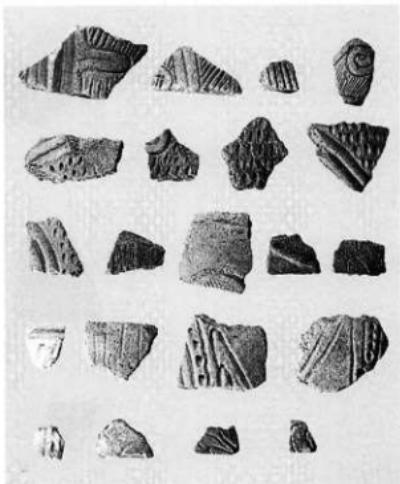
22号土坑 出土土器（2）



縄文土器一遺構外（1）

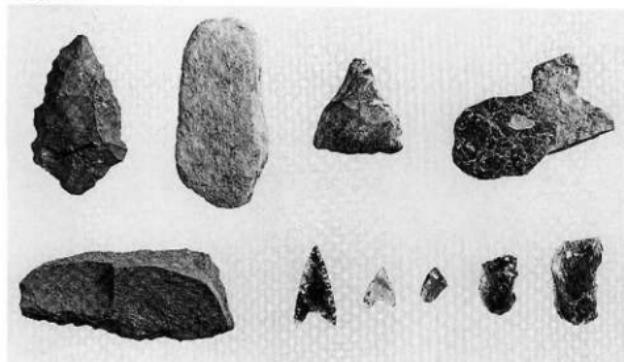


縄文土器一遺構外（2）

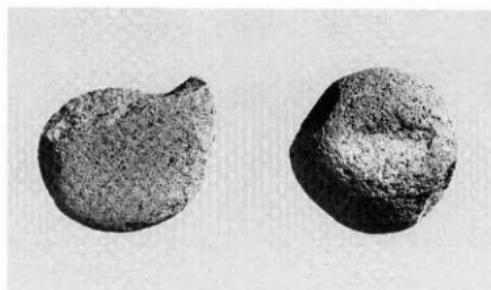


縄文土器一遺構外（3）

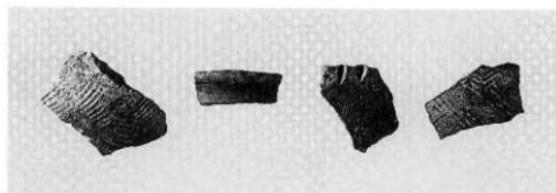
図版20



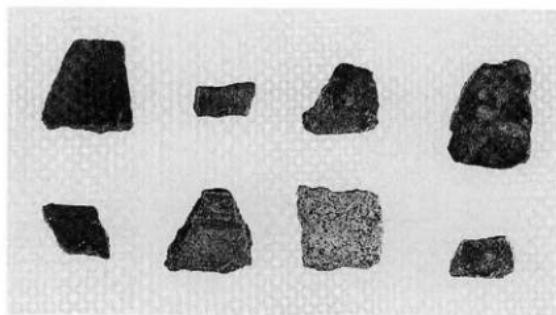
縄文石器（1）



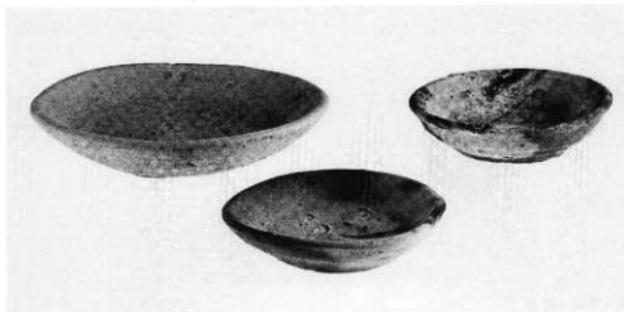
縄文石器（2）



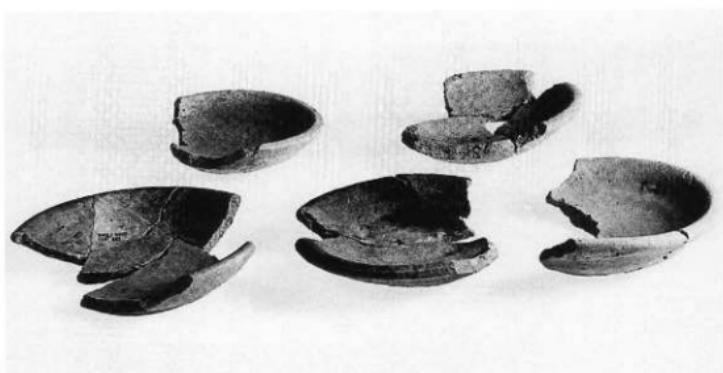
弥生土器（1）



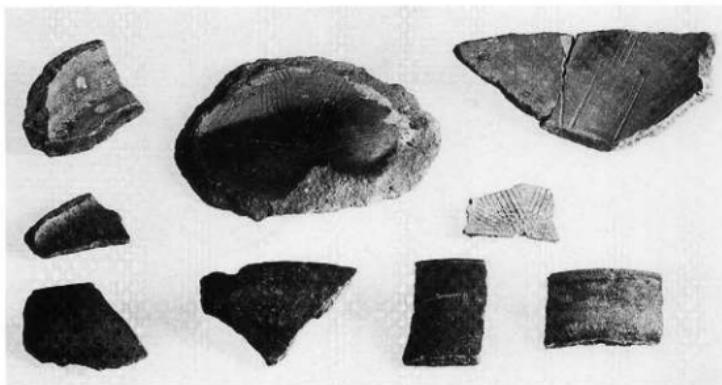
弥生土器（2）—赤彩—



9号土坑 土師質土器

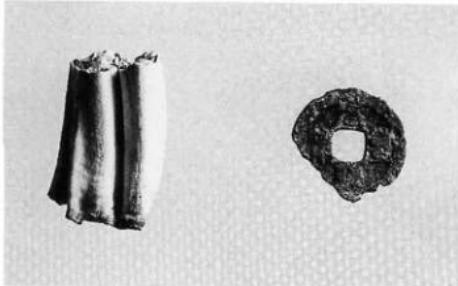


1号溝 土師質土器



1号溝 内耳系土器・すり鉢ほか

図版22



1号溝 馬齒・錢貨



5号地下式坑 刀子



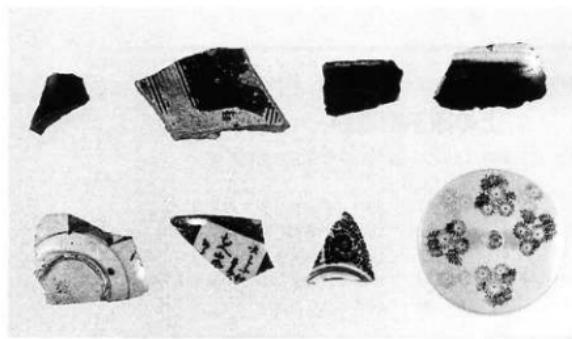
1号竪穴造構 ひで鉢



1号竪穴造構 銅製品残欠



造構外 錢貨・石板・碁石



造構外 陶磁器

報告書抄録

ふりがな	うえのはらしもわりいせき
書名	上の原下割遺跡
副書名	国道137号（上黒駒バイパス）建設に伴う発掘調査報告書
巻次	(全1冊)
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第186集
著者名	出月洋文・長田雅巳・望月郁也
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL.055-266-3016
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部
発行日	2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上の原下割遺跡	山梨県東八代郡 御坂町上黒駒 字上の原下割4489外	19322		35° 35' 61"	138° 42' 36"	1999(H11)年 5月10日～ 8月9日	約3,000m ²	国道137号 (上黒駒バイパス)建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上の原下割遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 土坑 陥し穴	1 4 19	縄文土器・石器など
		中世	竪穴遺構 溝跡 地下式坑 土坑(墓坑)	3 1 10 2	土器類-土師質皿・擂鉢 内耳土器・陶磁器など 石製品-ひで鉢 金属製品-容器片・錢貨 自然遺物-人骨
		年代不明	土坑21・屋外炉1		御坂町城では初の地下式坑群の検出

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第186集

上の原下割遺跡

—国道137号（上黒駒バイパス）建設に伴う発掘調査報告書—

印刷日 2001(平成13)年3月30日
 発行日 2001(平成13)年3月30日
 編集 山梨県埋蔵文化財センター
 発行 山梨県教育委員会・山梨県土木部
 印刷 株式会社 ミネヤ

